

なぜ今「自賛史観」かⅢ

今月の発信—あこら新宿



230号

◆消すことのできない真実

——「慰安婦」問題の教科書記述をめぐって

吉見 義明

◆女性への暴力は人権侵害

——女性の視点で「慰安婦問題」を考える

松井やより

◆「従軍慰安婦を教科書に」をどう思うか

——宝塚第一中学校三年生の作文から

そのときあなたは声が出ますか？

——ケンタッキーフライドチキン・セクハラ事件へ、女たちの証言

〈連載〉母を語る3 祖母・母・わたし——女三代の百年

広田 寿子

日米軍事マニユアルの出現 増田れい子 1

消すことのできない真実——「慰安婦」問題の教科書記述をめぐって 吉見 義明 2

女性への暴力は人権侵害——女性の視点で「慰安婦問題」を考える 松井やより 40

「従軍慰安婦を教科書に」をどう思うか——宝塚第一中学校三年生の作文から 54

「自賛」「自虐」史観に思う 前田 享子 86

そのときあなたは声が出ますか？

——ケンタッキーフライドチキン・セクハラ事件への証言 88

TOPICS 納得できない「新・日米安保」／女子保護規定、ついに撤廃 ほか 96

集会から ウィン祭り1997／シンポジウム「教科書に真実と自由を」ほか 101

気になる英語 PSTD (ポスト・トラウマティック・ストレス・ディスオーダー) 奥川 睦 106

沖縄から ガイドライン見直し中間報告に強い反発／「名護ヘリポート基地建設」を許さない ほか 108

阪神から 「災害被災者等支援法案」 市民Ⅱ議員議員立法が継続審議へ 110

語りかけたあなたへ 5 母の手 大里 知子 112

〈連載〉母を語る 3 祖母・母・わたし——女三代の百年 広田 寿子 114

日米戦争マニュアルの出現

増田れい子

ただならぬ六月の日本である。

降りしきる梅雨の雨脚にみとれるのも、思いがけなくさわやかに陽の照り渡る梅雨の晴れ間にあうのもことのほか好きな私だが……ことしの六月はおだやかでいられない。

昨夏、堀山官房長官が講演先で「戦後の日本の大きな錯誤は、自衛隊を強固なものにしておかなかったこと、有事立法をしなかったことだ。飛行機なんかプラモデルと同じだ。では何によって戦うのか。有事立法しかない。有事立法は平和のときに考えてやっておかないといけない」(毎日新聞96年8月9日付より)と発言したあたりからいよいよ来るぞ……と身構えていたが、いわゆるガイドライン(日米防衛指針)中間報告の発表(97年6月8日)で、有事法制の制定につつま走る意図がはっきり示された。

憲法より日米安全保障条約(実質は軍事同盟)を優先する戦後の歴代保守政権にとつての最終課題は、この有事法制の制定にあるのだ。中間報告の発表は「いよいよやりますよ」のオペレーションである。

六月九日付の朝日新聞夕刊の「素粒子」は「英字紙は簡明だ。見出しに〈日米の戦争マニュアル〉としたい、第二次大戦後、アジア太平洋地域で、日本が最も強く軍事的輪郭を現す、包括的な戦争マニュアルだ」と書いた。なお、英文の報告のなかでbilateralという単語が三十六も出てくるといふ。日本語訳では「共同」としているが真の意味は「双務」であり、要するに日本への攻撃がなくても軍事行動を共にすると取るのが妥当ということだ。

まさに九条破壊の日米戦争マニュアルの発表である。しばらくの間、このマニュアルを人目にさらし、日本の周辺にいかにも「有事」がたちこめているような情報の操作を行い、有事法制という戦争法制をデッチあげる段取りだろう。そうしていまのような翼賛国会では沖縄特措法や女子保護撤廃法(修正均等法)のように違憲の法律がやすやすできてしまうかもしれないのだ。「誰も皆間違つてしまえば間違いは消滅する」(芥川龍之介)。間違いたくないものが一人でも多くなるように、〈あごろ〉と共に生きていきたい。

消すことのできない真実――

「慰安婦」問題の教科書記述をめぐって

吉見 義明

事実を隠して誇りが持てるか

一番最初に、歴史の事実をみつめるということとはどういうことなのかということをお話しします。岡山県議会が主旨採択をした陳情というのは、『慰安婦』の記述を中学校の教科書から削りなさいということですが、それは「隠す」ということだと思ふのです。隠すことが日本人の誇りにつながるかどうかということを最初に考えてみたいと思います。

私は中央大学で商学部 of 学生を対象にして歴史学の講義をしておりますが、その歴史学の講義やゼミの中で学生たちの意見を聞きますと、中学校や高校で教えられなかった、あるいは考える材料を隠されることがあるということについて、みんなは非常に不快感を感じているということがわかりました。そういう事柄を学んでどういうふうに感じるのか、考えるのかということは各人の判断に属することですが、考える素材を隠されることほど不愉快なことはないということだろうと思ふのです。

このような問題をめぐっては、日本でもずっと繰り返して議論があるわけです。歴史教育のときに必

ず愛国心ということが持ち出されますが、例えば一九五六年ごろに昭和史論争というものがありません。岩波新書で『昭和史』という本が出されまして、それに対して日本浪漫主義の流れをくむ亀井勝一郎さんという方が「人間が描かれていない」という批判をされました。

愛国心は、学んだ結果生まれるもの

それとの関連で、誇りとは何かということが議論されたと思うのですが、保守的な立場に立つと思われる亀井勝一郎さんは、「現代歴史家への疑問」という文章を『文藝春秋』一九五六年三月号に書いておられます。その言葉を紹介してみたいと思います。

「歴史教育のとき、必ずと云つていゝほど『民族的な愛情』とか、愛国心をもち出すのは一種のマンネリズムではなからうか。私は民族的愛情や愛国心を尊いと思ふが、それは歴史とか古典とかを学んだ結果として自然に出てくることで、学ぶ前に言ひ出すべき筋合のものではあるまい。国を愛する心と同じ程度に、国を憎む心が湧いてくる場合もある。歴史を学んで憎国家になる人間が出てきていゝ。たゞ、さういふ人が、模範の国を必ずどこかの外国に求めて劣等感を抱くのがいけないのだ」

当時こういう議論をしていたわけです。これよりもずっと時代が下がったところで「隠しなさい」という議論が出てくるというのは、戦後の論争や歴史研究の成果からほとんど何も学んでいないのではなにかという気がいたします。隠すことが誇りにつながるという単純な発想よりも、むしろそれを明らかにしたうえでどういふふうにかという議論をすることが今必要になつていないのかと私は思います。

「従軍慰安婦」問題は、現在のな問題

私が「従軍慰安婦」問題（以下、カッコ省略）に取り組みはじめたのは一九九一年十二月です。韓国人の元慰安婦であったキム・ハクスン（金学順）さんが初めて名乗り出て、ほかの二名の元慰安婦の方や元軍人、軍属の方と一緒に東京地裁に提訴をされました。そのときに、「真実は何だったのかということを日韓両国の若者に知ってほしいと思って、自分は提訴した」というふうにおっしゃっていたのです。

その話を聞いて、これは歴史家の仕事だと思って取り組みはじめたわけです。それから五年ほどたちました。この間にいくつかの大事なことを学んだのです。三つほど申しあげてみたいと思います。

一つは、被害者が存在しながら一九九二年まで無視されていたということです。このような性的被害を受けて、それを訴え出るまでに五十年かかったというところで、それだけこの問題が隠されていたということは、どういうことなのかということです。実は従軍慰安婦という存在があるということはみんな知っていたわけですが、そのような制度によって被害を受け、現在も苦しんでいる人がこの同じ世界にいるということに私たちが気がつかなかった、あるいはそれが重大な人権侵害であるということに気がつかなかったということです。ようやく五年前からそういうことにわれわれが気づかされたということを感じているわけです。

二番目にこの問題との関連で、被害者を考えてみますと、日本人の元慰安婦の方もおられるわけですが、大多数は朝鮮人、中国人、インドネシア人をはじめとした東アジア、東南アジアの人々です。オラ

ンダ人女性が被害にあつたケースもありますが、日本人以外のアジア人の女性であるわけです。そうだとしますと、このような問題を考えるうえで、人種差別ではなかったかということ、また、アジアや世界に通用する歴史認識をどういうふうに持つのかが問われているということです。同じ歴史観を持つ必要はないと思いますが、通用する歴史認識を持つことは必要だと思います。そのことが問われはじめているというふうに私は感じます。

三番目に、この五年間に気がついたことは、取り組みはじめたときには同じような問題が今の世界で再び起こることはないだろうと思つていたわけですが、その後旧ユーゴの紛争で「民族浄化」とか集団レイプという問題が出てまいりました。現在の各地の戦争でも同じようなことが繰り返し起こる可能性があります。また、ついこの前、沖縄では小学生の少女がアメリカ兵にレイプされるという事件も起こっているわけです。軍隊と性をめぐる問題や、戦時における性暴力の問題が現代の世界で繰り返し起こっているということです。

これをどうやったらなくすことができるのかということを考えていく必要があるわけですが、一つには、この従軍慰安婦問題のような問題がきちんと解決されないから、繰り返し同じような問題が起こるのではないかということに私たちは気がつきはじめています。こういうことを考えていくことが必要なのではないかというふうに、いま痛切に思っています。

〈自由主義史観研究会〉の四つの論拠

ところで、岡山県議会などで削除を求める陳情が主旨採択されたということですが、その論拠は、た

ぶん東大教育学部の藤岡信勝教授が主宰しております〈自由主義史観研究会〉の言い分が元になっていると思います。そこに出ている論拠を見てみますと、四つが主要なものだろうと思います。

一つは従軍慰安婦という用語の問題。二番目は強制連行はなかったという議論。三番目に、日本軍だけを採り上げるのは公平ではない、アンフェアだという考え方。四番目に、中学生に歴史の暗部を暴くのは無意味だという主張があります。

この四つの主張を考えてみますと、二つの異なる問題があるような気がいたします。一つは事実はどうであつたのかということ。もう一つは、事実がそうであつたとしても、それを中学校で教えるのはどうかという、少し次元の違う問題ですが、それがくっついて出てきているという感じがいたします。

「従軍慰安婦」という言葉は妥当か

それぞれにいちいち反論する必要もないと思うのですが、ここではこの四つの議論を話のつかかりとして、「従軍慰安婦」問題というのはどういう問題だったのかということを考えてみたいと思います。

まず一番目の「従軍慰安婦」という用語の問題ですが、藤岡教授は「従軍看護婦、従軍記者といううな言い方をする場合の従軍という言葉には、軍属という意味がある」という趣旨のことを言っておりますし、陳情でも言っているようです。

しかし、「従軍」にはそういう意味はありません。これは辞書を引いていただくとわかりますが、例えば『広辞苑』では「従軍」については「軍隊に従つて戦地に行くこと」と書いてあります。それ以上の意味はないわけであります。従軍記者は言うまでもなく軍属ではありません。軍から身分証明書の発給

を受けて、軍に随行して取材をするわけです。軍属というのは、狭い意味では陸海軍の文官を言い、給料も軍から出るわけですが、従軍記者に軍から給料が出るわけではありません。もちろん、ある時期、一九四二年以降、陸軍の報道班員については軍の丸抱えになったケースがありますが、従軍記者が戦争の全期間を通じて軍属であつたということはないわけです。このように、ちよつと考えればまったく成り立たないような議論を出して、言いがかりをつけているという感じが私にはいたします。

もう一つ、私たちは従軍慰安婦問題に取り組むときに、必ず「従軍慰安婦」というものに鍵カッコをつけております。これは必ずしも適当な言葉ではないという側面はもちろんありますが、藤岡教授が言うような意味ではありません。どういうことかという、特に「慰安婦」という言葉に問題が多いわけです。慰安婦にされた女性たちは本当に「軍人を慰安する」ということだったのだろうか。これは実態を隠し、曖昧にするという意味の言葉だろうと思うのです。

ではどういうふうに言うべきなのだろうか。カッコをつけた「従軍慰安婦」、その本質は「日本軍性奴隷」、あるいは「軍用性奴隷」という言葉が適当なのではないかということが、いま国際的に定着していきつつあるわけです。ちよつと聞くときつい言葉のようですが、なぜ日本軍性奴隷、軍用性奴隷という言葉が本質を示すものであるかということは、後で追々触れていくことになるかと思ひます。

中学校教科書に「官憲による奴隷狩りの強制連行」の記述は一行もない

次に二番目の論拠ですが、「強制連行はなかった」という言い分が本当に正しいのかということを、少し具体的に考えてみたいと思ひます。〈自由主義史観研究会〉、あるいは〈新しい歴史教科書をつくる会〉

に属する人たちは「官憲による奴隷狩りのような連行」が強制連行であつて、これだけが問題であるというをずつと言いつつ続けているわけです。これでは現場で官憲が実際に手を下して奴隷狩りのような乱暴な連行をしたケースだけが問題で、それ以外は問題ではないということになります。

これは強制の問題を非常に狭く解釈して言い逃れしようということになるのだらうと思いますが、結果から見ますと、藤岡教授をはじめとする人たちは、自分でなつた縄によつて自分の手足を縛るようなことになっているのではないかと思います。

今年度の四月から使われる中学校の教科書七冊の歴史的分野で「従軍慰安婦」がすべて登場していますが、その中に、「官憲による奴隷狩りのような強制連行が行われた」と書いてある教科書があるかと見てみますと、一冊もないわけです。例えば日本書籍の教科書では、「女性を慰安婦として従軍させ、ひどいあつかいをした」とあります。官憲が奴隷狩りのような連行をしたとはまったく書いていないわけです。東京書籍では、「従軍慰安婦として強制的に戦場に送り出された若い女性も多数いた」とかなり踏み込んで書いてありますが、「官憲が奴隷狩りのように」というようには書いてないわけで、つまり、藤岡教授たちの議論に従えば、「官憲による奴隷狩りのような強制連行」があつたと書いてあることが問題なわけですが、彼らの定義するそのような「強制連行」があつたと書いてある教科書は一冊もないということになります。自縄自縛に陥っているということとはそういうことであります。

本人の意志に反する「強制」があつたことが問題

私たちがこの問題に取り組みはじめて、この間ずっと問題にしてきたのは、こういう非常に狭い意味

の強制連行だけが問題なのか、ということですが、それでは何が問題なのか。私たちは、「当時日本が加入していた国際法、あるいは慣習法として成立していた国際法に違反するような行為があった」ということが問題なのだということを、ずっと言っているわけです（もちろん、当時の国際法に違反していなければ何をしてもいいということではありません）。

その問題になる行為は何かということですが、一つは、慰安所で女性たちの意志に反する強制があったということです。どのようなかたちで慰安所に連れてこられたにせよ、そこで本人の意志に反する強制があった場合には許されないわけであります。

二番目には未成年者が連行され、慰安所で使役されたということです。特に日本、朝鮮、台湾から連行した場合には、当時日本が加入しておりました婦人及児童の売買禁止に関する国際条約によりまして、二十一歳未満の女性を連行することは、本人が同意していても犯罪である、ということになるわけです。しかし、未成年者の連行・使役については藤岡さんたちは何も言っていない。

三番目に徴募時に様々な強制があったということです。徴募時の強制、つまり強制連行とは官憲による奴隷持りのような連行だけではなくて、身売りにされた、騙して連れていかれた、拉致されたなどのケースを含む、本人の意志に反する連行はすべて強制連行であるということは国際法上も言えるわけで、このことをずっと問題にしているということです。

ところで、政府の公式見解はこのへんを十分に意識しておりまして、一九九三年八月に公表された当時の河野洋平内閣官房長官の談話では、強制の問題をこのように言っております。

「甘言、強圧による等、本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、さらに官憲等が直接これに荷担したこともあった」というように、徴募時の強制を広く解釈しております。さらに、「慰安所

における生活は強制的な状況の下での痛ましいものであった」と言っておりまして、慰安所での強制と
いうことを考えているわけであります。

また朝鮮半島ではどういう状況があったのかということについては、「その募集、移送、管理等も、甘
言、強圧による等、総じて本人たちの意思に反して行われた」と言っているわけです。

政府もこういうふうに言わざるをえないように、「本人の意志に反することをした場合に、強制があつ
たと認めざるを得ない」ということだと思えます。ただ、内閣官房長官談話は未成年者の連行・使役と
いうことについてはなにも言っておりません。明白な非人道的行為で、国際法上言い逃れができないこ
とだからだろうと思うですが、これは強制の問題とは別に強調する必要があるのではないかと思います。

資料で確認できる「強制」の実態

そこで少し具体的に、慰安所での強制、未成年者の連行・使役、徴募時の強制（強制連行）について、
現在の資料状況ではどこまでの確度で言えるのかということを考えてみることにしましょう。

慰安所での強制はどれぐらいの確度で言えるのか、ということをも、まず見てみることにいたします。

資料1、資料2、資料3を順次見ていくことにしたいと思います。慰安所に入れられた女性たちがどの
ような拘束状況に置かれていたのかということを示すものです。

資料1はフィリピンのパナイ島イロイロ市にありました二つの慰安所について軍政監部が作った「慰
安所規定」（一九四三年十一月三日）であります。女性たちがどのような状況に置かれていたのかとい
うことが軍の公文書にはつきり書かれています。

「慰安所経営者ハ左記先事項ヲ厳守スベシ」とありまして、その五項目に「慰安婦外出ヲ嚴重取締」と書かれています。軍が業者に慰安婦の外出を嚴重に取り締まれと指示しているわけです。次の第六項目の第五番目ですが、「出張所長ノ許可ナクシテ慰安婦ノ連出シハ堅ク禁ズ」とあります。将兵が慰安婦を外に連れ出す時は軍政監部、イロイロ出張所長の許可が必要だと言っているわけです。

第七項目は慰安婦の散歩時間を決めていきます。「散歩時間ハ毎日午前八時ヨリ午前十時マデ」というのです。午前九時から慰安婦は

将兵の相手をさせられるわけです。その間の二時間のうちに散歩をするわけで、散歩

区域は左側の地図で公園とそれを取り巻く道路の内側に限られており、非常に厳しく行動が制約されております。

この地図では右側に第一慰安所がありまして、南側の軍政監部の隣に亜細亜会館があります。この亜細亜会館が第二慰安所であります（なお、最近小林よしのり氏

（資料1）

五、慰安所経営者ハ左記事項ヲ厳守スベシ

5. 慰安婦外出ヲ嚴重取締

六、慰安所ヲ利用セントスル者ハ左記事項ヲ厳守スベシ

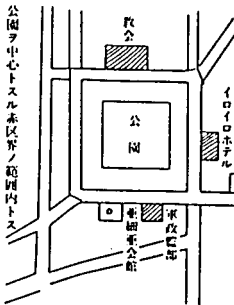
5. 比島軍政監部ビサヤ支部イロイロ出張所長ノ許可ナクシテ慰安婦ノ連出シハ堅ク禁ズ

七、慰安婦散歩ハ毎日午前八時ヨリ午前十時マデトシ其ノ他ニアリテハ比島軍政監部ビサヤ支部イロイロ出張所長ノ許可ヲ受クベシ尚散歩区域ハ別表一二依ル

八、慰安所使用ハ外出許可証（亦ハ之ニ代ベキ証明書）携帯者ニ限ル

九、営業時間及料金ハ別紙二二依ル

別表一、散歩区域 第一慰安所



（一九四二年一月三日性病検査表による年令は次の通り

※第一慰安所（フィリピン人）一五名中

二才未満は一〇名、最低年令一六才。

※亜細亜会館（日本人か）一七名中

二才未満四名、最低年令一九才

は、このような制限は慰安婦を敵から守るためのものであったかも知れないと言ひ出しています。しかし、そうだとすれば「嚴重取締」と書くのではなく「慰安婦安全確保」といった表現になるはずです。また、ゲリラなどいない沖縄の慰安所でも、外出規制の規定があつたことの説明がつきません。

第一慰安所にはフィリピン人が十五名入れられておりますが、年齢は二十歳未満が十名で、最低年齢はなんと十六歳の少女がいるということですから。亜細亜会館のほうは年齢がやや高くて、十七名中二十一歳未満が四名で、最低年齢は十九歳ですので、これは日本人の「慰安婦」ではないかという気がいたしますが、ちよつとわかりません。フィリピン人のほうが非常に若い女性が使役されていることになりました。

資料2は、中国に駐屯しておりました独立山砲兵第三連隊の一九三九（昭和十四）年の慰安所規定であります。傍線を引いてありますのは、軍がどのように管理統制していたのか、どのように関わっていたのかという項目ですが、いちばん最後のところを見ますと、第七項に「慰安婦ノ外出ニ関シテハ連隊長ノ

（資料2）

昭和十四年十一月十四日

森川部隊特種慰安業務ニ関スル規定

森川部隊

- 第一 本規定ハ森川部隊警備地域内特種慰安業務ニ関シ規定ス
- 第二 特種慰安所開設ノ趣旨ハ將兵利便ノ爲メ風土平和調節シ以テ軍紀振作ノ一助ヲシムルニ在リ從テ之ガ奨励又ハ宣傳ニ墮スルノ行ハ嚴ニ取締ラ要ス
- 第三 警備地域内ノ慰安業務ヲ實施スルヲ委員ヲ任命ス
- 第四 其差出及任務分担附表第一ノ如シ
- 第五 警備隊長ハ慰安業務ヲ監督指導スルモノトス
- 第六 慰安所及食堂附近ノ警戒並ニ軍紀風紀ノ取締ハ警備隊長及葛店警備隊長ノ担任トス
- 第七 特種慰安所ハ葛店及華容鎮ニ之ヲ設ク
- 第八 特種慰安所ニ要スル經費ハ一切該管者ノ負担トス
- 第九 而シテ該管者ハ左ノ諸項ヲ確實ニ實施スベシ
- 第十 設置ノ主旨ニ反シ又ハ諸規定ノ履行不確ナルモノハ營業ヲ停止シ戒ハ退去ヲ命ズ
- 第十一 慰安婦ノ外出ニ関シテハ連隊長ノ許可ヲ受クベシ

許可ヲ受クベシ」とあります。女性たちは外出の自由がなく、外出する場合には連隊長の許可を得なければいけないと書かれているわけです。

資料3は強制連行がなかった、あるいは強制がなかったということを主張する人たちがしばしば引用する資料であります。アメリカの戦時情報局心理作戦班が作り出した「日本人捕虜尋問報告」(一九四四年十月)ですが、この尋問報告は、ビルマのミツチナというところでアメリカ軍が保護した二十名の朝鮮人「慰安婦」と二名の日本人夫妻からヒアリングしてまとめた記録です。どの部分が慰安婦の証言に基づくもので、どの部分が業者夫妻の証言に基づくものかはわかりませんが、アメリカ軍がヒアリングをしてまとめた記録としてかなり興味深いものです。

資料に見る「軍隊買春」の実態

この記録は、歴史史料をどういうふうに見るのかという点でもいろいろ考えさせられるものを含む資料です。A B C Dと記号がつけてありますが、これは私がつけたもので、どういうふうにもこの資料を見るべきかということを考えるうえでつけたわけです。

Aは徴集の方法が書かれています。どのようにして女性が集められたのかということをアメリカ兵が記録したものです。傍線を引いたところを見るとこのように書かれています。「慰安婦」として連れていかれた朝鮮人女性ですが、

「この「役務」の性格は明示されなかったが、それは病院にいる負傷兵を見舞い、包帯を巻いてやり、そして一般的にいえは將兵を喜ばせることにかかわる仕事であると考えられていた。これらの周旋業者

が用いる誘いのことは、多額の金銭と家族の負債を返済する好機、それに楽な仕事と新天地——シンガポール——における新生活という将来性であった。このような偽りの説明を信じて、多くの女性が海外勤務に応募し、二、三百円の前渡し金を受け取った」と書かれております。

これは何を意味するのでしょうか、一つは、慰安婦であるということを告げられないで、騙して連れていかれたということであり、それから前渡し金を家族が受け取って、それにしぼられて慰安婦としての仕事を強制されているということを示すものです。次の行を読んでみますと、

「これらの女性のうちには『地上でもっとも古い職業』（売春婦ということですが）に以前からかわっていた者も若干いたが、大部分は売春について無知・無教育であった」というふうに書かれています。ほとんどは売春婦ではなかったということです。

「彼女たちが結んだ契約は、家族の借金返済に充てるために前渡しされた金銭に応じて、六カ月から一年にわたり、彼女たちを軍の規則と「慰安所の楼主」のための役務に束縛した」というふうに書かれています。期

（資料3—A）

徴 集

一九四二年五月初旬、日本の周旋業者たちが、日本軍によって新たに征服された東南アジア諸地域における「慰安役務」に就く朝鮮人女性を集めるため、朝鮮に到着した。この「役務」の性格は明示されなかったが、それは病院にいる負傷兵を見舞い、包帯を巻いてやり、そして一般的に言えば、将兵を喜ばせることにかかわる仕事であると考えられていた。これらの周旋業者が用いる誘いのことは、多額の金銭と、家族の負債を返済する好機、それに、楽な仕事と新天地——シンガポール——における新生活という将来性であった。このような偽りの説明を信じて、多くの女性が海外勤務に応募し、二、三百円の前渡し金を受け取った。

これらの女性のうちには、「地上で最も古い職業」に以前からかわっていた者も若干いたが、大部分は売春について無知、無教育であった。彼女たちが結んだ契約は、家族の借金返済に充てるために前渡しされた金額にに応じて六カ月から一年にわたり、彼女たちを軍の規則と「慰安所の楼主」のための役務に束縛した。

限を限ってではありま

すが、前借金を返すまで拘束をされているということを示しています。

Bは「性向」と書いてありますが、慰安婦はど

ういう人であるかということ、尋問をしたアレックス・ヨリチという日系人のアメリカ兵がどういうふうに見ていたか、ということを示すものです。これは資料の性格も示すものだと思いますのでちょっと見てみたいと思います。

「平均的な朝鮮人慰安婦は二五歳ぐらいで、無教育、幼稚、気まぐれ、そして、わがままである。慰安婦は日本の基準からいっても、白人の基準からいっても、美人ではない。とかく自己中心的で、自分のことばかり話したが、見知らぬ人の前では、もの静かでとりました態度を見せるが、『女の手練手管を心得ている』というふうに書かれています。女性たちにまったく同情心がないわけです。兵士の視点から女性たちを見ていて、女性たちが奴隷状態に置かれているということを、このアメリカ兵は十分に見抜くことができなかった。そのような性格の資料であるということを考えておく必要があるのです。

史料批判のない推論は誤謬のもと

ところでCは「生活および労働の状況」ですが、「慰安婦は拘束をされていなかった」、自由意思による

（資料3—B） 性 向

尋問により判明したところでは、平均的な朝鮮人慰安婦は二五歳ぐらいで、無教育、幼稚、気まぐれ、そして、わがままである。慰安婦は、日本の基準からいっても白人の基準からいっても、美人ではない。とかく自己中心的で、自分のことばかり話したが、見知らぬ人の前では、もの静かでとりました態度を見せるが、『女の手練手管を心得ている』。自分の「職業」が嫌いだといっており、仕事のことについても家族のことについても話したがらない。捕虜としてミッチナやレドのアメリカ兵から親切的扱いを受けたために、アメリカ兵のほうが日本兵よりも人情深いと感じている。慰安婦は中国兵とインド兵を怖がっている。

売春であるということを主張する人たちが好んで引用する部分ですが、それをどういうふうに通読すべきなのか。史料批判をするうえで非常に好適な材料であろうと思いますので見てみたいと思います。

「ミツチナでは慰安婦たちは、通常個室のある二階建ての大規模家屋（普通は学校の校舎）に宿泊していた。それぞれの慰安婦はそこで寝起きし、業を営んだ」というふうに書いてあります。慰安所の建物は日本軍が接収し、業者に提供するわけですが、多くの個室が必要なわけです。それで学校だとかお寺だとかというところを慰安所にするケースが多いわけです。学校などを慰安所にするということについて日本軍は何の抵抗も感じていないようですが、これはずいぶんひどいことだと思えます。

この部分について、「慰安婦はずいぶん立派な家に住んでいる」というふうに読む人がいるわけです。この前「朝まで生テレビ」

という番組で藤岡さんたちと討論しましたが、そこ

に出ておりました小林よしのりさんという漫画家はここを「慰安婦はずいぶん立派な家に住んでいる」と読んでいます。

実際はそうではなくて、

業者は通常十人とか二十人の女性をかかえている

（資料3—C）

生活および労働の状況

ミツチナでは慰安婦たちは、通常、個室のある二階建ての大規模家屋（普通は学校の校舎）に宿泊していた。それぞれの慰安婦は、そこで寝起きし、業を営んだ。彼女たちは、日本軍から一定の食料を配給されていなかったため、ミツチナでは「慰安所の様主」から、彼が調達した食料を買っていた。ビルマでの彼女たちの暮らしぶりには、ほかの場所と比べれば質素ともいえるほどであった。この点はビルマ生活二年目についてとくにいえることであつた。食料・物資の配給量は多くなかったが、欲しい物品を購入するお金はたつぷりもらっていたので、彼女たちの暮らし向きはよかった。彼女たちは、故郷から慰問袋をもらった兵士がくれるいろいろな贈り物に加えて、それを補う衣類、靴、紙巻きタバコ、化粧品を買うことができた。

彼女たちは、ビルマ滞在中、将兵と一緒にスポーツ行事に参加して楽しく過ごし、また、ピクニック、演芸会、夕食会に出席した。彼女たちは蓄音器をもっていたし、都会では買ひ物に出かけることが許された。

わけて、それぞれを個室に閉じこめて、そこで将兵の相手をさせ、そこを寝起きの場所とさせるわけですから、非常に多くの部屋があるわけです。立派な家に住んでいるということがどこから読みとれるのか、いったいなをみているのかという感じがいたします。

「彼女たちは、ビルマ滞在中、将兵と一緒にスポーツ行事に参加して楽しく過ごし、またピクニック、演芸会、夕食会に出席した。彼女たちは蓄音機を持っていたし、都会では買物に出かけることが許された」とも書かれています。これを読んで藤岡さんたちは、「慰安婦はとても豊かな暮らしをしているんじゃないか、どこが奴隷状態なのだ」というふうに言うわけです。

しかし、「都会では買物に出かけることが許された」ということは、許可制であるということを示しているわけです。すでに見ました日本軍の一次資料にもありますように、その身柄は厳しく拘束されているのです。ビルマでは多少拘束がゆるくなっている可能性もありますが、それはあまりに遠いところであるため、逃亡して朝鮮に帰ることが不可能だという事情があるからです。

しかも女性たちは一週間に一回の休みの日があるのはいいほうでありまして、十日に一回の場合もあります。このビルマの部隊の例でいいますと、毎日朝の十時から夜中の十二時まで将兵の相手をしなければならぬ。昼間は兵士、夕方は下士官、夜は将校の相手をさせられるわけですが、将校は泊まる場合もあり、その場合は翌朝の八時までになる。連日そういう状況が続いたわけで、どこが自由なのかということになります。

それから「演芸会や夕食会に出席していて歓待されているではないか」ということを言う人もいますが、実はこれは兵隊たちの演芸会や夕食会には女つ気がないので慰安婦を連れていつて、酌をさせる、踊りをさせる、歌を歌わせるというものです。ピクニックやスポーツ行事に参加しているのも、

同じような理由だと思っています。

慰安所に連れていかれた女性は、当初は激しく抵抗するわけですが、やがて抵抗すれば生きていけないということを思い知らされます。そうすると、そのような境遇を仕方がない現実としてあきらめて、それになんとか適応して生きていこうとするわけです。将兵の求めに応じる限りはそれなりの待遇を受けられると考えるほかないのです。またピクニックやスポーツ行事に参加させ、その心の鬱屈を多少晴らせて将兵に対するサービスをさせるのが軍にとっても都合であったということをして示しているのにすぎないのではないかと私は思います。いずれにしても、〈新しい歴史教科書をつくる会〉の呼び掛け人の方々はこの資料の読み方がきわめて恣意的であるといわねばなりません。

Dについても見てみたいと思います。二十名の朝鮮人慰安婦の名前と年齢、住所が書かれております。そのうち、名前はプライバシーにかかわるので私の資料集では記号で示してありますが、年齢が書いてあります。これは一九四四年の年齢ですが、徴募されたのが二年以上前ですので、これから二歳引いたのが徴募時の年齢ということになります。

その年齢をみますと、二十一歳未満の女性たちはこの二十名中十二名で、過半数の女性が国際法でい

〔資料3-D〕

名	年齢	住所
1	〔S〕 二二歳	慶尚南道晉州
2	〔K〕 二八歳	慶尚南道三千浦（以下略）
3	〔P〕 二六歳	慶尚南道晉州
4	〔C〕 二二歳	慶尚北道大邱
5	〔C〕 二七歳	慶尚南道晉州
6	〔K〕 二五歳	慶尚北道大邱
7	〔K〕 一九歳	慶尚北道大邱
8	〔K〕 二五歳	慶尚南道釜山
9	〔K〕 二二歳	慶尚南道クンボク
10	〔K〕 二三歳	慶尚南道大邱
11	〔K〕 二六歳	慶尚南道晉州
12	〔P〕 二七歳	慶尚南道晉州
13	〔C〕 二二歳	慶尚南道慶山郡（以下略）
14	〔K〕 二二歳	慶尚南道咸陽（以下略）
15	〔Y〕 三一歳	平安南道平壤
16	〔O〕 二〇歳	平安南道平壤
17	〔K〕 二〇歳	京畿道京城
18	〔H〕 二二歳	京畿道京城
19	〔O〕 二〇歳	慶尚北道大邱
20	〔K〕 二二歳	全羅南道光州
日本人民間人		
1	キナムラトミコ	三八歳 京畿道京城
2	キナムラエイブシ	四一歳 京畿道京城

う未成年の状態で連れていかれているということをこの資料は示しているのです。

公娼よりもひどい「慰安婦」の状況

いずれにしても慰安所に入れられた女性たちは、当時日本の国内にあった公娼制で認められていた「拒否する自由」、あるいは「廃業の自由」「外出の自由」もないような状況に置かれていたということを、これは示すのではないかと思います。

国内の公娼制で認められていた、拒否する自由、廃業の自由、外出の自由とは何なのかということですが、実は一九二〇年代、日本は国際連盟の常任理事国となりましたが、国際連盟の常任理事国は、各国に婦人・児童の売買禁止をやらせる道義的な義務を負っています。そうすると日本の国内にそういう性的な奴隷制度があると困るので、日本政府は「国内の公娼制というのは本人の自由稼業であり、売春は強制されたものではない」という立場をとっていたわけです。

したがって、拒否する自由、廃業の自由、外出の自由を、少なくとも建前上は認めざるをえなかったわけですが、軍が作った慰安所ではこのような公娼制の下で建前上認められていた自由すらなかったということになるのです。

次に、慰安所に入れられた女性たちの置かれた状態をどういうふうに見るのかということで、二つほど指摘したいと思います。

一つは、慰安婦にされた女性たちは、通常一日に十人とか二十人、三十人、多い場合にはもっと多くの数の日本軍将兵の相手をさせられます。朝十時から深夜の零時まで、将校が泊まる場合には翌朝の八

時までというのが普通で

した。拒否する自由はもちろんありません。言うとお

りにしないと、殴る、蹴るの暴行を受けるというのが日常であつたわけです。

これを国内の公娼制と比較してみます。資料4

は、国内で公娼制を定着させるために一九〇〇年、明治三十三年に内務省が「娼妓取締規則」というものを出しますが、そのときの内務大臣の訓令であります。この訓令では二つのことを言っております。

「娼妓は名簿に登録して居常嚴重に監督を要す」。遊郭に入れられた女性たちは嚴重に監督をされているわけです。これは事実上の性奴隷制であるということを示していると私は思いますが、一方で「娼妓取締規則」を発する理由は、「娼妓を保護して體質に耐へざる苦業をなし若くは他人の虐待を受けるに至らざらしむるも我が目的の一たらざるを得ず」というふうに言っております。

つまり、当時の国際状況からいっても、女性たちを保護しなければいけない、體質に堪えないような苦行をさせてはいけな、ということに注意せざるをえない状況であつたわけです。一日に十人から三十人の相手をし、朝から夜中まで、将校が泊まる場合には翌朝までほとんど一日中相手をさせられるということが、「體質に耐へざる苦業」でないとどうしていえるでしょうか。明らかに「體質に耐へざる苦業」を女性たちに課していたということになるだろうと思うのです。

(資料4)

内務大臣訓令（一九〇〇年一〇月三日）

(一) 娼妓は名簿に登録して居常嚴重に監督を要す。而して監督の目的たるや主として風俗衛生上の取締に在りと雖も娼妓を保護して體質に耐へざる苦業をなし若くは他人の虐待を受けるに至らざらしむるも我目的の一たらざるを得ず、而して監督の結果娼妓採業を縦行せしむべからざると認めたるときは廳府縣長官に理由を示さずして何時にても採業を停止し又は禁止することを得るものとす。(註 警察局長の権限にて)

今も続く「心の外傷」

もう一つ言っておきたいことは、女性たちが運良く帰国できた場合があつたとしても、多くの女性たちは自分の過去を隠して暮らさなければならなかつたということがあります。兵士たちは戦争に行つても、自分の過去が兵士であつたことを隠して戦後暮らさなければいけないという状況はないわけですが、女性たちの場合には日本人慰安婦の場合も、日本人以外の慰安婦の場合も、自分の過去を隠して暮らさなければいけない状況に追い込まれていたということです。

それだけではなくて、体に多くの被害を受けています。子供が産めなくなつた体にさせられたというのはその典型的な例です。のみならず、心に非常に深い傷を負っているわけです。これは精神的な外傷、あるいは心的外傷、後ストレス障害というふうにもいいますが、慰安所でひどい目にあつたことがずつと心の傷になつて、現在も苦しみ続けているという状況が、多くの元慰安婦の方に共通しているということです。このような状況をどのように見るのかということが、強制連行はなかつたという人たちにはほとんどないということが大きな特徴です。

否定できない「未成年者の連行・使役」

次に未成年者の連行・使役という問題です。非常に多くの未成年者が慰安所に連行され使役されているということは、公文書などで否定できないぐらい明らかになっています。先ほども申しました一九四

四年のアメリカ戦時情報局の資料では、ビルマで保護された二十名の朝鮮人「慰安婦」のうち、過半数の十二名が二十一歳未満の未成年者であったということがわかります。

外務省で私が見つけた資料の中では、台湾人女性六名が中国の南部に送られて軍専属の慰安所に入れられたというケースがありました。これには生年月日が書いてありまして、集められたときの年齢を見てみますと、最低年齢は十四歳で二名、最高年齢でも十八歳です。十四歳といえば現在の中学生と同じ年齢で、こういう若い女性たちが連行されているということは公文書からも明らかなわけです。これは問題ではない、非人道的ではないとは絶対いえないと思うのです。外務省もこの年齢の問題が、出ること、を非常に嫌っているようですが、そういうことを日本軍はしていたということになると思います。

朝鮮・台湾における徴募時の強制

徴募時の強制ということについても考えてみたいと思います。その場合に、日本の植民地であった朝鮮・台湾、日本が占領した中国・東南アジア・太平洋地域では状況がかなり違いますので、区別して考える必要があると思います。どういう集められ方をされたのかということを、これも資料に基づいて考えてみたいと思います。

まず資料5と6は一九三八年、昭和十三年に、陸軍と内務省警保局長がほぼ同じ時期に出した集め方の注意です。櫻井よしこさんは「強制連行を示す資料がない」ということを最近朝日新聞に書いておられますし、小林よしのりさんは漫画ですとそういうことを描いています。このお二人はこの5または6の資料の意味を完全に誤読して、強制はなかったということの論拠にしているわけです。

資料5は陸軍省が出したのですが、「軍慰安所従業婦等募集ニ関スル件」というものです。「内地ニ於テ之カ従業婦(慰安婦のことですが)等ヲ募集スルニ当リ」、いろいろな問題が起きているので、今後「募集等ニ当リテハ派遣軍ニ於テ統制シ、之ニ任ズル人物ノ選定ヲ周到適切ニシ、其実施ニ当リテハ関係地方ノ憲兵及警察当局トノ連携ヲ密ニシ」と言っています。軍が選定した業者が国内で募集しているわけですが、中には乱暴な集めかたをして誘拐犯と間違えられて警察に検挙され、検挙したところが実は軍の依頼で集めていることがわかったという例があつたということを言っています。そこでそのような不祥事を防ぐために、今後は派遣軍が全体を統制しろと言ひ、業者の選定をもっとしっかりやれ、集める場合には地元の憲兵や警察と連携してやれとも言っているわけです。

しかし、この文章を見てみますと、軍が気にしているのは国内でそのような不祥事が起こるというこ

とだけで、朝鮮、台湾

での問題はいつさい気

にしていません。それ

は「内地ニ於テ」とい

うところからそのよう

に読めます。この内地

というのは、朝鮮・台

湾を含みません。小林

よしのりさんは含むと

思っているようです

(資料5)

軍慰安所従業婦等募集ニ関スル件

陸支密

副官ヨリ北支方面軍及中支派遣軍參謀長宛通牒案

支那事業地ニ於ケル慰安所設置ノ為、内地ニ於テ之カ従業婦等ヲ募集スルニ当リ故ラ二軍部諒解等ノ名義ヲ利用シテ二軍ノ威信ヲ傷ツケ且ツ一般民ノ誤解ヲ招ク虞アルモノ或ハ従軍記者、慰問者等ヲ介シテ不統制ニ募集シ社会問題ヲ惹起スル虞アルモノ或ハ募集ニ任スル者ノ人選適切ヲ欠キテ二募集ノ方法、誘拐ニ類シ警察当局ニ檢舉取調ヲ受クルモノアル等注意ヲ要スルモノ少カラサルニ就テハ将来是等ノ募集等ニ当リテハ派遣軍ニ於テ統制シ之ニ任スル人物ノ選定ヲ周到適切ニシ其実施ニ当リテハ関係地方ノ憲兵及警察当局トノ連携ヲ密ニシ、以テ軍ノ威信保持上並ニ社会問題上遺憾ナキ様配處相成度依命通牒ス

陸支密第七四五号

昭和拾叁年參月四日

が、そうだとすれば全くのあやまりです。

朝鮮・台湾ではあつかいが違っていたということがさらにはっきりするのは、同じ時期に内務省警保局長が出した通牒であります(資料6)。国内でいろいろな問題が起きているので、今後は「醜業ヲ目的

トスル婦女」、これは売春を

目的とする婦女(ここではほとんど「慰安婦」のことを指していると思います)

が、渡航する場合には警察

署で渡航証明書というものを

出すわけですが、その渡

航証明書を出すにあたって

は、四つの条件を満たした

ものだけに出不さいと言

言っているわけです。

四つの条件というのは、

まず「娼妓其ノ他 事実上

醜業ヲ営」んでいる者、つ

まり現に売春婦である者。

次に「満二十一歳以上」で

(資料6)

内務省警保第五号

〔図〕

昭和十三年二月二十三日

各府府県長官宛

(除東京府知事)

支那渡航婦女ノ取扱ニ関スル件

内務省警保局長

最近支那各地ニ於ケル秩序ノ恢復ニ伴ヒ渡航者著シク増加シツツアルモ是等ノ中ニハ同地ニ於ケル料理店、飲食店(「カフェー」)又ハ賁座敷類似ノ営業者ト聯繫ヲ有シ是等ノ営業ニ従事スルコトヲ目的トスル婦女露ナカラザルモノアリ更ニ亦内地ニ於テ是等婦女ノ募集周旋ヲ為ス者ニシテ恰モ軍当局ノ瞭解アルカノ如キ賁ヲ弄スル者モ最近各地ニ頻出シツツアル状況ニ在リ婦女ノ渡航ハ現地ニ於ケル英情ニ鑑ミルトキハ蓋シ必要已ムヲ得ザルモノアリ警察当局ニ於テモ特殊ノ考慮ヲ払ヒ実情ニ即スル措置ヲ要アリト認メラルルモ是等婦女ノ募集周旋等ノ取締ニシテ適正ヲ欠カンカ帝國ノ威信ヲ毀ケ皇軍ノ名譽ヲ害フノミニ止マラズ既後國民特ニ出征兵士遺家族ニ好マシカラザル影響ヲ与フルト共ニ婦女売買ニ関スル因縁条約ノ趣旨ニモ悖ルコト無キヲ保シ難キヲ以テ旁々現地ノ実情其ノ他各般ノ事情ヲ考慮シ爾今之ガ取扱ニ関シテハ左記各号ニ準拠スルコトヲ致度依命此段及通牒候

記

一、醜業ヲ目的トスル婦女ノ渡航ハ現在内地ニ於テ娼妓其ノ他事実上醜業ヲ営ミ滿二十一歳以上且花柳病其ノ他伝染性疾患ナキ者ニシテ^(A)北支、中支方面ニ向フ者ニ限り当分ノ間之ヲ黙認スルコトトシ昭和十二年八月米三機密合第三七六号外務次官通牒ニ依ル身分証明書ヲ発給スルコト

あること、これは国際法上の制約があるからです。三番目に「花柳病其ノ他伝染性疾患ナキ者」。性病を持つていれば將兵に性病が広がるのでこういう条件をつけているということです。四番目に「北支、中支方面ニ向フ者ニ限り、当分ノ間之ヲ默認スル」というふうに言っております。この当時日本軍が占領していたのは、中国の北部と揚子江流域の華中しかなかったわけですので、このところだけ黙認をするということは、軍の要求がある場合にはやむを得ず黙認するということです。

この資料は非常にいろいろなことを言っていると思うのですが、たとえば「日本の国内では満二十一歳未満の者を出すことはいっさいいけない、これは犯罪行為である」ということを警察が認識をしていたということです。それから、「現に売春婦であるもの以外の渡航は認めない」ということは、いわゆる売春婦ではない女性を、例えば前借金でしばって連れていったり、騙して連れていくということを含めてすべて違法であるというふうに認識をしていたということです。

このように、日本の国内から慰安婦を送るということについては非常に厳しい制限を出しているわけです。櫻井さんや小林さんがどこを間違えているかというところ、このような指示が朝鮮や台湾でも同じように出されたというふうに思っているところです。ところが実際はそうではないわけで、日本の国内ではこのように厳しく制限をしています。朝鮮や台湾ではこのような指示は出されていないのです。内地からは、いわゆる売春婦ではない女性を前借金でしばって連れていくことも禁止されていた。日本の国内で前借金でしばって遊郭に拘束するということは実際は行われていたわけで、ある意味では合法とされている面もあったわけですが、女性を海外に出す場合には、国際法の制約もあって、実はもっと厳しかったということになるわけです。

したがって、先ほど見ましたように、台湾から十四歳の女性が慰安婦として送られるとしても、台湾

總督府はそれをいっさい問題にしないわけですし、朝鮮でも未成年者が送り出されるという点では同様だということになるわけです。日本内地と朝鮮・台湾では扱いがまったく違っていたということでもあります。前借金でしばって連れていくことも違法であるということを警察は認識していたということ、それも広い意味での「強制連行」に入るといふふうに言っているのではないかと思います。

朝鮮・台湾での徴募の実態

強制の具体的な内容を四点ほど述べたいと思います。藤岡さんたちが言うような、官憲による「奴隷狩り」のような「強制連行」が朝鮮や台湾であったかどうかということですが、これを裏付けるような史料は現在のところ出ていません。ただし、そのことから官憲による奴隷狩りのような強制連行がなかったというふうに言えるかどうか、ということについては留保したいと思います。

現在、被害者の証言の中には「官憲によって無理矢理連れていかれた」ということを言っている人があります。一方で、旧総督府の関係者は「そういうことはありえない」ということを言っているわけで、ここから言えることは、現状ではあったかかなかったかどちらとも言えない、「ない」というふうにも断定できないし、「ある」というふうにも断定できない。それはもつといろいろな史料が出てこなければわからないということだろうと思うのです。ここからいきなり「なかった」というのは論理の飛躍があるように思います。

前借金で拘束をして連れていくということは、先の「捕虜尋問報告」などからも明らかのように確実にあったということです。それから騙して連れていくということも同様にあったということも、同資料

からわかります。

実はこれが非常に多かったと思われるのは、韓国の〈挺身隊問題対策協議会〉と〈挺身隊研究会〉が十九人の「慰安婦」とされた女性たちに対するかなり綿密なヒアリングを行っていて、それが『証言——強制連行された朝鮮人軍慰安婦たち』（明石書店）にまとめられております。この例を見えますと、この十九名の内の十七名は朝鮮半島から連れていかれたのですが、その内の十二名が騙されて連れていかれたと言っています。

また、台湾では〈台北市婦女救援社会福祉基金会〉が台湾の元慰安婦四十八名の調査をしております。四十四名が台湾から連れていかれていますが、その内の二十二名が騙されて連れていかれたケースだと言っています。騙されて連れていかれるケースが非常に多かったということになります。

このほか、脅されたり、拉致されたりしたケースもあります。ただ、前借金で縛って連れていく、騙して連れていく、脅しや拉致などの暴力的な連行は、いずれも広い意味での強制連行にあたりますが、実際に手を下したのは業者であろうと思うのです。この点については私どもも否定論者も、そんなに大きな意見の違いはありません。どこから違うかといえますと、業者がこのようなことをやったことが軍や総督府の責任、ひいては日本国家の責任になるかどうかということなのです。

業者にやらせたのは軍や総督府

では、これをどういうふうに考えていけばいいのでしょうか。

徴募にあたっては朝鮮軍や台湾軍、あるいは総督府が非常に深い関与をしているということは、現在

の資料状況でも十分に言えると思います。

どういふことかという、業者を選定し、それに様々な便宜を与える。身分は軍属ではありませんが、軍従属者として扱い、軍の身分証明書を出しているということでもあります。これは先ほど言いました陸軍省副官通牒でも業者の選定をしつかりやれと言っていますし、台湾の例では、台湾軍司令官が当時の首相でもあった東条英機陸軍大臣に宛てた電報（一九四三年三月十二日）の中で、南方軍がホルネオに慰安婦五十名を送ってほしいと言ってきた。そこでその要求に基づいて憲兵が調査選定した三名の経営者を慰安婦と一緒に渡航させたいので、その許可をしてほしいと言っています。台湾軍司令官の指示に基づいて、台湾にいる日本の憲兵が業者を選定しているわけでありまして、業者は純粹の民間人ではないということになります。軍が、あるいは総督府が業者を選定して、その業者にこういうひとのやりたがらない仕事をやらせているというふうに見るべきだろうと思うのです。

これがさらにはつきりする資料が、去年の十二月に初めて警察庁から出てまいりました。今まで警察庁は資料がないと言っていたわけですが、警察大学校からかなり重要な資料が出てまいりました（資料7）。その資料はどういうことを言っているかというと、一九三八年の秋に日本軍は広東攻略作戦を起こしまして、中国南部の広東省、広州市を中心とする地域を占領いたしました。そこには二十一軍という軍が駐屯することになりますが、その二十一軍のために七百名の慰安婦が必要で、それをどうやって集めようかということでした。そのうち四百名は日本の内地から連れていくことになり、二十一軍の参謀と陸軍省の徴募課長が内務省に行つて要請します。この要請を受けて内務省警保局は大阪、京都、兵庫、福岡、山口の五府県の知事に割り当てをするわけです。

四百名を割り当てられた各府県では、各府県警察が業者を選定して女性たちを集めさせるということ

になり、業者には軍の身分証明書を交付します。これは上からそういうふうによらせているわけですが、経営者が自発的に希望したように見せかけなさいという注意までしております。実際には軍の要請により警察がやらせているということです。なお、内地から送る場合、国際法に違反しないように慎重に行なわれたことは事実でしょう。

さらにこの資料では、「既に台湾總督府の手を通じ、同地より約三百名渡航の手配済の趣きに有之（これあり）」と言っておりますので、台湾總督府でも同様に、上から割り当てて下ろしていたというふうに見られます。つまり、たとえ業者がやったとしても、それは軍なり總督府なりがやらせているということです。自ら手

（資料7）

支那渡航婦女に関する件向

本日南支派連軍古莊部隊參謀陸軍航空兵少佐久門有文及陸軍省徵募課長より南支派連軍の駐在所設置の必要に付議案を目的とする婦女約四百名を渡航せしむる様配意ありたしとの申出ありたるに付ては、本年二月二十三日内務省宛第五号通牒の趣旨に依り之を取扱ふこととし左記を各地方府に通知し（電話し）を消してある（密件）適當なる引率者（抱主）を選定文をして婦女を募集せしめ現地向はしむる様取計相成可然哉
追て既に台湾總督府の手を通じ同地より約三百名渡航の手配済の趣きに有文

記

一、内地に於て募集し現地向はしむる議案を目的とする婦女は約四百名程度（外に募集進行せざるも現地向ふものありと思料す）消してある（〃）とし、大阪（一〇〇名）二〇〇名を消してある（〃）、京都（五〇名）一〇〇名を消してある（〃）、兵庫（一〇〇名）二〇〇名を消してある（〃）、福岡（二〇〇名）、山口（五〇名）を割當て既に於て其の引率者（抱主）を選定して之を募集せしめ現地向はしむること

二、右引率者（抱主）は現地に於て軍駐在所を駐營せしむるものなるに付 特に身許確実なる者を選定すること

（其の引率者は適宜定むること）を消してある（〃）

三、右渡航婦女の輸送は内地より台湾高雄まで抱主の費用を以て陸に連行し同地よりは大体（出来得る限り陸に之を行はしむることとし、場合に依りては）を消して「内地より」（以下を挿入）御用船に便乗現地向はしむるものとす。尚右に依り難き場合は台湾高雄広東間に定期便あるを以て之に依り引率者同行すること

四、本件に関する連絡に付ては（陸軍省徵募課長及）を消してある（〃）參謀本部第一部長二課今岡少佐、吉田大尉之に當る 尚現地は軍司令部參木少佐之に當る。

五、以上の外 尚之等婦女を必要とする場合は必ず古莊部隊本部（又は軍特防部）を消し

は下さないけれども、いやな仕事をやらせているということであつて、そこに強制などがあれば軍なり総督府の責任は免れないであらうということになるわけです。

慰安所は公娼制度とは明らかに違う軍統制下のシステム

慰安所の設置や運営がどういふふうになされていたかということをもとめてみます。これはすでに軍の公文書により実証されることです。

まず慰安所の設置は軍の指示によります。慰安婦を集めることも軍の指示です。慰安所を設置することも各部隊の隊長が決定するわけです。それから慰安所の建物は軍が接収し、業者は提供するということとなります。慰安所の規則や料金も軍が決めており、慰安婦の性病検査は軍医が行い、各部隊の利用日の指定までしているわけです。経理や経営なども軍が監督しております。非常に詳しい日々の営業報告書の提出も指示しております。さらに慰安所は、軍人、軍属だけのための施設であります。

このように見てまいりますと、慰安所の設置、制度の維持、運営は軍がコントロールしていることがわかります。慰安所の設置や運営については、主役が軍であり、業者は脇役にすぎないということです。そこで、一番末端で脇役だけに焦点を当てるといふことは問題の本質を見失うことになるということを強調しておきたいと思ひます。脚だけをみて象とは何かを判断してはいけません。

国内にあつた公娼制とどういふふうが違うのかということも念のために述べておきます。国内の遊郭は警察が設置の指示をすることはないわけです。娼妓を警察が集めるように指示することもありません。建物の提供もしないでしょう。貸座敷の規則や料金の決定もしないと思ひます。もちろん官吏専用、

今風にいうと公務員専用ではありませんので、その利用日の指定ということもないわけです。これだけ細かい経営や経理などに監督介入していることもないと思います。

さらに、慰安所は軍人・軍属だけのための施設ですが、公娼制の下での遊郭は一般人が利用するものです。官吏専用ではありません。今風にいうと公務員のための施設ではなかったわけでして、明らかに公娼制と軍慰安所制度は別物であつたということも十分に立証できるような状況になっているということです。

中国、東南アジア、太平洋地域での徴募時の強制

中国、東南アジア、太平洋地域ではどうであつたのかということですが、この地域では総督府のような制度はないわけですから、軍が当然前面に出ていかざるをえないということになります。

強制はどういうところに表れるかといいますと、一つは、慰安所を作るということを決定し、地元的女性を集める場合に比較的多いのは地元有力者に集めるように要請するということです。しかし、占領地では軍は全権は持つておりますので、そのような要請が来た場合には、地元の有力者は当然これを拒否できない事実上の命令だと受け取るようになります。

そこでどういうことが起こるかといいますと、例えばその村にいる一番貧しい家庭の女性、あるいは社会的に差別されている家庭の女性を人身御供として差し出すということが一般的に行われているわけで、これは資料でも証明できます。私は岩波新書で『従軍慰安婦』という本を書きましたが、その中に具体的な例を引用しておきましたので（二一五ページ以降）、関心のある方は参照していただきたいと思います。

います。

それから占領地では「官憲による奴隷狩りのような連行」はかなり広範に行われたということも立証できるようになってきています。現在フィリピン人の元「慰安婦」の方がかなり多数名乗り出ていますが、そのほとんどはこのケースです。中国の山西省で慰安所に入れられた女性が名乗り出て裁判を起こそうとしておりますが、これもこのようなケースです。

それが別の史料でどのように裏付けられるのかということですが、日本軍の元将兵の戦後の回想記を調べてみますと、そのようなことがあったということを実際に書いている人がいます。そういうものから証明ができます。

もう一つ事例を紹介してみたいと思います。インドネシアのケースですが、一九九三年八月にオランダ政府は、オランダ領東インド、現在のインドネシアでオランダ人の女性たちがどのような運命にあったのかということを調査し、その調査結果を公表しました。オランダ政府の調査結果は、インドネシアにいたオランダ人女性がどのような運命にあったのかということが関心の中心でありまして、インドネシア人女性についてはあまり関心がないわけなのですが、しかしこの調査報告の中にはインドネシア人女性がどのような運命にあったのかということが、いろいろな実例を挙げて紹介されています。

例えばジャワ島のスマランというところでは、憲兵と警察が不良少女狩りをするということで、何百人もの未婚の若い女性を捕まえ、その中の特定の女性を選んでジャワ島以外の海外の島に送っていたようでありました。この報告書によれば、このときに逮捕された女性の内十七名がフローレス島の慰安所に輸送され、慰安婦として働くことを強制されたと書かれています。この内七名はオランダ人女性で、十名はインドネシア人女性でした。

オランダ政府はこういうふうな公文書を公開してくれればいいのですが、プライバシー等を理由にして公開はしておりません。その代わりにこのような調査結果を公表することですが、私の属しております「日本の戦争責任資料センター」では、その資料を『戦争責任研究』の第四号で全文翻訳をしております。ということが起こったのか非常に生々しい実例がありますので、関心がおありの方はご覧ください。

「官憲による奴隷狩りのような強制連行」が中国、東南アジア、太平洋地域であったということは、現在もう立証できる段階にきているということです。狭い意味での強制連行もなかったということは、すでに言えない状況にあります。植民地、朝鮮、台湾では、広い意味での強制連行と狭い意味での強制連行もあったということが言えるような状況になってきています。

戦前でも売買春は完全に合法だったのか

申しあげたいことがあと二つあります。一つは、売買春は戦前どのような場合でも合法だったのかということ。つい最近、梶山官房長官が「このような問題を調べている人は、若い人たちであって当時公娼制があったという状況を無視して議論しているのではないか」という主旨の発言をしています。そうではないと申しあげたいと思います。むしろ梶山官房長官のような人たちが、戦前の公娼制度がどのようなものであったのかということについて、非常に不正確な認識しか持っていないということを申しあげたい。

売春で、自由な売春というものがそもそももありうるのでしょうか。一九八三年の国連経済社会理事会

への報告でジャン・フェルナン・ローランさんという特別報告者が次のように言っています。

「とにかく、たとえ本人が自由意志でその道を選んだように見えるときでも、売春は実は何らかの強制の結果なのである」

まずこういうことを前提にする必要があるのではないかとということです。

次に、戦前の日本の公娼制度がどのように見られていたのかということも、考えてみる必要があると思います。私は戦前の公娼制度は事実上の性奴隷制であったというふうに思います。そして、そのような認識が戦前にも形成されはじめていたわけでありました。戦前の日本で廃娼決議を行なった県は二十一県ありまして、廃娼県は十四あります。重複しておりますので、これを合計すると二十八県で廃娼決議を出すか、あるいは実際には公娼制をなくすかということまでに行っているわけです。

たとえば高知県議会の議長が出した「公娼廃止に関する意見書」があります（資料8）。その中で公娼制とはどういうものかということを言っています。

「人身売買と女子の貞操蹂躪との二大罪惡を内容とし、且つ遊蕩氣分を誘発し、社会を荼毒する公娼

（資料8）

公娼廃止に関する意見書

人身売買と女子の貞操蹂躪（じやうりん）との二大罪惡を内容とし、且つ遊蕩（ゆうとう）氣分を誘発し、社会を荼毒（とどく）とする公娼制度は最惡の奴隷制度にして、法制度改訂せられ、今日當（かつ）て長權自由（ちやうりゆう）と呼号せし我が高知県に於て、舊本制度の存在を見るは遺憾なるが故に、既に之が廃止を決議せし諸縣と共に本縣も亦（また）向う六年後に於て之を廃止相成度

府縣制第四十四條に依り意見書提出候也

昭和七年十二月八日

高知県知事・飯田復治

高知県会議長 飯田正治

一九三二（昭和七）年にすでに言っており、こういう認識が広く育つていたということであります。福岡県警察本部が発行した「福岡県警察史」（一九八〇年・資料9）には次のように書かれておりまして、今、警察がどのように認識しているのかということがわかります。

「娼妓は、貸座敷で自由営業をすることが建前になっていた。しかし、現実には娼妓は前借金で縛られていて全く自由はなく、籠の鳥といわれていた」。

このように、福岡県

警本部も事実上の性奴隷制度であつたと言っているわけです。

そして、警察は一九

三〇年代にはすでに娼妓免許を出すということについては制限的である、やりたく

なかった、登録に対する警察の態度が消極的だったということを言っています。また、娼妓は建前上廃業の

（資料9）

娼妓の風俗営業の特殊な形態としては貸座敷業があつて、ここでは娼妓が売春をすることが公認されてきた。公娼制度は当時の社会が必要として承認していた売春を、風俗及び衛生管理上から一定の場所に限定して社会防衛上の措置を講じようとしたものであつた。売春を奨励するのではなくて、社会の要請に妥協した制度であつた。娼妓は貸座敷で自由営業をすることが建前となつていた。しかし、現実には娼妓は前借金で縛られていて全く自由はなく籠の鳥といわれていた。

娼妓となるには、娼妓自ら警察署に出現して名簿登録の申請を本人自身でしなければならず代人による申請は認められなかつた（前掲取組規則第三三条）。これは本人の意思を確認するためであつた。申請書を受理した警察署では、本人から詳細に事情を聞き、身許調査をして貧困その他止むを得ない者だけ登録した。登録に対する警察の態度は消極的であつた。外国人は娼妓となることができなかった。

福岡県内で貸座敷営業を認められていたのは、福岡市、若松市、三潁郡大川町、小倉市、門司市、久留米市八幡市、鞍手郡直方町、大牟田市の九か所（貸座敷娼妓取締規則第一色で、新規開業は認めない方針であつた。この九か所に一九九軒の貸座敷業者と、一、八三五名の娼妓がいた。⁽⁴⁾

娼妓は商業の自由を有してはいたが、現実には業者から前借金をせよといふ要求を受けたり、業者から足洗を洗うことができず、借金が借金を生み生計苦界から抜けられなかつたといふのが、警察では前借金の有無にかかわらず廃業を受けつていた。前借金のような人の自由を拘束する契約は民法第九十条によつて公序良俗に反するもので無効とされていた。⁽⁵⁾

自由を有していたが、現実には業者から前借金をしているために、「事実上拘束を受けて娼妓稼業から足を洗うことができず、借金が借金を生み、生涯苦界からぬけられなかった」と述べ、続いて「前借金のような人の自由を拘束する契約は民法第九十条によって公序良俗に反するもので無効とされている」と書いています。これが実態だったので。

しかし、実際には裁判で前借金の無効を争いますと、当時の大審院の判決が定着しておりまして、売春によって前借金を返すという契約は、娼妓稼働契約としては違法だけれど、金銭消費貸借契約としては有効であるとされてしまいました。つまり一つの契約が二つに分離できるという詭弁によってかろう

(資料10)

【要旨】

が公序良俗に反し無効であるとする点については、当裁判所もまた見解を同一にするものである。しかしながら前記事実関係を客観的に観察すれば、上告人横元は、その娘ヘルエに娼婦稼業をさせる対価として、被上告人先代から消費貸借名義で前借金を受領したものであり、被上告人先代もヘルエの娼婦としての稼働の結果を目当てとし、これがあるがゆえにこそ前記金員を貸与したものである。しかば上告人横元の右金員受領とヘルエの娼婦としての稼働とは、密接に関連して互に不可分の関係にあるものと認められるから、本件において契約の一部たる稼働契約の無効は、ひいて契約全部の無効を来すものと解するから、大審院大正七年一〇月二日（民録二四輯一九五四頁）及び大正一〇年九月二九日（民録二七輯一七七四頁）の判例は、いずれも当裁判所の採用しないところである。従つて本件のいわゆる消費貸借及び上告人藤田のなした連帯保証契約はともに無効であり、そして以上の契約において不法の原因が受益者すなわち上告人等についてのみ存したものであるといふことはできないから、被上告人は民法七〇八条本文により、交付した金員の返還を求めることはできないものといわなければならない。原判決は法律の解釈を誤つたものであつて誤差を免れない。そして原審の確定した事実によれば、本件はすでに判決をなすに熟するものと認められるから、民訴四〇八条一号、九六条、八九条を適用し、裁判官全員一致の意見で主文のとおり判決する。

（裁判長裁判官 栗山茂 裁判官 小谷勝重 裁判官 藤田八郎 裁判官 谷村唯一郎 裁判官 池田克）

たわけです。前借金による契約そのものを無効として訴えても、金銭消費貸借契約としては有効なのでお金は返さなくてはいけなとされ、そうすると女性結局売春によってお金を返さなくては

いけないということになるわけでありました。これは法律解釈としては詭弁であるわけですが、そのような詭弁によつて公娼制が維持されていたということを十分に私たちは考える必要があると思います。

ここに「一九五五年の最高裁判決を引用します(資料10)」。これは判決要旨ですが、借金を売春によつて返すというような契約は、そのこと自体ですでに全体として無効であるといっています。このような判決が出たのが一九五五年です。このように当然の判決が出るまでに、戦後十年待たなければならなかったわけです。

この最高裁判決は法律の解釈としてはごく当たり前のものです。一つの契約を二つに分離できるといふようなことはそもそもありえないわけでありました。

五五年に違法であるという判断ができるとすれば、実は戦前においても違法であつたというふうに私は考えますが、それをこのような強引な解釈によつてかろうじて維持していたというのが戦前の日本国家だつたということを私たちはよく見ておく必要があると思います。

「慰安所制度」は軍の「闇の施設」

それでは最後に、国外に女性たちを売春目的で送り出すということはどういう意味を持つのかということを考えてみたいと思います。国内ではそういう状況であつたとしても、海外に女性たちを送り出すということについては、内務省もそれを禁止せざるをえないというのが当時の状況であつたわけです。

というのは、すでに海外では公娼制を廃止したり、いわゆる売春婦に廃業させるという政策が進んでおります。例えばシンガポール、マレーの地域では、イギリス植民地当局は公娼制を廃止して、日本人のい

わゆる「からゆきさん」たちも廃業させようとするわけです。外務省はこれに協力せざるをえませんので、売春婦の女性たちを廃業させ、あるいは周旋業者をやめさせるという指導をずっとしているわけです。こうしてそれがほとんどなくなっていくつつあったときに、今度は戦争が始まりまして、軍が軍自身のための慰安所制度を作っていくことになります。大きな歴史の流れからいうと、このような歴史の流れをまったく逆行させることを軍自身が始めていったわけで、外務省や警察も、軍の強い要請があるというので、ある意味ではいいやながらもそれに協力をしていかなるをえないということになっていったのだと思います。

結論として、従軍慰安婦制度というのは、公娼制よりもさらに悪質な性奴隷制度であったということが言えるのではないのでしょうか。いっさいの保護法がないわけですし、また日本が当時加入していた国際法すらクリアできないような状況であったわけであります。ある意味では、軍が法令上の根拠のない「闇の施設」を作っていたというふうに言いうるものではないかと思っています。

中学校でどう取り上げるか

時間がきてしまいました。最後に中学校でどう取り上げたらいいのかということを一言申しあげて終わりにしたいと思います。

《自由主義史観研究会》の会報の中では、中学生に歴史の暗部を暴くのは教育上無意味だとして、中学校教科書からの削除要求をしております。しかし、教科書にこの記述をした執筆者は、歴史の暗部を暴くという意図で記述をしたのかということを考えますと、そうではないと思うのです。どういう意味

で取り上げるかというと、私は少なくとも三つのことが非常に重要になると思うのです。

一つは、日中戦争とかアジア太平洋戦争の本質はどういうものであったのかということを考える一つの素材として従軍慰安婦問題を考えるということだと思ふのです。なぜこのような問題が起こるかという、それは日本軍が侵略軍であつたということ、人種差別であるにもかかわらず、それをほとんど意識していないでこういうことをやっているということが重要なポイントになるかと思ひます。

二番目に、人権とは何かということを考える非常にいい教材になるのではないかと思ふのです。従軍慰安婦問題というのは女性に対する戦時の性暴力の問題であります。それから実際に慰安婦にされた女性たちは、日本人慰安婦を含めて考えますと、ほとんどが貧しい家庭の出身の女性たちであつたわけです。女性に対する性暴力、貧しいものに対する差別、というような問題をなくすにはどうしたらいいのかということを中学生に考えてもらうということが、同じような問題を二度と繰り返さないためには非常に重要なポイントになるのではないかというふうに思ふわけです。

三番目に、日本の国内、日本人だけに通用するようなことを考えるのではなくて、アジアや世界に通用するような歴史認識をどういうふうにして持つことができるのか、そういう歴史認識を鍛えることができるのかということが、これから二十一世紀を生きていくうえで非常に重要になると思ひます。そういう素材として考えることが必要となるのではないかというふうに私は思ひます。未来のための課題として考える、ということが重要だと思ひます。

最後に、教科書からの削除を求める請願を趣旨採択した岡山県議会の議員の方々のために、二人の保守的な政治家の言葉を引用させていただいて終わりにしたいと思ひます。

一つは、中曽根内閣のときに官房長官を務められました後藤田正晴さんの言葉です。一九九六年九月

二十七日の朝日新聞で後藤田さんは、戦争体験を持たない若い人たちに加害者意識がないことを心配し、このように言っておられます。

「満州事変以降の日本の大陸進出はどんなに言い繕っても侵略であることは間違いない。朝鮮半島の植民地統治の事実も否定しようがない。そういう歴史的事実を教え、率直に反省すべきことは反省しなきゃいけない。こういうことは繰り返すべきじゃないよという教えかたがいいのではないか」

聞くべき言葉ではないでしょうか。

もう一つはアメリカの元大統領、ジョージ・ブッシュさんの言葉です。戦時中に日系人が強制収容所に収容され、それが一九七〇年代から問題になりまして、強制収容された日系人に対する謝罪と補償金の支払いが行われましたが、そのときにブッシュ大統領が署名した手紙（一九九〇年十月）です。その一節にこういう言葉があります。

「損害賠償と心からの謝罪を申し出る法律の制定で、アメリカ人は言葉の真の意味で自由と平等と正義という理想に対する伝統的な責任を新たにしました」

私たちもこのような問題を学び、誠実に対応することによって、言葉の真の意味で自由と平等と正義という理想を日本の伝統にすることができないではないでしょうか。それが私たちの誇りになると確信いたします。

（一九九七年二月三日 主催〈慰安婦〉問題を考える女たちの会 於 岡山国際交流センター）

◆本稿は、当日の録音テープを『あこら』編集部でリライトしたものです。『労働情報』475・476号に掲載されています。本講演は『近現代史・アジアからの声（仮題）』（晚聲社・近刊）にも収録されます。



「女性への暴力」は人権侵害――

女性の視点で「慰安婦問題」を考える

松井やより

私たち〈アジア女性資料センター〉は、『私たちの21世紀』という機関誌を出しています。今回「メディアと女性」という特集で、前半部分で藤岡信勝氏たちの動きに対して女性としての反論を試みることになり、私はメディアで活躍している女性たちの、「慰安婦問題」についての言動を調べてみました。

なぜ女性が「慰安所」を正当化しようとするのか

本当は女性が女性を批判するというのは、男性に繰られることになるので、非常に残念なのですが、女性の中に男性とほとんど変わらないような立場で、女性の人権を無視したような発言をする人たちが多いのも事実です。ご存じのとおり、最近その面で有名になっている元ニュースキャスターの櫻井よしこさんがおられます。皆さんもその件に関してはご存じと思いますが、去年の秋に横浜市の先生を対象に講演をされて、その中で一口で言いますと「つまり強制連行はなかったという信念です」と、はっきり言うておられます。ところが「私はジャーナリストだから、今までの慰安婦問題についての報道に批判的に思っていた。ジャーナリストだから強制連行ではないということを皆さんに言いたい」と言っ

てますが、その根拠として出しているのは自分で取材したことではなく、ほとんど藤岡氏とか秦郁彦氏とかによつて言われ尽くしているものにすぎないのが残念です。

最近では『直言』という本を出されて、ほんの二、三か月の間に三版くらいになっています。そのうち三分の一くらいは「慰安婦問題」についての考え方を書いていまして、例えば「吉田清治氏が、強制連行があつたと言っているが、あんなのは嘘っぱちだ。それを朝日新聞が引用して強制連行説が流れる原因になつた」と、今まで言われ尽くしていることをまた言っていて、全然新しい根拠などはないのです。

櫻井よしこは葉書エイズのこと、人権派の人ではないかというイメージがあるわけです。いろいろな方が、「えっ、櫻井よしこまでが」とびっくりします。ところが、彼女は思想的にはつきりとタカ派の考え方を前から出している人で、『週刊ダイヤモンド』とか、いろいろな財界関係の出版物に書いています。たとえば国籍条項の削除、つまり自治体に在日外国人の方が就職するようなことは「国を滅ぼす」とか、あるいは北朝鮮の脅威がある、大量の難民がくるので「集団自衛権を行使するべきだ」とか、「私の尊敬する政治家は小沢一郎氏」などということです。葉書エイズの本で、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞されたときのパーティーで、そこへ来た人は自民党の非常に右翼的な政治家も多くて、きら星のごとく並ぶという状況だったそうです。エイズ被害のことを本にしたのに、呼ぶ人はまったく権力側の人だという、そういう体質の女性なのです。

「慰安婦」に振るわれる三回目の暴力

私は、去年の十月北九州の「メディアと女性」というシンポジウムにパネラーとして参加したのです

が、アジアから来た人も含めて六、七人のパネラーの中に櫻井さんも出られて、この時も強制連行について「ジャーナリストとして真実を報道しなければいけない」と言われました。デイスカッションが終ったあと、ルーズソックスの女の子とか着飾った奥さま方がわーっとな握手やサインを求めています。たいへんなタレントなんです。彼女が果たす役割を過小評価してはいけなさと感じました。

しかし彼女は、この分野でのタカ派の論客といえは論客ですが、まだ新人です。大先輩が二人いるわけです。上坂冬子と曾野綾子です。上坂冬子は、九二年から『週刊ポスト』で慰安婦問題については韓国の人が聞いたらびびくりするようなことを言っています。

こんな言葉を読みながら、私は元「慰安婦」の方たちに対して三回目の暴力が振るわれていると思いました。軍隊の武力による性暴力、強姦あるいは強制売春という形で暴力を振るい、戦後五十年近くまったく彼女たちを忘れて去って補償もしなかった、あるいは社会的差別をしたという形の暴力、そして今言葉の暴力です。上坂冬子は「日本の経済力をあてこんでのことである」とか、「金目当てにこのこ名乗り出た」、そして「周辺の婦女子に被害を及ぼさないよう、戦場ではああいいう処置をとるしかない」と判断した。当時の日本軍の必要悪を今の時点で詫びる気持ちはないと、なぜ宮沢首相は言わなかったのだ。ブッシュ大統領が湾岸戦争で謝らなかつたように、なぜ堂々とああいいう制度が必要悪であるということと言わなかつたのか」と、次から次へと侮辱的なことを言っています。

韓国の女性運動が「慰安婦」の背を押した

戦後「慰安婦問題」がどういう形で浮上したかという点、まず一九七三年に「キーセン観光反対運動」

を韓国の女性たちが始めたなかで問題になり、「日本はかつて武力で同胞の女性を女子挺身隊員として狩り出した。その反省もないままに、日本の男性が何十万人も大挙してわが国にきて同胞の女性をキーセンとして性的に搾取している。そのことについて日本の女性はどう思うのか」という問いかけがあったわけです。

私たち「キーセン観光反対運動」をしている側は、当時千田夏光氏など慰安婦問題の本が何冊か出ていましたので、みんなで学習をしたのですが、当時の韓国は大変きびしい独裁政権下にあり、反独裁のために人びとが民主化運動を命がけて闘っている時で、慰安婦問題に十分取り組む余裕がなかったのです。被害者本人が名乗り出ない時に、私たち日本の側が運動を広げることは、むずかしかったのです。

そのころ慰安婦だったと知られていたのは、沖縄のベ・ポンギ（裴奉奇）さん一人でした。砂糖キビ畑の陰の小屋、わずかに二畳ぐらいのところに住んで、戦後も米軍基地で働かなければいけなかったのですが、もう体がきかないから生活保護をと思ったら、「不法滞在だ」と、強制退去させられそうになったそうです。彼女のことはテレビ番組にもなりましたが、あとはほとんど知られていなかったのです。

タイに残されたハルモニを取材してショックを受ける

その次に元「慰安婦」であることがわかったのは、一九八四年、シンガポール特派員の時に私自身が取材しました、タイに生き残っておられたノ・スボク（盧寿福）さんというハルモニです。

彼女自身の戦争当時に連行された状況というのは、明らかに宣慰そのものによるのです。彼女は貧しい家に生まれ、結婚したがうまくいなくて、知り合いの人のところへ身を寄せている時に、井戸端で

水を汲んでいたところ、そこに警官が通りかかって「おい」と呼び止められたそうです。振り向いた拍子にたまたま頭の上の水瓶を落として割り、警官の制服を濡らしてしまつたので、「お前、何をするんだ」と警官に殴りつけられて、車に押し込められて、着いたところが海岸でバラックがいっぱいあつたそうです。そして数日後に軍服を渡され、「これを着なさい」と言われ、六人一組でシンガポールに連れて行かれ、そのシンガポールに着いた日の夜から、将校がまず入つてきて、次に兵隊が入つてきて……という「慰安婦」生活がはじまりました。それから部隊といつしよにマレー半島を北上してタイに行きました。

しばらくすると日本が負けたので、収容所に入れられました。そこに二百人くらいのビルマやその近辺から来た朝鮮人慰安婦がいたということです。そういう人たちから「ジャングルの中に放り出されたり、殺されたりした女性もいる」と聞いたと、ノ・スボクさんはおっしゃっていました。

そういう二人のことだけが知られていた状況ですから、私たち日本の女性の側でほとんど「慰安婦」問題について、取り組むことができなかったという無力感を改めて感じます。

『ハンギョレ新聞』の連載記事に大反響

ところが一九八八年、忘れもしませんが、ユン・ジョンノク(尹貞玉)先生が日本にこられて、「タイの女性のことを知りたい」と言われました。ご紹介したところ、すぐタイに行つてお会いになりました。

八〇年代に始められた調査の結果を、尹先生が九〇年の初めに韓国の『ハンギョレ新聞』に連載記事として書かれました。それが現在の「慰安婦問題」のまったくの発端になったのです。その記事を見た

韓国の女性たちが、これは大変なことだということを改めて感じているうちに、例の日本の国会で労働省局長が「あれは民間業者がやったのだ」と発言したことが韓国に伝わりました。

ちょうどそのころ盧泰愚大統領が日本に来られることになりました。その時に女性団体が記者会見をしたのです。それが公式に女性が「慰安婦」問題について、世界中に自分たちの立場をはっきりと整理して発言した最初です。そのとき六項目の要求を出しました。真相究明・謝罪・補償・責任者謝罪、そして「教科書にきちんと書け」というのもその要求の中に入っています。そして韓国の女性団体が挺身隊問題対策協議会を作ったわけです。右派の人々は、けしからん日本人の「やらせ」だなどと言いますが、誰か日本から行ってやらせたなどということはまったくなくて、ひとえに韓国の女性運動の力です。韓国の女性運動は、七〇年代に、植民地支配並局である日本に協力した女性の指導者が、戦後も居座って独裁政権と結託しているということを、新しいフェミニズムの立場から追及して、新しい女性解放運動が生まれました。その新しい運動は、徹底的に搾取されてきた女子労働者たちの闘い、そしてたくさんの人たちが民主化運動で投獄され、殺されたのですが、その遺家族のお母さんたちの活動など、そういう人たちの力で強まった運動が「慰安婦」問題を国際的なものにしたのです。

アジア各国に広がった「慰安婦」問題

それが他の国にどうやって広がっていったか。フィリピンに日本の誰かが行ってやらせたのですか？違います。フィリピンに「慰安婦」問題がどうやって飛び火したかというその場に私はいたのです。

マニラに本部があるアジア女性人権評議会（AWHRC）という団体があります。その団体が九〇年

十二月にソウルで、現在のアジア女性の人身売買問題で会議を開いたのです。その会議で、韓国の女性代表が「実は私たちは『慰安婦』問題にいま取り組んでいる」と、アジア各国から来ている女性たちに言ったのです。

それを聞いたアジア各国の女性が、初めて「慰安婦」問題について目を開かれて、そのなかで最初に取り組む体制を作ったのがフィリピンだったのです。フィリピンには「ガブリエラ」とか、非常に強力な女性団体があります。どこの国を見ても女性運動の支えがなければ、証言者は名乗り出られません。名乗り出ても公表できません。マレーシアでも名乗り出ましたが、政府が厳しいことと女性運動の支えがないために、その人は今でも公には出ることはできません。台湾の場合は、台湾の女性弁護士さんが尹さんと連絡をとって、台湾でも同じ問題があると調べ始めたのであって、これも台湾に日本人が行って仕掛けたなどというのはとんでもないことです。

というのは、いま女性たちが新しい視点でこういう性暴力の問題に取り組み始めたということです。簡単にそのいきさつを言いますと、一九七五年に国際女性年の会議がメキシコでありました。その翌年から八五年までは「国連女性の十年」でした。その間に「女性差別撤廃条約」が署名され、日本政府も八五年に批准しました。その八五年までに女性たちが獲得した中では、この「女性差別撤廃条約」はいちばん重要な成果でした。

ところがそれにもウィークポイントがあるということが、八五年のナイロビ女性会議以降国際的に問題になったのです。それは、女性に対する暴力の扱いが不十分だったということです。その問題が八〇年代後半にいろいろな場で言われはじめました。

ウィーン世界人権会議で盛り込まれた「女性の人権」

九〇年代に入ると、九三年ウィーンで国連世界人権会議が開かれ、それに向けて世界中の女性たちが「女性に対する暴力は、女性の人権侵害の核である」とキャンペーンしたのです。特に「人権」という概念にジェンダー、女性の視点を入れるという運動の中から、女性への暴力の問題を浮上させたわけです。なぜかという、たとえばアムネスティ・インターナショナルは政治犯の救援、一人のためにも一生懸命に運動するけれど、夫に殴られ、重傷を負う、中には命を落とす女性たちが何万人もいるのに、そのような女性たちの生死に関わる問題を人権問題として法的に扱っているだろうか、という問いかけがありました。

それで女性に対する暴力の問題が広がって、ウィーンの世界人権会議で採択した「ウィーン宣言」の中ではっきりと「女性の人権」が明記されました。

「世界人権会議は公的および私的生活における女性に対する暴力の撤廃、あらゆる形態のセクシュアル・ハラスメント、女性の搾取および売買の根絶、司法の運営におけるジェンダー的偏見の根絶、ならびに女性の権利と女性にとって有害な伝統的または因習的な慣行、その他こういうものの根絶に向かって、各国政府は努力することの重要性を強調する」という内容です。

ウィーン宣言を受けて、その年の暮れに、国連が「女性に対する暴力撤廃宣言」を採択し、日本も賛成しました。それは一口で言いますと、女性に対する暴力を、身体的、心理的、それから公私を問わず三つの分野に分類しました。まず家庭内の暴力、次に社会での暴力——その中には強姦とセクハラと人

身売買と強制売春が入ります。三つめは国家による、または国家が黙認する暴力。この三つをなくすために、各国政府は、一つは加害者に対する処罰や教育的な訓練、もう一つは被害者に対する支援システムを、特にNGOとの協力で作りましょうというのがこの宣言のポイントです。

北京会議で「戦時下の女性への暴力は戦争犯罪」として責任を追及

これを受けて一九九五年の「北京世界女性会議」では「行動綱領」を採択しました。その行動綱領は女性にとって大切な十二の分野を取り上げたものですが、最初は貧困、二番目が教育、三番目が健康、そして四番目にくるのが女性に対する暴力です。五番目が武力紛争と女性です。

この二つの分野に、女性に対する暴力をなくすために各国政府がやるべきことが書いてある中で、特に重要なのが「武力紛争」です。武力紛争中の強姦、性奴隷制など女性への暴力は「戦争犯罪である」と明記したのです。戦争犯罪は時効がなく、いつまでも訴追をするということを含めて戦争犯罪であり、また特定状況の下では人間性に背く犯罪、つまりヒューマニティに対する犯罪であると想定して、「そのような行為から女性および子どもを保護するために必要なあらゆる措置を取るとともに、責任あるものすべてを調査し、処罰し、ならびに加害者を処断するための仕組みを強化する」と書いてあります。

三つ目は、被害女性に対して完全な補償をすること。これらが「行動綱領」に書かれたことです。ここまで持つていくためには、例えばウィーンの人権会議ではNGOフォーラムの「グローバル法廷（世界法廷）」の中で、世界中の暴力の被害者が証言しました。その中には、韓国から来た元「慰安婦」の方の証言もありましたし、北朝鮮からも来られました。世界中に「慰安婦問題」の強烈さ、すさまじい性

暴力の実態を知らせる結果となりました。

ウィーン人権会議の結果として出された「クマラスワミ報告」

ご存じのように、ウィーン人権会議での非常に重要な決定は「女性に対する暴力には特別報告官を任命する。そして調査をして、それを人権委員会に報告する」ということです。人権委員会はその結果、クマラスワミさんというフェミニストであるスリランカの女性弁護士を任命しました。

まず「家庭内暴力と慰安婦問題」についての報告を出され、それから今年は「人身売買の問題」、慰安婦問題も含めて「性的奴隷の問題」も今年度二回目の報告です。来年の報告がいま問題になっている「武力紛争下の女性に対する暴力の問題」ですから、まさに「慰安婦問題」を本格的に調査するのは来年のテーマです。それを受けて今年の秋くらいに、これはフィリピンの女性の人権グループからの要請ですが、「戦争中の女性に対する暴力国際会議」を日本で開きたいということです。

無数の「強姦被害者」たち——その悲惨な実態

この場合に「慰安婦問題」をもちろん取り上げること、もう一つ今後の大きな課題としては、「慰安所」で働かされた「慰安婦」以外の「強姦被害者」の問題があります。「慰安婦」にさせられた方は、ある一定期間監禁されて強姦を毎日繰り返す性暴力にさらされるのですけれど、一方で戦場で一度だけ強姦されて、殺されたり、遺棄されたという、単純強姦といいますが、強姦だけの被害者というのは無数にい

るわけです。

そのなかでフィリピンのパンパンガというところで、母子や姉妹で強姦された方が証言しています。フィリピンで日本軍は『討伐作戦』『無人化作戦』といって抗日ゲリラが出る村は全員殺すという作戦を取ったのです。これは『三光作戦』といってもいいと思います。そのときに若い女性だけはいらないからと殺さないで連れてきて、兵舎で毎日レイプする。これがフィリピンで『慰安婦』にされた方たちの状況です。フィリピンで元『慰安婦』の方に何人もお会いしたのですが、占領地の『慰安婦』というのは、民家に押し入って娘を強引に連れてきて、『連れていかないと哀願する家族は皆殺しにすることもあった。兵舎で毎日毎日強姦しているうちに、アメリカ軍が近づいてくると、部隊が移動しなければならなくなり、『処分』するのです。殺すのです。日本刀で切られて生きのびて、傷あとを残している女性がたくさんいます。私はフィリピンでの元『慰安婦』の方たちの取材ほどつらい思いをしたことはありませんでした。

そのことについて書かれた本もあります。これは友清高志さんという、最近亡くなってしまう元軍人のものです。リパというマニラからちょっと南で、今カラバルソン大開発計画が進んでいると真ん中にある町ですが、『リパの虐殺』と言われるように、抗日ゲリラが出るという村で住民を皆殺しにした地域です。それは『殺し殺された』という本に出ています。

そのリパの虐殺部隊におられた友清さんが、深い反省を込めて記録されたのが『狂気——ルソン住民虐殺の真相』という本です。そういう女性たちがどのように扱われたかが書かれています。ある晩『起きろ』と言われて兵舎の外へ出て、リーダーについて月の光の中を椰子の林を歩いて行くと、空き地があつて女の人がたくさんいました。『かかれ』と言って強姦をして殺したというようなことが、具体的に

書かれています。

ですから「慰安婦」の強制連行があつたかなかつたか、官僚の文書があつたかどうか、ということがだけが問題の中心になっていることはおかしいんです。証言者本人たちの体験に基づいた証言をどんなに大切に聞かなければいけないかということを、これから大いに言わなければと思います。

恐ろしいマスコミ全体の右傾化状況

私自身、フィリピンで取材したすさまじい性暴力の実態を『朝日新聞』に連載しようと思ったら、デスクはこう言うんです。「えっ、また強姦の話、もういいじゃないか」

右翼の人たちが『朝日新聞』はけしからん」とさかんに言っていますけれども、新聞で「慰安婦」の問題を書くことはどんなに大変だったかということです。

そのデスクは、「連載をするなら被害者の証言だけでは駄目だ。加害者側の証言も取材しなければ一方的だ」と言うんです。それで、私は地を這つても、軍人の話を聞こうと思つて、東京の郊外の団地で平和な市民生活をしている人を取材に行きました。拒否されるかと思つたら、「どうぞ、どうぞ」という感じで、何の罪障感もないのです。その人は『殺し殺された』という本のなかで、自分はどうやって女性たちを処分したかということを淡々と話しました。「井戸にどんどん女の人を放りこんだ」と。「戦争ですから」と平然と言うんです。

マスコミのことについて一言いいますと、右翼のマスコミ攻撃のターゲットは『朝日新聞』ですが、私は「右翼の皆さん、そんなに怒る必要はないですよ、朝日はどんなあなたの方に近づいていますか

らね」と言いたいのです。そのきっかけというのは、文藝春秋の『マルコポーロ』の編集長だった花田紀凱氏を、去年朝日新聞社が迎えて『UNO!』という女性を馬鹿にする雑誌を創刊しました。

私は社長に抗議の手紙を出しました。あの時点で『朝日新聞』はある曲がり角を曲がったというふうに、心ある人たちは朝日の社内でも言っています。「あんな本売れないですよ」と思いましたが、そのとおりです。

しかしそれで戦争中の状況を繰り返してはいけません。七〇年代にまず『産経』が明らかに右寄り路線、八〇年代に『読売』がその線を出して、『朝日』『毎日』対『産経』『読売』的な形に二極化しました。『産経』や『読売』が『朝日』を叩く、ジャーナリズム同士の叩き合いをさせて、そこに権力が言論統制をするというやり方は、戦後行なわれたパターンでした。私の先輩の柴田鉄治さんという元編集委員方と川崎さんというNHKの方とが『ジャーナリズムの原点』という本の中でどのように書いていらっしゃると思います。

そういうマスコミに対して、私たちは本当に必死になって、どんなに没になっても投書をするとか働きかけなければと思います。なんで藤岡氏に反論しないのかとよく言われるのですが、今のマスコミでは反論しても載りません。チェックしていますが、『朝日新聞』の最近の文化欄でも書評欄でも、『正論』に書くような右翼の人がどんどん登場しています。

ですから、私たちは僅か二千部のミニコミを出すために苦勞しています。それでもやらざるを得ないと思っています。それぞれの場でマスコミを変える努力をするだけでなく、声を上げるしかないと思います。とくに「女性の視点」で発言し、行動するようにしていただきたいと思っています。

(一九九七年三月九日) 〈歴史の事実を視つめる会〉設立集会にて

「従軍慰安婦を教科書に」をどう思うか

——宝塚第一中学校三年生の作文から——

社会科教師として三〇〇字作文を試みて

1、病んでいる学校、その原因は

本田 芳孝

中学校の社会科教員をして今年で二十年目。勤めた学校は四校目、そして四校のうち一校をのぞいて生徒指導に悩みながらの毎日を過ごしてきた（誤解のないように言っておくが、こう書いたからといって悩まないのがまっとうだとは思っていない）。

そして、そういう生徒たちを相手にいつも考えてきた。「学校って何だ!?」と。このごろようやく見えてきたことがある。「学校ってそんな大層なことちゃうで」ということだ。だいたい学校で身につくことって、必ずしもいいことばかりではないだろう。ええことも、悪いことも、いろいろ身につくのだ。それをええことばかり身につくといまだに錯覚している人がたくさんいるのだ。

そして、世の多くの人が錯覚している最大のものが学力信仰だ。「子どもは学校に行くとかしこくなる」確かにテストの点数はとれるだろう。でも、それらの知識の集大成が生きていくのにどれほどの役に立っているだろう？ 本当に!! 「学校の授業で生きる力」にならないことがわかるから、授業にも学校にも魅力を感じなくなる子どもが増えるのだと考えられないだろうか？

もういい加減「学校ってそんな大層なことちゃうで」と、とらえ直してみませんか。まず大人たちから。そして、大人たちは少しでも「学校に生きる力」に近づける努力をする必要があるのでは……。病んでいる学校、その原因は「子どもが自ら学び、考える力を育てよう」としない学校」につきる。その第一歩が授業だ。

2、社会科を学ぶとは

中学校の社会科を教えているが、二十年前、いや私が中学生のころからの社会科に対する暗記科目のイメージは、依然としてぬぐえていない。それに、このイメージを変えることは学校だけではとうてい不可能だ。そのことも十分わかつている。

では、中学三年間でどういう力がつけばいいのか。私のイメージする社会科とは、とりあえず「世の中の動きを見られる」、その上で「自分の頭で考えられる」、さらに「三年間で世界史の流れがつかめれば」OKだ。

3、いま、やっつけよう

読んで、考えて、書いてみよう。

① 考查時に資料1を渡して三〇〇字作文を書かせる。

② 授業のはじめに新聞記事（No. 4）を読み、感想を書く。

今回は、三年生の四月におこなった実力テストで、作文を書かせてみました。それをお目にかけます。子どもたちは資料1以外たいして判断材料は持っていなかったのですが、見事に大人の「ごまかし」を見抜いています。今さらながら思いました。

「子どもをなめたらあかん！」

被害者でなければ語り得ない証言
まず事実認め教育方法は別に議論を

資料 1

慰安婦にかかる
中学生に教えるな
という側の代表

反対の理由だ



この意味で、慰安婦をとり上げた教科書のすべての記述は、教科用図書検定基準の第二章の次の項に違反している。

(三)……教科用図書の内容は、その学年の児童・生徒の心身の発達段階に適合しており……

※文部省検定済み教科書のような

形で慰安婦をとり上げることは、このように無益であるだけでなく、更に極めて有害でもある。それは、日本人が他国民に比べ世界でもまれな好色・淫乱・愚劣な国民であると教えるからである。そういう根本的に誤ったことを、人生の大切な時期にある日本人の中学生の脳裏に刻み込ませるのである。この重大な、残酷さが、なぜ分らないのだろうか。

すでに日本の若者は、自国への誇りを失い、大学生でも「日本人であることが恥ずかしい」という意識になつていいる。現行の教科書による授業でも、歴史を教わった中学生は、日本は世界で「一番悪い」国だという感想を書いているのである。

文部大臣は、以上の点に鑑み、教科用図書検定規則（平成元年四月告示）第十三条第3項の規定、「文部大臣は、検定を経た図書について、第二項に規定する記載（誤った事実の記載と学習を進める上に支障となる記載）を指す（引用者注）がある」と認めるときは、発行者に對し、その訂正の申請を勧告することができる」にもとづき、教科書の慰安婦関連記述の削除申請をすみやかに勧告すべきである。

教科書に「慰安婦」は要らない！

藤岡信勝

東京大学教授

歴史を歪めた教科書で何が教えられるのか。
文部大臣は「慰安婦」事項の削除を勧告せよ



藤岡信勝

一九四三年生まれ、北大教育学部教授。専門は教育史、歴史教育の理念を目的とする。自由主義を堅持し、民主主義の原則に基き、歴史を教えるべきである。



子ども的人格を崩壊させる教育

慰安婦記述に反対する第五の、しかも最大の理由は、それが、子ども的人格を崩壊させる教育になるということである。

そもそも、学校教育で慰安婦をとり上げることは教育的に意味のないことである。人間の脳部を早熟的に暴いて見せても得るところはないからだ。暗部に目をふさぐべきではないという議論もあるが、そういう頭の知識は大人になる過程で子どもは自然に身につけていくものなのだ。学校教育という限られた時間の中で、教室で、教科書にまでせて、教師が教えないければならないことが断じてない。

この意味で、慰安婦をとり上げた教科書のすべての記述は、教科用図書検定基準の第二章の次の項に違反している。

(三)……教科用図書の内容は、その学年の児童・生徒の心身の発達段階に適合しており……

※文部省検定済み教科書のような

形で慰安婦をとり上げることは、このように無益であるだけでなく、更に極めて有害でもある。それは、日本人が他国民に比べ世界でもまれな好色・淫乱・愚劣な国民であると教えるからである。そういう根本的に誤ったことを、人生の大切な時期にある日本人の中学生の脳裏に刻み込ませるのである。この重大な、残酷さが、なぜ分らないのだろうか。

すでに日本の若者は、自国への誇りを失い、大学生でも「日本人であることが恥ずかしい」という意識になつていいる。現行の教科書による授業でも、歴史を教わった中学生は、日本は世界で「一番悪い」国だという感想を書いているのである。

文部大臣は、以上の点に鑑み、教科用図書検定規則（平成元年四月告示）第十三条第3項の規定、「文部大臣は、検定を経た図書について、第二項に規定する記載（誤った事実の記載と学習を進める上に支障となる記載）を指す（引用者注）がある」と認めるときは、発行者に對し、その訂正の申請を勧告することができる」にもとづき、教科書の慰安婦関連記述の削除申請をすみやかに勧告すべきである。

教科書に「慰安婦」は要らない！

——河野さんが官房長官だった当時の官邸政情について従軍慰安婦問題はこんな意味を持ちましたか。

戦争から半世紀近くたち、冷戦も終わり、日本のアジア外交はこれまで以上に重要な段階に入っている。日本の国際的地位は非常に高くなったが、一方でドイツのニュートン首相やマレーシアのマハティール首相からは、もっとアジアの国々から理解されるように努力すべきだとの指摘もあった。

宮内閣は、日本はもっと品格のある国にならなければならぬと考えていた。したがって、九一年十二月に訴訟を起こした元従軍慰安婦の方々の問題も、やはり道義的に取り組む必要があると考えた。

——政府発表までにどんな苦労があったか。

「政府が法的な手続きを踏み、勢力に女性を強制した」とと書かれた文書があったかといえば、そういうことを示す文書はなかった。けれども、本人の意思に反し集められたことを強制性と言え、強制性のケースが数多くあったことは明らかだった。

——昨年末の朝日新聞社とのインタビューでは「残された慰問にもついて調査して

みる」と、そういう事実(金銭的な強制)は確かにあった。との考えでしたが、未公開の文書がまだあるのですか。

それはありません。「残された慰問」とは、戦後残された野村のうち、私の官房長官諮問を出すまでに見つかつた慰問のことだ。

——文書がもととなつたのか、あるいは自分分してまわつたのですか。

「強制的に連れてこ」と命令して、「強制的に連れてきました」と報告するだらう。

政府が聞き取り調査をした

「募集、移送、管理等の過程を全体としてみれば」という意味だ。管理については、自由行動の制限があった。移送も関係機関の許可をとつてどの船に乗せる、という指示があった。

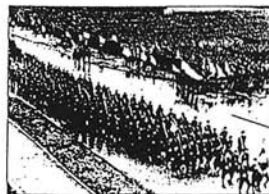


「談話」当時の官房長官 河野洋平氏に聞く

昨が慰安婦について初めて認めた時の代表。



今年度から使われる
歴史教科書



▲学徒出陣壮行会(神戸宮崎病院前、1943年10月12日)

戦時下の国民生活

→戦争は、国民にどんな犠牲をはらわせたか。

ぜいたくは敵だ 開戦のころは、相づく勝利に国民はわきたつたが、戦場に多くの物資が送られ、生活に必要な物が不足はじめると、国民の生活はさらに苦しくなった。戦場に働き手をとられた農家は、人手と農具・肥料の不足に悩み、食料の生産が減った。そこで政府は、米をはじめとする多くの食料・生活物資(せっけん・マッチなど)を配給制にした。

政府は徴用令により、国民を強制的に工場などで働かせた。中学生や女学生までも軍需工場などに動員された。また家庭のなべやかま、寺院の仏像や鐘なども金属物資をおぎなうため供出させられた。

戦局が悪くなると、これまで徴兵を免除されていた大学生も軍隊に召集されるようになった。さらに、朝鮮から70万人、中国からは4万人もの人々を強制的に連れてきて、工場や鉱山・土木工事などにきびしい条件のもとで働かせた。朝鮮・台湾にも徴兵制をしき、多くの朝鮮人・中国人が軍隊に入れられた。また、女性を慰安婦として従軍させ、ひどいあつかいをした。

5. さく、お前には
どう思はるか?
とお前もあせり
300字以内でかきまわし。



韓国の元従軍慰安婦に償い金の目録を渡したと発表するアジア女性基金の和田春樹・東大教授（手前）＝11日午後6時20分、東京都港区赤坂2丁目のホテルで

つな
償い金

き
せんがわ

基金側「気持ちにこたえた」

「女性のためのアジア
・「国民基金」の民間資金方
式による「償い金」を拒み

「女性のためのアジア
・「国民基金」の民間資金方
式による「償い金」を拒み

「女性のためのアジア
・「国民基金」の民間資金方
式による「償い金」を拒み

拒む人の苦しみは続き 受け取る人の心晴れず

関西の市民団体

「「国民基金」撤回を求
める関西・女のネットワーク」
の谷口ひとみさん（東京
都市）は「慰安婦のたれ
ちの心に寄り添う」

「「国民基金」撤回を求
める関西・女のネットワーク」
の谷口ひとみさん（東京
都市）は「慰安婦のたれ
ちの心に寄り添う」

「「国民基金」撤回を求
める関西・女のネットワーク」
の谷口ひとみさん（東京
都市）は「慰安婦のたれ
ちの心に寄り添う」

No. 4

アジア女性基金一九九
五年七月、当時の村山政権
のテコ入れで、元従軍慰安
婦の人たちに償い事業を進
める任意団体として発足し
た。政府が必要な協力をす
ると閣議で了解し、国連法
人の認可を受けた。国民か

ら集めた資金を元従軍慰安
婦に支給するほか、歴史の
教訓とするために従軍慰安
婦問題の関連資料を生かす
研究し、女性の権利にかか
わる活動への支援も進めて
いる。しかし、元従軍慰安
婦の多くは名簿回復のため
に日本政府による個人補償
を求め、基金からの「償い
金」の受け取りを断り、
このため、見切り発車
する形で九六年八月、フィ
リピン政府が元従軍慰安婦
と認定した女性四人に初め
て「償い金」を支給した。

このことが人切との結核に達
した。との認識を強め上げ
た。事柄が公表しなかった理
由について基金側は「被害
者たちが名前を公表する
ことが望んでいない。被害
者の友人が気持ちよく受
け取る形をとった」など
とも説明した。

「元慰安婦には被害者ゆえに
身寄りをなくした人も多
い。裁判は延ばしても、命
に限りがある。「生活苦か
ら一時金を受け取る人が出
てきて買えない。買
められるべき責任をあい
まいにしていた日本政府
だ」

「元慰安婦には被害者ゆえに身寄りをなくした人も多い。裁判は延ばしても、命に限りがある。生活苦から一時金を受け取る人が出てきて買えない。買められるべき責任をあいまいにしていた日本政府だ」

私は・ぼくは・こう思う (女♡男◆)

教科書に載せてほしい

♡本当のこと教えるのが大人のつとめ

私は、本当にあった事なんだし、ちゃんと、事実を、教えるべきだと思う。昔、そういう事があった、って事を、理解(教える)させるのが大人のつとめで、私たちも、それをちゃんと理解していききたいと思う。何でも、あやふやに、するんじゃない、事実を、つたえていってほしい。

どんな事があったのか、ちゃんと、知っておかないといけないし、知っておきたいと思う。事実をふせても、何の解決にもならないし、お互いに、イヤな思いをするだけだと思った。「この問題の他にも、もっと、かくされた事実がありそう…」だと私は思ってる。

♡女性の気持ちを知ってもらうために

私は、慰安婦はよくないと思う。戦争(男)の軍のためにわ

ざわざ女が何でそんなことをしないといけないのか？ 考え方がまちがっていると思う。男性は、女性がいないとだめなのか？ ただ自分の思いで好きかってにするのはぜったいダメだと思う。好きでもない人(女性)に乱暴(暴力)的なこういをしておもしろいだろうか？ ぜったいそんなことはないと思う。

中学校で慰安婦を教えるか、教えないかで問題になっているけど……私は教えた方がいいと思う。少しでもこの時の女性の気持ちを世代の人達に知ってもらうために——。そして二度とこんなことがないように——。人間一人一人が理解し、考えるべきだと思う。何もかも戦争のせいや/戦争なんていやや！

♡悪いところも見せんとあかん

従軍慰安婦を教科書にのせるのは、当たり前だと思う。なぜなら、今の子供たちに、日本が昔何をしたか、どんなひどい事をしたのか、その事実をありのまま伝えなければならぬと思うからです。いい所ばかり見せたって、だめだと思う。悪い所も見せないと、日本がした本当の事を知らないまま大人になったら困るし、私たちはいづれ次の世代へ真実を教えなきゃいけないと思う。だから、私は、本当にあった、ひどい事も、中学生になったら、知るべきではないか？ と思う。今教えなければ

ば、いつ教えるのか分かんないし、中学生でも、高校生でも教える事は同じなんだから、早いうちに教科書で取り上げた方が、これから日本をささえる人にとってはいい。

♡ほこりのもてる日本に……

やっぱり教科書に載せるべきだと思う。

事実上やっぱりこうゆうことがあったんだしくしたりするのはおかしい。子供に影響はあたらなと思う。だって先生たちが、こんなしたらあかんよ、とか注意すればいいし。自分たちが他の国から同じようなことうけたと思つて考えてほしい。いいことばかりみててもわるいことが多ければいいことなんかなんにもならん。むしろかくしたりするなんでもつてのほか。もうちよつと恥を知つてあやまつたり教科書にものせてほしい。もつとほこりをもてるようなりつばな日本にしてほしい。歴史はやっぱりシミからシミまで教えるべきだなあと思つています。

♡また、くりかえすのか？…

なんで慰安婦を教えないけないなんていうんだらう。このことつて、れきしじよう本当にあつたことなんだから、にとど

こんなことしないように学校でおしえてずつとまもつていくべきだと思つた。

戦争だつて、今戦争をけいけんした人がいるからもうやらんつてことにしてるけど、私らの子供の子供のずーつと百代くらいつづいたら戦争なんてどんなもんかしらんから憲法はいかんてなつてもやりかねないと思う。だから、しっかりといいことはいけないんだつておしえておかないとダメだと思ふ。もし教えんかつたら、そんなことがあつたつてずつとしらんままなわけなんだから、また同じことがおこりかねないと思う。だからおしえた方がいいと思う。

◆このことをきつかけに戦争を教えたら

この人たちを、教科書にとり上げることとは、わるくないと思ふし昔にあつたことをよく知りたい。この人たちがうけてきたあつかいは、人にはいえないほどすごいものだとおもう。中学生もそれを知つても損はないと思ふし、あとあと役に立つこともあると思う。

この教授は、法律にしたがつてゐるし、べつにわるくないと思ふけど、やっぱり昔にあつたことはよく知つとかないといけないし、戦争とは、こういうものなんだなという気持ちにさせ

るのが教科書だと思う。この人たちには、とても失礼なことかもしれないけれど、これをきつかけにして、戦争のおそろしさを教えられたらと思う。ぼくたちも、考えかたを変えれば、ぜんぜんちがうことを学ぶことができると思う。

♡大人の人格のほうが崩壊してんじや

どういうことかよく分からないけど、戦争中に慰安婦という人がひどいことをされてたんだったら教科書にのせるべきだと思う。私だって教科書にのつてないし、ニュースとかもあまり見ないから慰安婦っていう人たちがどういう人たちなのか分からない。

でも、この人たちがいたのは事実なんだから別にのつてもおかしくないと思う。何でのせないのかが分からない。そんなに子供にしろたくないことすんだたら始めからしなきゃいいのにね。別に人格が崩壊だなんて大げさだと思う。事実をかくそうとする大人の人格のほうで崩壊してんじやないの？ 今回の記事は今いちよく分かんなかった。

♡違う意味で日本って怖い：

私たちは歴史としてそういう事が、あったという事をしっか

り知っておかないとダメだと思う。だから教科書にのせてもいいと思う。それにいずれはみんな分かってくるんだから、ちゃんと授業として、教えて行くべきだと私は思う。これでは、「中学生は、日本は世界で一番悪い国だ」と書いたとあるけど、私もアメリカとかが怖いってみんな言ってるけど、違う意味で日本が一番怖いと思う。

何かあれば金で解決しようとしているし、かげでこそするのインキくさくていやだ。そういう所はアメリカみたくバーンといつてればいいんじゃないの？ それに自分の意見を大切な時に言わないで後で文句言っても何もならへんって言いたくなるよね。

♡今でも誇りはもてないよ

私は教科書にのせるのはいいことだと思う。藤岡教授のいうことももつともだとは少し思うけど、「極めて有害」だとか言わないでほしい。

その有害と慰安婦と一緒にしないでほしい。なりたくて慰安婦になったんじゃないと思うから。日本人であることが恥ずかしいって思うのは昔の事を見てもあるけど、今だって充分日本人である事に誇りをもてないようなことが続々おこっている。

それに男の人の論議はいやだ。わかつてくれるつもりでも、男の人には一生そういう慰安婦とかの気持ちはわからないと思う。慰安婦というのは有害だというほど害のあるいやらしいものではないと思う。だから教科書にのせるのはさんせい。

♡教えてほしいです

私は、教科書にのせてもいいと思う。反対の理由には、教育的に意味のないことと書いてあるけど、私は、そうは思わない。意味がなくても、どうせ自然に知るのなら、くわしく学校で教えてもらう方が私はいいと思う。残酷でもいいから。

私は歴史を教わってるけど、日本は世界で一番悪いと思ったことはない。悪いと思う人もいるかもしれないけど、そんな人ばかりではないはず。慰安婦については、私もまだまだくわしく知らないけど、教えてほしいと思う。大人は教えない方がいいという考えだけど、私の方、子供からすると、教えてほしいような気もする。だから、別に私はどっちでもいいけど、どっちかなら賛成です。

♡昔のことを知ろう…

あたしは、「従軍慰安婦」を教科書にのせても別にいいと思

う。あたしたちは、少しでもおおくのでき事を知っていたほうがいいから。あたしは、よく祖父母に昔のことなどを聞かされたことがある。はじめは、「いちいち、うるさいな」って思ってた。聞いているうちに、昔って食べて行くのも大変だったんだなって思った。

今のあたしたちって、本当にめぐまれてると思う。祖母たちの、話を聞いてもう少し昔の（戦争の頃の）話を聞きたい、知りたいと思った。だから、さんくでもなんでも昔のことが知れたらそれでいいと思う。だから、「慰安婦」を教科書にのせてもいいと思う。

— 意味が違ったらごめんなさい。 —

◆真実をいんべいするな

この問題は、実際にあったことなだから、真実を子供に教えることはいいと思う。

そもそも、その当時にそんな後々問題になるとわかっていることをしたのがまちがいだと思う。だいたいその頃の政府は何を考えていたのかわからん。とにかく戦争に勝たいたいなんて思っていたんだったら単なるバカとしか言いようがない。

中学生に教えるなど言っているこの人は、真実をいんべいし

ようとしているのと同じことだと思う。子供の人格を崩させるのなかなかしらんけど、真実は必ず次の世代にありのまゝを伝えていくことは、今の大人の最大の義務だと思う。だから、僕はこのことを教科書にのせることはいいことだと思う。(この反対している人は右翼なのか?)

◆次の世代がくり返さないために

ぼくは、このことについて教科書にのせてもいいと思います。昔日本が従軍慰安婦にひどいことをしたことは事実で、正しい歴史を教えるべきだと思います。従軍慰安婦のことをいつまでもとりあげなかつたら、また次の世代が同じようなことをするかもしれないからと思います。そうすることで、従軍慰安婦のことを忘れずにすむと思います。今まで政府は従軍慰安婦のことについて、さけてとおつてきたけれど、事実そういうことをしたのだから歴史の本に書いて、次の世代に教え、従軍慰安婦のことを忘れないようにするべきだと思います。

◆罪ほろぼしはしない

なんか変なおっさんが中学生に従軍慰安婦の事を書いたら、中学生が日本は悪い国だと感じるから、教科書に書くなと言っ

てるが、実に悪いことをしてんだからしゃーないと思う。ちゃんとあやまりゃーいいんだよ。いちいちごちゃごちゃぬかすな。

河野とか言うやつ、結局何がいたいねん。強制的に連れてこさせたことぐらい、だれでもしつとんじや。だめだねー。悪いことをしたらちゃんとかつみほろぼしをしないといけないと思う。戦争の時の事が書いてるけど、結局国どうしのケンカと言つてもぎせになるのは、国民たちだ。こんなだめ。ケンカするなら口ゲンカせんかい大バカ野郎が。

◆悪い国やからいい国に

この「慰安婦の事を教えると人格を崩壊させる」というのはもつともである。そんな小っちゃい子供に何も教えんでもええと思う。「教科書に慰安婦はいらない」と思うが日本の暗い所をもみ消しているだけではないのだろうか。戦争で朝鮮の人を生物実けんとかの材料にしていたというのも、教科書にない。手を何百度にするとどうなるかとか、人間に圧力をかけるとどうなるかとか、ひどいじっけんをしていたのである。その時の朝鮮の人間の呼び名は「丸太」。もやしたり切ったりする「丸太」と呼ばれていました。日本はひどい事をしたんや、けどその時

はそれが普通やからその人たちもかわいそうなんや、今と昔の「常識」というモンがちがうからそんなことができただけや思うま、とりあえず教科書にのせるべきだ。一番悪い国やからこそ一番いい国にこれからしていかなあかんと思う。

♡かくしたって知ってしまう

日本が悪い国と思われたらこまるから教科書にのせないといっているけど、じつさいに悪いことをしてきたんだから今さらかくさなくったっていいと思う。かくしたってテレビや新聞にのっているんだからみんなどうせしってしまうわけだし「なんで教科書にはのせないんだろう」ということになってしまう。それで元慰安婦の人だって心がはれないと思う。とにかく私はそういうことをかくさずに教科書にのせていっていいと思う。悪いイメージをもたれてはいけなかついてるけどみんなすでもっているのかもしれない。これからはよい国にしていこうという気持ちがあうまれるかもしれない。だからかくすのってよくないと私は思う。

♡どうしてあつたかを調べるとよい

私は慰安婦のことを教科書に書いてあつてもいいと思う。い

いところばかり本に書いても意味ないし悪かった所も全部かいてあつた方がいいと思う。日本はいろいろとかくしすぎのよくなきもする。

こうゆうことがどうしてあつたのかとかやっていったら他の悪かった点とかいろいろと分かってきて勉強になると思う。今年度の教科書にも下の方に少しのつてるだけだし、悪くないと思う。

♡本当のことをかくすな!!

私は慰安婦については、別に教科書にのせてもいいと思う。私たちは歴史を学習している以上は知っておくべきだと思う。本当のことをかくしていつてなんになるのだろうか。本当にあつたことは、教科書にのせてほしい。それを読んで人それぞれどんなことを思うかわからないけど。日本の歴史をなんで日本人の私たちが知らない！なんて他国の人にとっては変に思われると思う。慰安婦だつた人はもちろんそんなこと中学生に知られてたまるか!!なんてことを思っているかもしれないけど、私たちだつて知りたい。私たちが生まれる前のことを1つでも多く覚えることが私にとってすごくいいものだと思うから。

♡現実から目をそらすな!!

うちは、慰安婦さんたちのことが教科書にのつても、別にいいと思う。藤岡信勝という人が言っていることも、まったくまちがっているとは思わないけど、ちゃんと本当のことを教えた方がいいと思う。もしそれで子供たちが「日本人であることが恥ずかしい」と言つても、そこからは、「これから2度とそんなことがおこらないようになんとか努力しよう。」と思う人が必ずでてくると思うし、現実にあつたことから目をそらすのは良くないと思う。戦争は二度と起こつてほしくないという気持ちも、もつと強くなると思う。

「今、戦争をしてなくて良かった。その分、これからは、私たちが良い世界を絶対につくつていこう」私はそう思います。

♡戦争の恐ろしさを教えるべき

私は教える事は必要だと思う。

戦争で戦つて勝った負けただけが戦争じゃない。戦争を反対するなら戦争中の従軍慰安婦にも反対するという事だから、戦争について全ていけない事だ。という事を教えなきゃいけないと思う慰安婦の人はいやな思いがあるかもしれないけど、戦争を通してこんなことがあつた事をきちんとすみからすみまで言

わないと戦争に対しての思い方とかが変わつてくると思う。

自分で言うのがいやだろうし教科書に載せる方が自分で発言するより楽だと思う。反対側で人格を崩壊つて書いてあるけど、戦争で起つたことは確かなんだから教える必要があると思ひます。教育的に意味がないというのは絶対ない。戦争の事の怖しさを教育で教えるべきです。

♡たった一行でいいの？

別に、のせてもいいと思う。この東大の教授は話が大きだと思ふ。そんなこと言うけど、これまでになつて日本のきたないうつてことない。新しい教科書では、ほんの一行で終わつて。たった一行でいいのかと思ふ。

被害者(いあんふ)の人たちとかは、どう思つてゐるだろう。自分たちの一生を変えてしまつた出来事が、もみくちゃにされてなくなるのはつらい。何か日本はかくして、もつとひどいこととか出てきそうでこわい。H I Vとかもいろんなことで、きちんとけりをつけてほしい。私はいやな日本もいい日本もひつくるめて知るべきと思つたのでいあんふのことはのせるべきだと思つた。

♡中学生も知る権利がある

慰安婦のことを教科書に載せるなと言っているこの人はおかしいと思う。戦争中に、そうゆうことがあったことは本当のことなんだから、今さらそれをかくすことはないし、中学生にもそのことを教えてもらえる、知る権利はあると思う。外国の人に、変に思われても、それは本当のことで仕方ないし、国が決めたことだから今さらそんなこと言ってももうおそいと思う。

この人は、本当のことをみんなに正しく教えないで、かくそうとして、だめな人だと思う。

慰安婦っていう人は何なんかもまだよくわかってないけど、官房長官ってゆう人も、認めているからあととは、もう高齢な元慰安婦の人たちに、あやまらないとあかんと思う。

♡くりかえさない為にも…

従軍慰安婦を中学生に教えるなと書いてあるけど、どうしてあかんのやろう。別に歴史であつて教えてもいいいんとちがうか？と私は思う。だって、一応どんな事があるうと、日本の歴史であることにはわりはないから。子供の人格をほうかいさせる、といったって、せつとく力にかける。だって実さいに慰安婦さんがいて、どうのこうのっていうことがあったから、別に

いいんとちがうか。それは、やつぱりまだ慰安婦さんがまだ生きてるなら、かわいそうだけど、でも、事実は事実でしかないし、その分の歴史だけとばされているとゆうのも不自然やなあと思う。むしろ、これをのせて、ぜったいこんなくりかえしたらいかんで、という教育にしてもいいと思う。

◆習ったって、人格なんか崩壊しない

知っておかなければいけないことだと思う。反対している人もそれなりの意見があるだろうが、少なくとも人格を崩壊するようなことにはならないと思う。現に僕たちは、地理の時間に新聞記事をつかってこのことを習っている。人格が崩壊した生徒はいない。わけのわからん適当なことを言う奴だ、習った生徒はだれ一人として人格の崩壊などしていない。必要な出来事は学ぶべきだろうと思う。

無益で有害？ それは利益があるとも言えないが、決して有害ではない。だから昔の出来事をちゃんと知るためには「従軍慰安婦」も大切な一つの言葉だと思う。歴史である以上、変えることはできない事実だ。それを取り除くことは、過去の罪を忘れることになる。

◆なぜ反対するの

ほくは、従軍慰安婦についての記事を読んで河野さんは、従軍慰安婦のことを認めて、僕としてはえらいと思った。他からの、指摘を外国の政治にされたのもあるだろうけども、この問題で解決へむけて一歩前進したと僕は思う。

でも、この藤岡信勝という人は、そこまでして、なぜ反対するのだろうか戦時中に日本が、いろいろと、悪いことをしてきただんだから良いことだけではなく、かこにおこしたことを、伝えなければいけないと思う。憲法にひっかかるかなんかしらんけど真実を語らなければならぬ、日本は一番悪い国と思われてもしかたがないと思う。日本は、外国に対して、それなりのことをしてきたのだから。

♡知らないから教えてほしい

私は別に慰安婦の事が教科書とかにのっけてもいいと思う。慰安婦を中学生に教えると子供の人格を崩壊するって書いてるけど、どういうふうに崩壊するんだろう？ 実際に日本が昔やってしまった事なんだから、それがいけない事でも仕方がないと思う。

私は、ちゃんと中学校で慰安婦の事を教えてもらいたい。

私は慰安婦の事よくわからないけど、プリントをざっと読んだ感じでは、あんまりいい事じゃないんだと思う。慰安婦の事をあんまり知らないから、そういうのも教えてほしい。でも、そんなに教科書とかに慰安婦のことをのせたくないんだつたら別にのせなくてもいいと思うけど、私としてはやっぱりのせてほしいなと思う。

♡反省して謝まるべき

私は、のせる方がいいと思う。こんなひどい事があつたのは本当なんだから、みんなが考えないといけないと思う。

でも、もしのせるんなら、ちゃんと本当のことを書いて、ごかいがない様にするべきだと思う。

反対の理由に、日本が一番悪いという感想がある、とか日本人として恥ずかしい、とか書いているけど、それは、その人が本当の事を聞いたりしてそう思うんなら、しょうがないと思う。だから、一番悪かった国だからこれからどうするべきなのかを考えていけばいいと思う。本当に反省して謝まるべきだとみんなが思えば、本当のことを書いた意味があると思う。

♡早く裁判を終わらせて

私は、従軍慰安婦を子供たちの教育に使うな!という人がいるのは、おかしいと思う。歴史で、本当にあったことは、ちゃんと子供たちにおしえて、こんなひどいこともあったんだよ、というふうに歴史を否定しない方がいいと思う。強制的につれてこられた人もいたんだし。この人たちも、もう年がいつているんだから、早く裁判をして、心の中をすっきりさせてあげたらいいと思う。それに、この教科書にのせるのを反対している人は、子供の人格に問題がでくるといつているけど、問題ができないぐらい理解できるように、教えていつたら、いいと思う。

早く裁判を終わらせてあげたらいいと思う。(教科書にものせてほしい)

♡かくすと日本はもつと悪くなる

あまり慰安婦のことをよくしらないので、自分が思ったことの中には間違いがあるかもしれないけど、はじめに思ったのは、「別にのせてもいいんじゃないの?」ということだった。日本が戦争中に悪いことをしたのは、慰安婦だけじゃないのに、そのこと以外はだいたいのせてるんだから、今さらという気もし

た。でもそのことで子ども的人格が崩壊してしまうなら、話もまたべつになると思う。

私も「日本人であることが恥ずかしい」と思ったり、日本は世界で一番悪い国だと思った時もある。だからその上にまた慰安婦のことをのせれば悪い国だと思ってしまうだろう。でもかくすことも同じように日本は悪いという思いがかさなる。

♡女性として 知つときたい

慰安婦つてめっちゃひどい事されててんな。なぐられたりつてめっちゃかわいそうやん。けど、慰安婦はうちは教えてもらつた方がええと思う。かんけいなくかじやなくて女性としてやっぱ、しつときたい。うちはそう思う。この藤岡信勝さんのいけんももちろんゆえてるけど、教育的に意味がなくても日本人がそういうことしてたつてゆうことを、ちゃんとしつとかなあかんと思う。

日本は世界で、一番わるいつてのはちよつといいすぎやけど、それくらいのを日本人がしてきてんからそのへんははんせいしんとあかんのちゃうかな? 私は教科書にいいんふのことがのつてもべつにかまわへんと思う。うちはもつと日本人がどんな事をしてきたか事実をしりたい。

♡のせないと事実が消されてしまう

なんだか、よくこの新聞の意味がわからないので、違うことを、書いてるかもしれないけれど、確かに事実を認め、本当のことを、元い安婦といわれる方たちから、きいて、あやまるべきだと思います。そして、中学生の教科書の問題はのせてもいいと思います。たしかに、大人になるにつれて、身に付けていく類の知識かもしれない、とも思います。

けれど、そうやってのせでもしなければ、そういうことがあった、悲しい事実が、消されてしまい、忘れさられてしまうような気がします。そうでもしないと残らない。というのも悲しいけど、元い安婦といわれる方たちも、年をとって死んでしまつたら、伝えておくところがないような気がします。私は、のせていい。

◆かくさずしつかり 教えるべき

従軍慰安婦のことを教科書にのせるべきだと思う。このまま従軍慰安婦のことを公表せず、そのままにしておいたらいつかは歴史の中から消えてしまうし、本当にもうこんなことにならないようにするためには、かくさずにみんなに知ってもらつて、日本はこんなひどいことをしてきたんだという反省してもら

うべきだ。

日本はただ、朝鮮とかを植民地とかにしたんだと本にかいてあつても、こういううらにはいろんなことがあると思う。本当の意味で歴史を教えたいなら、日本のいいところとかばかりのせずにそのうらまでおしえるべきだと思う。人それぞれ思うかわからないけれども、ぼくはかくさずに、しつかりと教えるべきだと思う。

◆戦争をなくすためにも…

人格の崩壊もくそもない。実際の歴史を教えて何が悪いのだろうか。うそをついて黙っている方がよほど腹立たしい。被害者のつらい思いをふみにじることになつてもいる。被害者に金をやって「もうこれでいいんでしよう。はいさよなら」で済ませているのも事実なのに、日本のやることなすことには理解しようがない。日本人の問題でなく日本政府だけが日本人全体の意見をきかずに全て思い通りにやつている。

中学生にだつてその慰安婦問題に共感し参加し意見を述べることだつて出来る。それは政府の一方的な考え方であつて中学生にとつてはありがた迷惑だ。今こそ真実の歴史を教えるべきだ。戦争が無くなるようにさせる為にも必要なのだから。

♡国の人 責任もって

私は慰安婦のことはちゃんと、次の世代へ次の世代へと教えていかなければならないと思います。プリントに中学生に教えるなどかかいてるけど、本当のことだから全部おしえた方がいいと思う。今さら、かくしてもしょうがないし、かくしたら、慰安婦のかたがたの気持ちをはれるんかってかんじです。

あと慰安婦の人達を強制きにつれていったのがゆるせへん。めっちゃむかつく。強制きにつれていこうとした奴が、いったらええねん。慰安婦の人たちをひどいあつかいしたんだから、国の人がせきにんもって、おれいとかしたらええねん。こんなかんたんにかいてるけど、そうかんたんにできひんねんな。むずかしい。

♡また同じ事くり返さん為にも

日本の昔した罪を全く認めていないようで腹が立ちます。日本人という民族がこれまでにいろいろ悪い事をしてきたし、それなりの罪悪感を持つていないといけないと思います。それに、その事を知らずにまた同じような事をくり返さないためにも、その慰安婦の人々に対しても、これは絶対知っておかないとならない事だと思う。日本人もこれまでしてきた罪を、しっかり

と理解して、慰安婦の人に許してもらえるまで謝罪やばいしう金を払っていくべきだ。それに、別に中学生に教えてもいいと思う。これまで日本がどれほどひどい事してきたのかを知っておいたほうがいい。

♡良い国にするためにも…

私にはどうして慰安婦を教科書にのせるのがいけないことなのか分かりません。本当にあったことなのにそういう事はやっぱり学校で習うべきです。これからの未来またそういうことが起こるかもしれません。そういうことになったら同じことをくり返すだけになります。意味のないことじゃないと思う。

慰安婦のことで子どもの人格が変わるんですか。別に私はこの記事を読んだからといって何も変わりませんでしたけどね。考えすぎえます。やっぱり事実なんですからかくさずにやればいいと思う。私は決して日本が良い国だとは思いません。いろんな事件があるしだからこそ、良い国にしなければいけないんだと思います。みんなが誇れる日本に。

♡大人はなんで でけへんの…

よく分かんないけど、女性がひどいあつかいされたんは本ま

なんやから、私としてはそういうことを知っておきたいと思う。そしてこれからの日本の行動として興味があるし。でも、なんで、今さら、教科書にのせるなっていうんやろう？ それだけ、悪いことをしたって自覚したからかなあ？ 私はそう思わへん。かくそうとしてると思う。かくそうとしてるんやったら中学生もその事知っとくべきやと思う。何も知らんままやったら、けつきよく今の大人と一語になつてしまふ。じじつはかくそうとするんじゃあなく、あやまるべきだ。そんな中学生でも知ってると思う。大人は、なんでそれが出来んねやろう。私は、ぜったい中学生でも知っとくべきと思う。

○そんなひどいことをしないために……

私は別に教科書にのせてもいいと思った。昔、日本はこのよう色々なひどい事をしてきたと言う事をこれからの次の世代へ分かってもらうためにもこの事を教科書にのせてわかって、ちゃんと勉強した方がいいと思う。

よく「従軍慰安婦」のこうぎとか、お金がどうだとか、テレビで言っているけど、その意味はよくあまりわからないし、私はのせた方がいいと思った。でも本当にこの従軍慰安婦には本当にわるい事をしたと思う。もう五〇年近くたっているので、

その人たちはもうおばあさんだし、かわいそうだ。もうそんな事をしないためにものせたらいいと私は思いました。

○日本の悪い点を見せたくないだけ

まだつてゆうかほとんど従軍慰安婦つ事が分からなかったんだけど、戦争中（？）にイヤな事をされた人達の事（？）ですよね。そなら、私はそのじじつを歴史の教科書に、のせるべきだと思います。それは日本にとってはそういう事は、子供達には教えずだんだんと忘れていきたいと思う。でもそれは本当の事だし、そのためにもう何人もの朝鮮人、中国人が苦しんだから、日本にとつていやな事をかくそうとしているのは、やっぱりその人らが、かわいそうだ。

教科書にのせても、子供の人格を崩壊される教育で、教師が教えなければならぬ事ではないとかいつてるけど、本当は、子供が大事とかいいながら日本の悪い所を見せたくないだけだ!! それはダメ。

◆これからは、こんなことがないように

この藤岡信勝つていゆ人の意見もいちりあると思うが、僕としては、のせてもいいと思う。やっぱり戦時中、生まれていな

い僕達には、そのころ何があったのかなど全く経験してないし、わからないので、良い一つのデータとなるわけだから、「従軍慰安婦」は、のせてもいいと思う。だからといって、おかしい話しだと考えず、国全体のしんこな話としてとりあげれば良いと思う。そしてこの先こんなことがないように、していくべきだと思う。

それに、そんなこまかいことを、気にしだすと、何も教科書にのらなくと思う。そうすると教科書の意味がない。だから別にこのもんだいは教科書にのせてもいいと僕は思った。

もつと知りたい／教えてもいい

♡かくしつづける日本がイヤ

私は、慰安婦とかを、ちゃんと、中学生とかに、おしえるべきだと思う。なぜなら、それは、日本の国がしてしまったことだし、日本人が知らなくて、どうするのと思う。そりゃあ、おしえれば、日本は、「いやな国」とか、思う人も、たくさんいると思うけど、それはしてしまったことなんだから、仕方ない。

私にしてみれば、言わないで、かくし続けてる日本がイヤだ。慰安婦の人はきつと、日本がこんなことをしていたということ知ってほしいと思ってる。

だから、今とは言わずに、教科書にも、まだのせなくてもいい、ただ先生の口からでいいから、ちよつとずつでも、おしえていくべきだ。

♡教えたって害はないヨ

なんか、このプリント見とつたらめっちゃムカつく。

「日本人であることがはずかしい」ってかいてるけど、いたいなにはがはずかしいねんておもった。慰安婦を中学生におしえるなつかいてるけど、別におしえたってひがいはないとおもった。この人ぜったいかんがえかたがおかしい。歴史だつて勉強しないといけないことなのに、歴史を教わったことが「日本はわるい」なんてなんでももうのかなあとおもった。

この人たちは、ぜったいにかんがえ方がおかしいとおもった。

◆いつか知ること

従軍慰安婦のことを教えるなといっているけど、いつかは知るので、別に教えてもいいと思う。

中学生に教えるなど書いてあるけど、小学生や高校生になら
教えてもいいのかなあと思う。ほくが思うには、教えるのがだ
めだというのなら、はじめから、慰安婦なんてつれてこなけれ
ばよかったのと思う。

このことを教えることで、子どもたちの人かくをどう崩壊さ
せるのか、はつきりと教えてほしい。

この人たちのかんがえていることは、よくわからない。

◆なぜ、隠すの……

このしんぶんのきじはようあんまりわからないけど、戦争の
ころの日本のじょうたいをのせているということはわかる。日
本は多くの人々をぎせいにしたり、苦しめたりした。しかも、
中国、朝鮮にもきょうせいしてきに日本にこさせていろいろやら
せたみたいなので、今の日本はそんなことをかくそうとしてい
るので、はらがたつ。げんじつにあったことなのに、なぜかく
そうとするのだろうか。やってしまったことなんだから、どん
どんつくなつていけばいいと思う。僕は、どんどんしつてい
た方がいいと思う。今までの日本では、こうゆうことをやって
きていたということをのせた方がいいと思う。しらないままで
いくとまたこのようなことがまたおこるかもしれないから。

♡彼女たちって有害なの……

私は教科書にのせていいと思うけど、「教えるな」という側の
代表の人は「生徒の心身の発達段階に……」ってことを書いてた。
その人はこの問題について、子供だから教えちゃいけない。み
たいな書き方してるみたいで何かイヤやった。どうせ知ること
になるんだから子供のうちにこういうことがあった。とつたえ
ればいいのに。元従軍慰安婦の人が有害な物みたい。けがれた
物にふれるような書き方されたら慰安婦の人たちがかわいそう
好きでなつたわけじゃないのに。

そういうことをひっくりかえって根本的な所から学校でおしえる
べきじゃないかな。その前にこの問題を知って人格が崩壊する
ほど今の子供って幼くないと思う。この問題は教育的に意味の
あることになると思います。

♡知る権利あり

私は、この話を読んでよくわからなかったが、女性を慰安婦
として従軍させてしまったのは現に事実であることならば、中
学生に教えても別にいいんじゃないかな。ウソだったらよくな
いけど、日本での品格のある国にならなければ……みたいな事
はこれからの目標としていけばいいと思います。

昔の、日本は悪いといわれても、本当にそうなんだから……。それを知らないのなら、日本人として知っていないという事です。だから、知る権利あり。

♡イジメと同じとちゃう？

よーわからんケド、その従軍慰安婦は、すごいざんこくで、今の私たちには、想どうもつかないくらいひどいめにあった人たちのことを、中学生とか、高校生の教育をさまたげることになるんかしれんケド、やっぱり昔はこうゆうこともあったとゆうことを知っといたほうがいいんじゃないかと思う。

たしかに、こんなのを教えたなら、みんながみんな同じ気持ちじゃないと思うし、意味のないことかもしれへんケド、昔は、そんなひどいことがあったってことを知ってこれからは、気持ちが変わるかもしれんと思う。

イジメだって同じとちゃうかな？ 子供にとつては、すごい、ざんこくなことやと思う。

そりゃー格はちつとちがうケド、こんなやつたら、イジメってゆうのを教えるナツてゆつてんのといっしょちゃうかな？ 私は知っておきたい。

◆国民みんなで考えればいい

この話はざんこくだなあー。どうして慰安婦ができたのかな？ それはたぶん日本人のわがままで兵士たちがつかれをいやすための道具としか思っていないと思う。ぼくは男だから慰安婦の気持ちはよくわからないけどたぶんすごいやだったと思う。女の子なんかはとくに思ってるんじゃないかな。

「慰安婦について中学生に教えるな」って書いてあるけど、べつにいいと思う。社会的問題だから国民みなさんで考えてかいつしていったほうがいいんじゃないかな。

慰安婦の人にいわせれば、ほつといてって気持ちだろうけど、ぼくはそうじゃないね、今はそんなことないけど何十年前は実さいあったんだからこわいなー。慰安婦はぜったいにこの世からなくすべきだ。

♡どっちでもいいけど、どつちかといえど教えて

私は、どっちでもいいと思う。でも、反対の理由で、子ども的人格を崩壊されると書いてあるけど、そんなことには、ならない気がする。

戦争のとき、従軍慰安婦に、強制的につれていかれて、今も生きている人たちは、そのときはきつと、心のどつかで

ひっかつたままだったんだと思う。

日本は、何か悪いことをして、その後に、あやまることが多
いと思う。後から、裁判したりなんやかんや、ややこしいこと
になる前に、なんとかした方がいいと思う。中学校の教科書に
このことをかいても、そんなに膨きようはないと思う。どっち
かといえは私は、別に教えてもいいと思う。

♡くわしく 教えて

私は、はじめ、このことをよんでぜんぜん、何がなんだかわ
からなかった。そして、もう一どよんでやっとわかった気がす
る。それで、なぜ、中学生にはそんな戦争のことおしえてくれ
てるケド他に、もっとくわしく、おしえてほしいと思う。

それで、私が思うには、なぜ、大人になっていくうちに身に
ついて行くってわかるのがふしぎです。このことに、きょう
み、かんしんのない人だっていると思う。だから、みんなが、
この時のコトをした方がいいと思うし、やっぱ、中学生でも、
日本人は日本人だから、やっぱ、日本のむかしのことぐらい、
知ってても、おかしくない私は、すんごく、思いました。で
も、勉強っていうか、それを覚ぼえるのは、大へんだケド。

♡政治にも興味をもつようになる

私は、「従軍慰安婦」を、中学生に教えてもいいと思う。藤岡
信勝という人は、「子どもの人格を崩壊させる教育になる。」と
言っているけれど、「日本はいけないことをした。」という内容
で教えれば、ちゃんと受け止めて、逆に正しいことと悪いこと
の区別をつけれる人間になれると思うし、真実のことなんだか
ら、かくさず教える必要があると思う。教えることによって、
その後の「従軍慰安婦」に対する政府の対応を見て、自分なり
に、「そんなやり方じゃないけない。こうすればいいのに。」とい
うように、いろいろと考えるようになって、そういう政治面に
ついて、少しでも興味をもつようになると思います。

♡大賛成じゃないけど知っていてソンということはない

私は、真実は必ず年代を問わずに教えなければいけないと思
います。子どもの人格を崩壊させる教育というのはおかしいと
思います。

私は、知っていて損をするということは絶対にありえないと
思います。日本人は自分の都合の悪いところはすぐにかくして
しまう。それが日本人のいけないことだと私は思います。慰安
婦という存在はあったんだから別にわざわざかくすこともない

んじゃないかなあ。と思います。

この事件は、確かにかなり残酷でいつまでも頭の底にのこっているかもしれないけど、真実は必ず、教えなければならぬ、と思います。私は、教科書にこのことをのせるのは大賛成までとはいかないけど、別にいいと思います。

◆真実は真実なんだ

本当のことを教えるべきだとは思うけどそちのたちばなら教えたくはないと思う。

でもしんじつはすべての人が知っておくべきだと思う。多くのちようせん人や中国人が軍たいに入れられたうえに女性を慰安婦として従軍させ、ひどいあつかいしたのはまぎれもないじじつなんだから教えるべきだ。本当に人格をほうかいしてしまうのだろうか。

たしかにこんなじじつがあつたら日本人であるのがはずかしいし、日本人は悪い人ばかりなんだと思われると思う。知るべきなのかわらないべきのかはむずかしいところだと思う。でもやはりしんじつはしんじつなんだから知っておくべきかなと少し思う。

載せなくてもいい

♡誰も習いたくない

「従軍慰安婦」のことなんか、中学校の教科書にのせなくていいと思う。教科用図書検定基準とかいうのに、違反しているのなら、のせたらだめなんじゃないかと思った。別に習わないうといけないことでもないだろうし、そんなのはだれも習いたうとか思わないだろうし、のせる必要はないと思う。

子どもの人格を崩壊させる教育になるとかいうのは、よく分からないうけど、本当にそうなるならのせてほしくないし、そうならないとしても、のせなくていいと思う。

従軍慰安婦としてつれていかれた人は、本人の意思じゃなくて、強制的につれていかれたというのとか、ひどいあつかいをうけたというので、すごくかわいそうだと思った。

♡意味のないこと教えなくてもいい

わたしは、べつに教えてもらわなくても、いいと思う。べんきょうがふえるだけだし。あまりよく、わからないけど、どう

して、そんなに教育したがるのがよくわからない。べつに意味のないことなら、おしえなくてもいいと思うけど、この人（河野さん？）はみんなに、教えたいんだろうな！

従軍慰安婦ってどんなことかはわからんけど、とにかく教えてくれなくてもいい。大人になってから、だれかにおしえてもらう。

わたしは、そう思う。私、だけかもしれんけど、こう思うのは。べんきょうがキライだから、もうこれ以上、よぶんなもんは、いらない。

○有害なこと教えられるのは被害者だ

「慰安婦」というのは、あまりよく知らないけど、人間が、自然に知っていくコトならば、別に、きょうせいの的に、おしえる必要はないと、私は思う。それを、きょうせいの的におしえるのは変だと思う。なぜそんなコトを、無理して、中学生たちに教えなければいけないのか。そこそこを、もーちよつとくわしく知りたい。

中学生にとって、人生最大の時期なのに、有害なコトを教えられるってのは、なんか、すごい被害者だ。私は、そんなのヤダー。そんなコトやってたら、世界の人たちは、日本人のコト

どー思ってしまうのか……。一人の人が日本全体にめいわくかけたら、今度は、「日本人が……」って言われるんだから、悪いコトやってない人はどーなるんだろう。

○教育と全然かんけない

私は「従軍慰安婦」をべつにのせなくてもいいと思う。教育とかに全々かんけないからべつに教育とかに関係ないのに、なぜのせるのだろう。

なんで、子供の人格を崩壊される教育なののにのせるのだろう。そんなに知らなくていい事を、なぜのせるのだろうと私は思います。やつぱり、今は教育に関する事だけを教科書にのせておけばいいと私は思いました。おわり。

◆これ以上、日本のことを悪く見せるな……

僕は、慰安婦についてのことは、反対だ。

なんでかというところな事を今、教えても何もならないし、ただ、日本人の事をこれ以上子供のころからわるくみせるのもあまりよくないと思う。

日本人の事をただでさえ恥ずかしいと思っていんのに、これ以上悪くいうと、あんまりダメやと思う。自分の国に対してほ

こりを失ってしまうとやっぱりだめだと思う。だから僕は、今、こういうことを教えてもあまりいい気分がなかった。

○中学生で習わなくても…

私は、べつに学校で教わるものじゃないと思う。そんな、慰安婦という言葉は教えてもらってもあんまり得じゃないし、中学生のうちに習わなくてもべつにいいんじゃないかと思う。女の人は、死ぬほど嫌な思いをしていたのに、そんなかんたんに教科書にのせるべきじゃないと思う。昔の人は、みんな自分かつてだと思う。(男の人)女の人とイチヤイチャやってるヒマがあつたんなら、国のために、働けばいいのに。反対の方の理由の文章の中にある「子どもの人格を崩壊させる教育」ってどうゆう意味なんだろう。慰安婦を教わったら、私たちの人格、めちゃくちゃになるんだろうか。よく分からないけど、今の私たちには、べつに慰安婦という言葉は必要ないと思った。

◆子供に教えて何の意味があるの？

ぼくは、ぜったいに反対です。なぜかという、子どもの人格を、崩壊してしまうほどのようなことは教えずにいいと思う。そんなに悪いことならば、政治家にまかせて、解決したら

いい、だって子供に教えても、べつに意味ないから。

子供に教えるんだつたらまず自分たちがよく分かり、ちゃんと教えられるようになったら教えればいいと思う。

ぼくは、このことをぜんぜん知らなかったけど、記事を読んでいると、めちゃくちゃむずかしいことだけは、わかった。ほくも、中学生だから言うけれど、こんな、むずかしくて、わかりにくい事を、別に教えずに大人になったらわかんと思う。

◆藤岡さんの言うとおりや

従軍慰安婦は中学生には、おしえたらあかんてー。

藤岡信勝の言うとうりや、従軍慰安婦は教えたあかん。

従軍慰安婦って子供の人格を崩壊させるんやぞーと言うことやーなにしてんねん。

女性を慰安婦として従軍させ、ひどいあつかいをした、これはゆるされないね、これはたえきれへんわ、日本は世界で一番悪い国やなおなじ日本人として恥ずかしいわ。

教科書に「慰安婦」は要らない。

○日本ってやっぱり悪い国と思ってしまふ

慰安婦っていったい何のことなのか、私はこの記事を読んだ

あとでも、よく意味がつかめません。でもその慰安婦のことを、中学校の教科書にのせることによって、中学生に、日本人が他国に比べ、世界でもまれな好色・淫乱・愚劣な国民であるというのを教えることになってしまふところでは、意味がないとかよいに悪いえいきょうを与えろと思う。

私も、今まで歴史などの勉強をやつてきて、やつぱり日本って悪い国なんだナとか、思うこともある。

そういうふうにする人がたくさんできてしまふんだから、私も中学校の教科書には、慰安婦をのせてはいけない、のせなくつてもいいんじゃないかなと思う。

♡時間をもつたいたい

私は、従軍慰安婦なんてどうゆう意味かは、よくわかんないけど、子供の人格を崩壊させるような教育は、してはいけないと思う。

子供達は学校に勉強を学びにきてるんだし（他もあるけど……）でも違反してるような事は学ばせなくていいと思う。そんなん学ばしてる時間がもつたいたい！

それだつたらもつと他の事に使つた方がいい。教師が教えないといけない事なら教えないといけないけど教えなければなら

ないことがらでは断じてないってかいてあるんだし教えなくてもいいと思う。

◆教えられてもどーしよーもない

僕は、この慰安婦というのを勉強するまで何も知らなかった。でも学校で勉強してどんなにひどい事かを知った。戦争中だつたら、（勝つためだつたら）何をしたつていいという物じゃないし、もつと戦争より、人権や命の事を大切にすることが僕はいいことだと思う。

このことを教科書に取り上げるかどうかは、僕もやつぱりあまりこうゆう事は、取り上げてほしくないです。何を思つてこの人は、このことについて取り上げたのかは、ぼくは良くわからない。こんな事教えてどうなるわけでもないし教えられても今はどーしよーもないからこれはのせるべきでは、ないとぼくは思います。（おわり）のせんな！

◆悪い影響があつて良くない

はじめは慰安婦の意味があまり分からなかったけど、その意味が分かつてすごいひどいことだと思つた。女の人を従軍慰安婦として、軍たいの人たちと一緒に付けていくのは、おかしい

と思う。それで自分から行くんじゃないで強制的に付れていくんだから、全体にだめだと思った。しかも暴力をふるったりして、ひどいことをしていたんだなと思った。

それを中学校で教えるのはあまり良くないと思う。それを教えても悪いえいきようがあつてあまり良くないと思う。でも昔にそういうひどいことがおこつていたことを知つて二度とこういうことにならないようにしないとだめなのかなと思つた。だからこういうことは、あつたらだめなんだなと思つた。

♡せっかく忘れようとしているのに

従軍慰安婦を歴史の教科書に載せるべきか、載せないべきかという問題はとても難しい。これは歴史の中で、本当にあつたものだけど、私は別にこの事を教科書に載せなくていいと思う。まだ、歴史の授業で習つてないけど、この従軍慰安婦について勉強したら、日本つてついついいやな国やなと思う。これは、戦争の時にあつた本当の事だけど、教科書に載せると今の中学生には有害だと言つてる人もいるから、この意見に賛成したらいいのに。

それにこの事を知つたもと従軍慰安婦の人が、せっかく忘れようとしてるのに、また当時あつたつらい事を思い出して悲し

い気持ちになると思うから、載せなくていいと思う。

♡どっちにしても、私らに関係ないやん

教えないでおこう。

私は、意味がないことはないと思うけど、人間のダメな所を暴いて見せなくても良い。大人になればきっとそのうちわかるそう信じよう。授業でちよつと話すんなら、政治がわかつて役に立つけどノートにとつたりしてまで習うことじゃない。どっちにしても私らは関係ないやん。教科書新しくしたつて。私は歴史とかこういうややこしいことは嫌いだから、あんまりしたくない。今、教科書を読んてみると、女性をひどいあつかひしたつて書いてあつてビックリした。それはいかん!!と思う。

リアス式海岸つて出た? わからへん。社会全然してへんかつたからなあ…。実力テストやしもいいや。社会は考えてわかるもんじゃない。

♡何でも学校で習うこともない

私が思つたことは、とてもむずかしい問題などが、まだ日本にもたくさんあるんだなあと思ひました。私達、子供が教えてもらわなくてもいいことは、なんなんだろうと思います。説明

の中に「日本の若者は、自国へのほこりを失い、日本人であることがはずかしい」という意識をもっていると書かれています。慰安婦にしても、昔日本がしてはいけないことを行っていたというのは事実なんだから、日本人であるのははずかしいとかんじる人もいると思うと思いました。

でも、大人になって分かって理解していくものなら、それはそれにしたがった方がいいと思います。何でもかんでも、学校で習って知識をつけていくこともないと、私は思いました。

◆少しはやいと思います

ぼくは、この新聞を見て思いました。

ぼくも、この反対の理由を見て、納得した。

慰安婦といわれていたと言う人たちが戦争の時にいた、ということは、知らなくてはダメなことだとぼくは思うけど、まだ、少しはやいと感じました。

記事に書いてある様に、「日本人であることが恥かしい」「一番悪い」っていつていることは、ぼくでもそう思えてくる。だって暴力的に女の人をかり出すなんて考えられない行為だとぼくは思った。

♡戦争被害者は「慰安婦」だけじゃない

『従軍慰安婦』のことを教科書にのせるのは私個人としてはあまりいいとは思わない。いやな場面ばかりのせていると授業を受ける側も教える側もなんとなくいやな気になると思うからでも全く知らなくていいわけじゃない。大人になるにつれてこういう問題は序々に分かってくると思うから、わざわざ教科書にまでのせるべきではないと思う。保証については、私はなくていいと思う。今『元慰安婦』の人に保証金を出した場合、他のことで戦争にかかわった人たちにも、ということになってきりがないと思う。『元慰安婦』の人だけ特別扱いはするべきじゃないと思う。一度は保証金を出した。と聞いたこともある。なぜ今頃になって……。と私は思う。

◆世界の中で悪いと思われるのはイヤ

僕は、藤岡信勝さんの意けんにさんせいです。

なぜかというところの人もゆっているように、学校教育で従軍慰安婦を、とりあげて、教育的に、意味のないことをしなくてもいいのにやるのはおかしいと思うし、きょうせいできに手続きをふまれて駆り出された人々がいるのに、それを、じゅぎょうちゅうにやることはないし、こんな、さんこく、ひれつきま

わりないことを中学生におしえたら、日本というくには、世界の中でわるいと思われるのいやだし、日ほんでも、いいところはたくさんあるんだから。べつにきょうかしよにのせなくても、ぼくはいいとおもっています。

どつちでもええやん

♡勉強することがふえるやん

私はべつに従軍慰安婦についておしえてもらってもえーしおしえてもらわんでもどつちでもえーと思う。

でもおしえてもらって子どもの人格をほうかいさせるところまではいかへんと思う。

もしかしたら子どもの中におしえてほしいって言うことがおるかもしれないなあ。まあ私は勉強することが一こふえるからおしえてほしくない。

別に意味のないことやったら、教科書にのせんでもえーやん。のせへんかったら生きていかれへんってゆーのでもないんやし。のせんでもえーんとちゃうかなあ？ よーわからんけど…。

♡歴史の好きな人だけ…

私はどつちがいいのかわからない。古い昔の文化はぜったいわすれられているので、授業で、教師におしえてもらった方が、いいと思うけど、このないようは、べつにそんなに、知られていないと思うし、学びたい人だけ学んだらいいと思う。それに、子どものじんかくを崩壊されないもんかなあと思う。

やっぱ私は、のせない方がいいかもしれへん。

でもやっぱみんながこんな、むりやりいあんふとかにしては、いけないと思うので、ほんの少しだけ、教科書に、のせて、歴史が好きな人だけ読んだらいいと思う。（知りたい人だけ知ればいいと思うねん）。

◆国が決めたなら…それに従って勉強する

僕が、この記事を読んで思うことは、あまり記事の意味は分からないけど、無意味なことを教えてほしくない。でも記事には「従軍慰安婦」は、中学生に教えると、有害になるって書いてあったけど、僕は、よく意味が、分からないし意味をよく知っている人も、そんなにいないんじゃないかな。だから、別に教科書にのついても、いいと思う。

でも、政治のおえら方さんが、有害になるから駄目だと言っ

ているのなら、のせなかったらいいと思う。僕自身、この「従軍慰安婦」について、よく理解しているわけではないし、知っても、僕には多分何の問題もないだろうから、別に教科書にのせてものせなくても、政府の方で決めたらいい。僕はそれに従って勉強すればいいと思う。

◆いろいろなやつがいるから

前にもならったような気がするけどそのときにも「ひどいやつらだ」とか「さいていだ」とかかいていたかもしれないけど中学校で従軍慰安婦のことを教えることをやめろっていう気持ちもわかる。実さいにこんな話をされては、ぜんぜん気持ちよくないけど「いやなやつらだ」とかかると思え方するやつはいいけど深くかんがえて何かへんなカンちがいというかそういうものをしてしまうかもしれないし、そういうのをかんがえるとダメだと思う。

けど慰安婦のじけんだったって人間がつみかさねてきた歴史だから、同じことをしない、させないように頭のやらかいうちから教えるのもいいかもしれない。でも中学校はいろいろなやつがいるからそのへんのこととはすごいむづかしいと思う。

◆中学生だから…教えてもええけど

べつに中学生に教えてもよいのではないだろうか。なぜならあんなひどいことがあったのならもうにどとあんなことをおこしてはならないのだからおしえておくべきだとおもう。

もうちゅうがくせいなのだから昔あったことぐらい教えてもよいと思う。

でも教えてもいみのないことだったなら教科書にのせないべきなのか。やつぱりよくわからん。人間の暗部を暴いて見せても特に得るところがないとはかぎらない。でも根本的に誤ったことを教えるのはよくないかも——むづかし——。

◆もう知ってるもん

むかし日本が戦争をしていたときの話なんて昔の人が口にしなければ今の人はなにも知らないのに、日本の人がひどいことをしたということは本ただけどいあんふだった人たちはわりやしひどいめにあったのだからきょうかしよにのせてもいいじゃないか。そんなことをしてはいけないというきょういくになる。しかしのつたらのつたでその人たちがいやな思いをするほどはどうでもよくはないけどよくわからない。そのことを、教えるべきなのかおしえないべきなのか、ぼくはどっちでもかまわ

ない。もうしっているから。

◆大人は中学生をなめてる

ぼくは、別に中学生に教えてもいいと思う。ていうかどっちでもいい。子供の人格をほうかいさせる教育と書かれているがそんなことはないと思う。なったやつが頭おかしいだけだと思う。ぼくが思うに、大人の人は中学生をなめていると思う。何でも。

◆ややこしいこと言うな…

べつにこんなんでもめる必要はないと僕は思う。教えたかったら、教えたらええと思うし、教えなくなったら、教えんかったらええし。

何が「子供の人格をはかいされる教育」やねん。こんなむずかしいこと言ったら子供はべつに分からへんし、こんなおしえられたって子供やったらすぐ忘れると思うから、べつに教えてもええんちゃうんか？ややこしいこといちいちゆうな。

——中略——

ところで、慰安婦って何？？？

◆今の教科書にのせたって何も変わらない

べつにそんな事はほんとにどうでもいい事だ。あえて

言うならのせなくてもいいと思う。だってぼくは歴史が好きだけど今までの教科書で「物足りんな〜」とか思った事がないからべつにのせなくてもいいと思う。べつにのせたかったらのせてもいいと思う。べつにのせたからって何が変わらんかな〜とぎもんに思う。たぶん教科書に従軍慰安婦の事をのせたからといって何も変わらないと思うけどな〜と思う。べつにオレとしてはどっちでもえー事やねんけどな。

でも反対の理由が日本が一番悪い国だといっているというのがあるけど、そんなことを言われるようなことをしてきたから言われてるんじゃないかな〜と思うねんけどそのへんはやっぱりわからんかな〜。

決めるのは慰安婦の人たち

◆日本にほこりを持つためにも

ぼくは、従軍慰安婦を教科書に、乗せるか乗せないかは、政府などが、決めるんじゃないかと、その従軍慰安婦が決めることではないかなあと思う。

日本の政府は、中学生は日本人であることをいやるなどとかいてあるが、そんなことをしてまで、自分は日本人だという自覚を、もつ必要はないと思う。

日本人は、たくさんひどいことをしているのだからすんでしまったことはしかたがないので、これからはそんなことがないように気をつければいい、そういうことが、ちゃんとできたら、日本人であることはたぶんいやになることはないと思う。

きちんと、これからは自分たちのやってきたことを反省してほしい。

◆「差別」に似てる

ぼくは、なくせば、いいと思う。どうせ、新聞とか、ニュースとかでできたら、どうせわかってしまうから。

でも、これで似たので「差別」というのがある。ぼくは、こう思った。「そういうことを教えたり、言ったりするからおもしろがってやつたりするんじゃないのかな」って、このことは、同じような関係であると自分では思っているけどどうなのでしょうか。

結局、慰安婦の人たち全員に聞いて、この事を知ってもらってほしいのか、ふせておいてほしいのかを決めてもらうべきだ。

でも、よく考えたら人格を崩壊すると言ったときながら、ぼく達はどうならったような気がする。ぼくらは、人格なんか壊れてない。

◆元慰安婦の人に決めてもらえば

従軍慰安婦になった人々は、中学生に教えてもいいのか、反対なのかで、決めればいいと思う。反対だ、と言っている人も、さんせいしている人も、自分の事ではないのに、あーやらこーやらいすぎだと思う。他の人の事に、本人をむしってかっけてにきめると意味がないんじゃないかな。僕としてはこの事は、慰安婦の事にちよつとだけふれて、あとは、そういう事があつたという事や、またそのような事があつてはいけないという事がわかつたら、それでいいと思う。でもやつぱり、どうするかはその従軍慰安婦の人に決めてもらうのが一番良いことだと、僕は思った。

※この作文は、三年生一八九名(男女比は半々)のテスト回答から選んだものです。全体の約七割が教科書に「従軍慰安婦」を載せることに賛成、三割が反対・どっちでもいいなどの内容でした。掲載文は本田先生に選んで頂きました。♡女生徒のほうがたくさん掲載されていますが、「この年齢では女生徒のほうがどうしても文章力があるので」というのが本田先生のコメントです。

「自賛」「自虐」史観に思う

前田 享子

6月4日付けの『日本海新聞』田村記者の歴史教育観を読み、氏が「強制連行の事実が証明されない限り慰安婦は戦時の風俗産業に過ぎない」と言い切っておられる点について、疑問が湧きました。これは、「公娼であり、商行為であり、お金を取っていたからいい」というふうに私には解釈できるのです。日本にはかつて公娼制があつたことは事実ですが、その手続きさえも云々という反論は、既にされていますので、ここでは省略します。しかし、私は「じゃあ、お金を出して女性を買うのならいいの？」と思うのです。氏は女性の人權について、いかがお考えなのだろうと思つたのです。

私は、日本に一九五七年まで売春という恥ずべき制度があつた事実、女性には参政権や教育権など、無権利で差別的な状況だつた事實は、子どもたちに伝えていかなければならないことだと思つています。歴史教育で大事なことは、過去の大人の生き方を問い合いつつ、ともにこれからどんな未来を描くかだろうと思うのです。歴史認識の違いがそのまま、今の大人の生き方の違いと言えるのでしょうか？

今多くの東南アジアなどで幼児買春客率のナンバー1に日本の男性が挙げられているという報道もあります。日本国内でも『援助交際』という言葉が聞かれます。私には、これらを生み出している根っこが「性風俗に過ぎない」といった性への見方に支えられているように思われるのです。性や生命をモノ扱いした戦争の責任問題へ蓋をしてきたことのツケが、子どもたちへと巡っているのだろうか？ とも心の中では思つたりします。

さて、私の歴史観を押しつけないために、私は子どもたちに情報や資料を提供したいと思つています。こうした私のアンテナに引かなかつた雑誌に、中学校の歴史教科書（七社）の『従軍慰安婦』の記述の現物が掲載されました。229号『あいら』です。

（『日本海新聞』への投書から）

私の四月二十三付の「鳥取特報 自虐的な日本の歴史観 誇りを持てる教育を」について、多くのご意見を頂いた。ここにもう一度、私の意図を伝えたい。

私は歴史教育については、歴史的事実に対して善悪の判断を下すべきではないと確信している。さまざま善悪の要因が重なった歴史的事実を、善か悪かで一刀両断できる万能な人間がこの世にいないと確信している。教えるべきものは、歴史事実のみで、それは確証があり完全に証明されたものに限定すべきだ。この基本的精神で記事を書いたのだ。

私の記事を批判している方々の正義感は立派だが、実際に教科書に記載されている部分をきちんと読んでいるのだろうか。それで記載されている部分が描ききれない事実であるとの確証をお持ちなのだろうか。

加えて慰安婦問題に限

つてはセックスに絡む問題だ。また性教育が必要で、ましてや風俗産業に對しての知識がない中学生にその問題を教えるのはどうか。中学校では風俗産業については教えないが、強制連行の事実が証明されない限り慰安婦は戦時の風俗産業に過ぎない。証明できないから来て何をしていたのか。

本場の引き金は何だったのか。戦争前の韓国や中国の政治体制や国内状況はどうだったのか。欧米列強はなぜ遠いアジアまで来て何をしていたのか。

『歴史教育と国際政治』再論

絶対善も悪もなし

れど、日本軍がやったことは全部悪だから、こんなこともともに教えてしまえというのならそれはどうか。

大東亜戦争にしてもそう。憎悪の念を抱く科学的に原因と責任を分析するアプローチが必要だと思ふ。これが、更なる戦争を防ぐ唯一の方法だと思ふ。当事者である

日本、欧米列強、アジア諸国の戦争前からの戦争に到る地政学的、経済的、政治的な歴史分析をすべきだ。

と行ふべきだ。私はどんなにきついながらも、必ず各当事者に責任があると思う。一面的にたれかが正しくてたれかが悪くはないと思う。それが悪くはないと思う。それが悪くはないと思う。

東条裁判はウォー・ギルト・インフォメーション・プログラムとい

う、戦争の罪悪感を日本人の心に植え付ける計画を持って行われたといわれる。普通に考えれば、東京、広島、長崎で民間人を大量殺害したり、日本を占領したりして、日本より先にアジアで植民地をつくっていた国々、日本の戦争犯罪を数く権利があるわけがない。

私がこのように考え方を持ったのは、皮肉にも

アメリカで教育を受けたからだ。法律大学院留学中では、事例を多角的に分析すること、紛争の当事者には必ず双方に責任があること、絶対の正義は存在しないことを教えられた。特に留学先のエール大学大学院で、開経済学の世界的大家グスタフ・フリス博士の教え

人、アメリカ人からヨーロッパ人として韓国人までも見事に国旗が街中ではためく。どの国でも自国に有利なように歴史を物語として教えている。それは、他国との紛争の危機感を煽っているからだと思う。

五十年も経ったのだから、歴史的研究材料として大東亜戦争を分析すべきではないか。それが歴史の教訓を後世に伝える

を受けてからだ。

生粋のアメリカ人が純粋に経済学的に、日本の占領政策を分析している。出した結果が「韓国や台湾等の日本の植民地は幸運だった。日本の占領政策のおかげで、その後の経済発展もできたのだ」ということだ。百歩正しいとは思わないが、これを私を含めた日本

人、アメリカ人からヨーロッパ人そして韓国人までも見事に国旗が街中ではためく。どの国でも自国に有利なように歴史を物語として教えている。それは、他国との紛争の危機感を煽っているからだと思う。

人、アメリカ人からヨーロッパ人そして韓国人までも見事に国旗が街中ではためく。どの国でも自国に有利なように歴史を物語として教えている。それは、他国との紛争の危機感を煽っているからだと思う。

人、アメリカ人からヨーロッパ人そして韓国人までも見事に国旗が街中ではためく。どの国でも自国に有利なように歴史を物語として教えている。それは、他国との紛争の危機感を煽っているからだと思う。

人、アメリカ人からヨーロッパ人そして韓国人までも見事に国旗が街中ではためく。どの国でも自国に有利なように歴史を物語として教えている。それは、他国との紛争の危機感を煽っているからだと思う。

人、アメリカ人からヨーロッパ人そして韓国人までも見事に国旗が街中ではためく。どの国でも自国に有利なように歴史を物語として教えている。それは、他国との紛争の危機感を煽っているからだと思う。

人、アメリカ人からヨーロッパ人そして韓国人までも見事に国旗が街中ではためく。どの国でも自国に有利なように歴史を物語として教えている。それは、他国との紛争の危機感を煽っているからだと思う。

（鳥取特報 田村耕太郎記者）

その時 あなたは 声が出なかった

関東地方のある地方都市のケンタッキーフライドチキンで働くAさんが、職場で上司に犯され、その結果、Aさんは退職しました。それを裁判に訴えたAさんは、地裁でも高裁でも敗訴しました。

「その時、声をあげなかった」ことが「合意」とみなされたのです。逆転するためには「その時声が出るか」という証言を集めなければなりません。

『あごろ』228号で呼びかけたところ、打てば響くように、たちまち声が返ってきました。今回は5月31日までに届いた声をまとめて掲載します。

Aさんは、その後、残念ながら、「最高裁では扱わない(高裁の判決通り)旨、通告を受けました。Aさんは「上司は職場の配置転換だけで聞かれなかった。そういう処分しかなかったケンタッキーフライドチキンとあくまでたたかう」と言っています。私たちもそれを支援し、この問題を社会問題にしていきたいと考えます。

あるテレビ局から、セクハラに関する特集番組を組みたいので、データがほしいという申し出が〈あごろ〉にありました。セクハラやレイプについての人権問題は、まだまだ目の目を見えていません。もともとっとたくさんさんの声を集めたいと思います。それは、いま係争中の「秋田セクハラ裁判」はじめ、多くの裁判を支援することにもなると思います。ぜひ原稿を下さい。

◆娘が幼い時、突然、犬がおそいかかりました。娘の顔は真つ青でひきつり、声すらあげることができませんでした。

主婦A子さんが、いきなり犯されたとき、恐怖で声さえ出せなかった娘の顔が重なつて仕方ありませんでした。突然、恐怖に襲われたとき、声が出せない(出ない)人の方が多いと思います。四人の知人に聞きましたが、声が出ない三人、大声で助けを求めるは僅か一人でした。

(畠山裕子)

◆学生の頃、昼間通り魔にあったことがあります。首筋をナイフで切られたのですが、その時私は一瞬何がおこったかわかりませんでした。とつさのことで、声も出ません。

「通り魔にあつて切られたんだ」という事実が確認できたのは血が流れ出してからですから、何秒も後だったと思います。あまりにとつさのこと、あまりに恐ろしいこと、あまりに予期しないこと、大声なんか出るはずがないと思います。

(芦谷みすず)

◆わたしは極度に怒ると、身体が冷たくなるほど「冷静」になります(過去の体験から)。しかし、「上司にいきなり襲われたら」という仮定では、果たしてどうでしょうか？
恐怖で声帯がマヒしてしまうかもしれないし、破れんばか

りの怒りで、さわがず、しつかり対決してやろうと一瞬身構えて、「声を出してその手に乗らないぞ」という思いが走ったとたんに、暴力でやられてしまうかもしれない。いずれにしても「NOなら声を出すはず」という発想は「現場」を想像しようとしれない「加害者と同じ男」の立場の「観念」でしかありません。「NOと声に出さないのは合意」という判断それ自体が暴力の肯定です。裁判は暴力を肯定するのですか？

(しま・ようこ)

◆人間が恐怖体験をした時、大声を出すものと誰が決めたのでしょうか。現に、私は驚いた時、怖い思いをした時、声を吞んでしまします。

体力的に差のある男と女の関係で、「大声」を出せなければ「合意」という考え方は「いじめ」の場面で「いやだ」と主張できない子が悪いという考え方につながっているようです。弱い立場の人間側に立てない裁判官に憤りさえ感じます。この怒りを「ケンタツキー」の不買という形で表したいと思っています。

(佃あけみ)

◆男の一時の快楽のために、女は一生みじめな思いをしなければならぬことを、どうして日本の裁判ではわからないのか腹だたい。いっそ犯されるくらいなら殺された方

が私ならいいと思う。私は何度か金縛りにあつたことがあるが、それは本当に恐怖の瞬間で、誰かに助けをもとめたいのだが、全く声がでない。これが実際のところだ。絶対そういう恐怖の状況で声はあげられないと思う。その店長の処罰を強く希望する！

(水根幸子)

◆私は零細企業で働いています。私たちの生活の糧になる仕事は、大企業からの下請けです。大企業で仕事の打ち合わせをする時は、よく屈辱的な目にありますが、一度、二十代の同僚と一緒に先方に行った時、三十代の係長が、いきなり彼女のスカートの中に手を入れたことがあります。彼女はサッと顔色を変えて身を引きましたが、声は出しませんでした。関係がこわれると、私たちは生活できなくなります。「立場」を考えたのだ、と、私は涙が出ました。これが日本社会の実態です。身分保証のないパートが上司に襲われたとき、とつさに声が出るのでしょうか。

(鈴木悦子)

◆「いきなり襲われた」経験はありません。一人の女性として対等に、もしくは尊敬を持って扱われる場合は、いかなる状況にあろうとも余裕を持って対応できます。しかし、襲われないまでも、よくある痴漢行為、性的いたずらに対

しては、何よりもまず、単なる性の欲望ハケ口の対象物にされたという思いで、いたくプライドを傷つけられます。その上、大声を出して「私はこんな目にあっている」と周囲に知らせれば？ さらにウロンな目で見られると思うと、大っぴらにはできませんね。中年になった今ならどうでしょう。

若いOL時代、通勤電車の中は毎日不安でした。多分この感覚が一般的ではないかと思います。それが身近な知人に犯されるなどとなると、一層の驚きで頭が真白になり、一時ボー然自失状態に違いなく、その一瞬に防ぐために有効な手段が取れるとは、とてもとても思えません。

(横田悦子)

◆昔、夜おそく帰宅する途中見知らぬ人に襲われたらという仮定の話で上司が「殺されるくらいなら抵抗しない方がよい」と言ったのを思い出して、その年代の男の人が持っている「操は女の命」ということばとのかけはなれた価値観として記憶に残っていました。

そういう時声を出したら、まず殺されてしまうのではないかしら……相手も「静かにしろ」とか「騒ぐな」とか言うのでしょいうね。

(飯岡祐保)

◆中学三年のある夜、部活で遅くなりました。

家までの帰路に、両側が林で人家のない道が五分ほどあるのですが、ちょうどそこにさしかかったとき、後ろに足音が聞こえました。傘をさした大きな男の姿が見えました。真っ暗で雨が降っていました。傘を持っていない私は、何となく不気味な感じがして、思わず走り出しました。後ろの足音も走り出し、どんどん近づいてきます。

女の子と大男の歩幅とスピードの差。ぐんぐん近よります。小泉八雲の怪談を思い出して、もう後ろも振り返りません。

アツと思つた瞬間、いきなり後ろから傘をパツとかぶされました。まるで網で小鳥をとらえるように。

ギャオー!!

それが自分の声かと思うほど、ものすごい声が出ました。その声のすごさに、男は傘を置いて逃げました。

怖い、怖い、怖い、と思つて走り続けていたから、とつさに声が出たのだと思います。顔見知りの、まさか襲うはずもないと思つている上司にいきなり抱きすくめられたら、多分、声は出ないでしょう。

(大林みち子)

◆このような経験はありませんが、想像しただけで体が硬

ちやくしてきます。ましてや、大声が出せるはずはありません。どうして大声を出さないことが「合意」となるのか、憤りを覚えます。裁判官が男だから……と思わずにはいられません。こういう女性の立場のわかる方に判決を下してほしいです。

(中村実穂)

◆何十年も前ですが、夫が長期入院していたことがありますが。私も働いていたので、見舞いは毎日夕方から消燈まででした。郊外の病院で、帰りは人っ子一人通らない真っ暗な妻畑を十分ほど歩くことになります。

「もし襲われたら?」

「絶対に抵抗するな。騒ぐな。死ぬんじゃないよ。コトが終わつたらすぐ産婦人科で洗浄してもらえ。そして飛んでくるんだよ」

幸いにして一度も襲われませんでした。夫と、こういう会話をしていたのは、よかつたと、今になって思います。強盗にしろ強姦にしろ、男が女を襲う時は「人間」ではなくて「ケモノ」に近い状態になっている。だから、とにかく死ぬな、を第一に——と言つた夫は「男の本性」をよく知つていたのでしょう。万一、私が襲われたら、それを怒るよりも、その傷をどうしていいやそうかと考えてくれた

のだろう、と思います。

(斎藤千代)

◆Aさんの無念さは、察するに余りあります。「声をあげなかったから合意」という言い方は、思いやりも想像力も、デリカシーもまったくない言い方ではありませんか。最近司法は常に「強いものに味方する」んだな……と思えてなりません。こんなことを続けていては、司法は全女性の信頼を失いますよ、と強く言いたいです。

声をあげられる人もいますでしょう。あげられる場合もあるでしょう。でも「すべてがそうとは限らない」。Aさんは声はあげられなかったけど、事実として強引に望まないことをされている。その事実こそが重いのではないのでしょうか。男性だって、拳銃を脇腹にピタリと押しつけられて「騒ぐな!」と言われたら、声が出ますか?

(菅澤礼子)

◆声も出ないほど驚くことはよくあることです。裁判長様「もし女性に生まれていたら」とご想像いただけたらと期待しております。

(高橋ますみ)

◆私自身は同様の経験はありませんが、もしAさんの立場であつたらはたして「声をあげる」ことができるか自信はありません。たいていの女はこのような場合、あまりの恐

怖で「声をあげたくても、できない」のではないのでしょうか。正社員上司vsパートでは、その力関係の差は歴然としています。その上司はその点を計算していなかったとは言えません。

以前百貨店に勤めていた時の上司の一人も、職権を利用してセクシャルハラスメントをしていました。彼は女性社員に対しては紳士なのですが、売場に入りする業者の女性担当者には身体をさわる等の嫌がらせをしていました。女性担当者は相手が売場の仕入担当ということもあって、やめてほしいのだが、なかなか強く言えないと、こぼしていました。見かねて一度彼に注意(?)しましたが、本当に不愉快でした。

私にとってAさんの裁判はとても他人ごととは思えません。どうか最高裁の判決で勝訴になりますように祈っています。

(桑野ゆかり)

◆この事件ですぐ思ったのは、佐藤道夫著『法の涙―検事調書の余白II』の中の貞操の価値の実例である。

声を出さなかったから彼女は同意したのだと被告側の弁護人は言うけれど、では声を出したらどうなるのだろうか。口をふさがれて怪我をするか、悪ければ殺されるかもしれ

ない。殺されたら誰が彼女の責任をとるというのか。

職場の上司であるから、それなりに信頼もしているわけである。まさかレイプされるなんて思ってもみないのが現状。経験したわけではないが、咄嗟のことで声は出ないと私は思う。声を出しても出さなくても、同意はできないのである。同意してないからこそ、勇気を出して裁判に訴えをおこしたのです。声を出さないから同意したなんて、とんでもないこと。これではますます男性が思いのままの行動をとり、女性には安心して働くことができない。声を出す、出さないで問題を解決すべきではないと思います。

（柳澤つや子）

◆ケンタッキーフライドチキンの店長にレイプされた主婦がなぜ裁判で敗訴なのか。胸の底から怒りが込み上げます。そのとき大声を出さなかったという理由だそうです。そんな時、恐怖で声が出ないというのは充分あり得ます。私も大声で叫べるかどうかわかりません。だからといって、それを合意などと言われるなんて、人を裁く人がそれくらい想像力もないということにまったく驚いてしまいました。

数年前、私の職場でもセクハラ事件がありました。セク

ハラしたのは講師という立場の中年男性、被害者は実習に來ていた数人の女子学生でした。およそ二年にわたり、昼間、職場でふざけて体をさわったり、抱きついたり、体を壁に押しつけたりするなど、また、休日に学生を呼び出して遊びまわり、夜は飲みに行くのに学生に送り迎えをさせ、酔った学生の体をさわるなど、だんだんエスカレートしていき、ついに学生がたまりかねてある人に相談したことで公となりました。学生たちは、その人に教わる立場ということではつきりと拒否の態度をとれなかったようです。そして、そのセクハラ男はそういう自分の立場を利用しての許し難い行動でした。

私は、このことはできるだけ多くの人にその事実を知らせるべきだと思い、そのように行動しました。しかし、多くの女性が怒りをあらわにしたのに対し、多くの男性は、笑いとばすか、たいしたことではないというふうな反応でした。その内の一人に、「では、あなたの娘さんがそんな目にあっても笑っていられますか？」とたずねたところ、急に真面目な顔になって「そうか、そう考えると許せないな」と答えました。

セクハラ男に同情的な雰囲気の中で、彼は反省の色など

まったくなくコロコロと態度を変えながら、素知らぬ顔でした。しかし、噂が大きく広がってしまい、また、学生の上司が問題を取り上げたことで、ついに、セクハラ男は辞職となったのです。懲戒免職でなかったことは残念ですが、心にもないことをしたためた一枚の謝罪文ですませられそうだったのが、辞職になったことは本当によかったと思います。

Aさんの問題はわれわれ女性の深刻な問題であり、男性も含んだすべての人の問題なのです。Aさんを心から応援し続けます。

(北 昭子)

◆女性が性暴力を受けることがどんなに理不尽で、筆舌に尽くしがたいことか——日本の社会では残念ながらそのことに気がついていない人が少ないように思われます。被害をうけた女性が、そのことを語れない状況が長く続いてきました。こんな時、被害者に落ち度があったとする周囲の目や、プライバシーが暴かれたり、興味本意な報道にさらに傷ついてしまうことが繰り返し行なわれてきたことが大きいと思います。

今回、不本意な暴力に対して、こういった大きなリスクがあるにもかかわらず、上司の責任を問うている一人の女

性がいることを知り、勇気づけられました。声援を送りたいと思います。そして、法律が女性の感情や不利な立場を慮る姿勢に欠けたものであり、これを運用し裁く立場にある人もまた、こうした視点を持ちあわせていないことにたいへん憤慨しております。

女性に比べて力の強い男性に襲われた時、からだがつくんでしまつて、何をどうしたらいいかとつさに思いつかないと思います。普段そんな訓練は受けていない女性がほとんどではないでしょうか。声も出ないというのが、一般的な反応ではないかと思えます。

仕事をいっしょにすることで、職場の同僚や上司に対して仲間意識が芽ばえ、ある程度うちとけた間柄になることもあると思います。いつも警戒心を持つて、仕事をしないといけないとしたら、とても疲れます。それなのに、その信頼を逆手にとられレイプされたとしたら、被害者に落ち度があるといえるでしょうか。身の危険を感じて、声を出せないことだってある。「声を出さなかったから、強姦じゃない」なんてふざけるな!と言いたい。

わたしも、顔見知りで、家族ぐるみのつきあいがあり、夫とも友達である人に思いがけず、抱きつかれキスされそ

うになりました。みんなでお酒を飲み、カラオケで歌い、盛りあがっている時、一瞬のスキをついておこったのです。その人が気分が悪くなり、吐きそうな様子で洗面所に入ったので、介抱してあげようと思い、疑いもなく、ついて入りました。ドア一枚へだてた空間で、突然見知らぬ男に変身してしまったのです。からだをかわすのが精一杯で、声は出ませんでした。ドアの向こう側には大勢の男や女がいました。わたしが声を出せば、気づいてくれる人がいたでしょう。なのに、とっさの判断でそれを妨げるものがわたしの中にあつたのです。わたしは悪者になりたくなかった。自分が傷ついても、人を傷つけないかったのです。友達や夫を煩わせたくなかったのです。なんというけなげなわたしでしょうか。わたしの自由や権利を侵す人は、誰がなんと言っても悪い人です。それはよくわかっていても、反撃できませんでした。

人とやりあつたり、攻撃されたらなぐり返すというような訓練は受けていません。男なら当たり前と思う行動が、女には許されていません。女らしさという文化のものさしの中に、男をぶん殴る項目はありません。女らしさという文化を刷りこまれたわたしたちは、控えめに生きてきました。

た。襲われた時、声さえあげられないのです。再び同じことが起きたら、わたしはどうしたらいいでしょうか。何ができるでしょうか。自問自答しています。(柳井真知子)

急なお願いでしたのに、各人各様、それぞれ迫力のある原稿が集まりました。日頃から感じていた憤りが噴出したのだと思います。

こういうテーマに対して一人ひとり思いは違うと思います。あなたご自身はどう感じになるか、「私なら声を出す」という意見も含めて、ぜひお考えをお知らせください。裁判で勝つためには、またケンタッキーに意思表示するためには、ある程度の数が必要です。ハガキ一枚で結構です。引続き原稿を集めて、セクハラ・レイプ裁判に勝訴したいと思います。女子労働の裁判がほとんど連戦連勝なのに対し、性差別裁判はなかなか勝訴しません。一つ勝てばそれが判例になり、次の裁判を有利にします。今月もまたハガキを入れました。友人、知人にも呼びかけて下さい。(編集部)

納得できない「新・日米安保」

ジャパンタイムズ紙が「日米軍事マニュアルを協定」と報道した「事実」を、日本のメディアは「安保再確認」と報道したが、6月8日、「日米防衛協力のための指針（ガイドライン）」中間とりまとめが発表されて、さすがに各紙「まるで新安保条約」と憲法抵触のおそれを指摘している。

冷戦が解消した今こそ、米軍基地を解消し、日本が本当の意味で「独立国」になるチャンスと思われるのに、「有事」の際の「共同作戦計画」を強調、かねてから狙っていた有事の際の道路・港湾等の無条件使用や、「周辺公海上」の機雷の除去まで盛り込んだ。

また、すでに事実上実行されている「自衛隊の警戒監視で得た情報の提供」を明記、「経済制裁時の船舶検査」まで組み込んだのは、憲法に抵触するだけではなく、日本が戦争に巻

き込まれる可能性も拡大するもので、「安全保障」どころか、「危険保障」のおそれさえある。

沖縄を足蹴にした「特措法」を九〇%の支持で成立させて以来、国会はまさに傍若無人の感があるが、「気がついた時は取り返しがなかった」先の戦争の轍を二度と繰り返さぬよう、今こそ市民の抵抗が必要ではないだろうか。

憲法改悪へ重大な一歩

〈憲法調査委員会設置推進議員連盟〉設立

5月23日（金）自民・新進・民主など五政党の議員による〈憲法調査委員会設置推進議員連盟〉（会長 中山太郎、最高顧問・中曽根康弘）の設立総会が行なわれた。入会時の会員は二九〇名、その後三〇〇名以上に膨らんでいる。

同連盟は衆参両議院に憲法問題を議論する常任委員会を設置するための「国会法改正案」を提出しようとしている。「国

際関係の変化、地球環境問題の深刻化、価値観の多様化、地方分権と共生社会の必要性など……現行法制と現実の乖離現象」を理由に、「国会に常任委員会を設置し、国権の最高機関としての自覚にたち、憲法問題を議論する」などと主張しており、国会議員化の中で憂慮される。

この動きに対し、5月30日〈21世紀につなぐ憲法五〇周年運動〉など七つの団体が「憲法改悪の動きを許さない！」と共同声明を発表、賛同団体を募っている。

◆連絡先 TEL03・3221・4668/FAX03・3221・2558 〈STOP!改憲・緊急市民行動〉

また、田英夫氏らによる護憲議員連盟も誕生した。改憲の動きを何としても止めるために、市民の力を結集しましょう！

女子保護規定、ついに撤廃

——均等法改正案成立

6月11日の参議院本会議で、男女雇用機会均等法を強化する代わりに、時間外勤務・休日・深夜労働に関する労働基準法的女子保護規定を廃止する関係法案が可決された。この法

律は1999年4月から施行される。

男性に労働時間規制がない現状のままでは、女子の長時間労働が無制限になる不安はぬぐえない。変えよう均等法ネットワークなどの女性団体、日弁連、労組などは「男女共通の労働時間規制」を要求している。また、11日午前、法案に賛成した自民・新進・民主・社民・さきがけなどの衆参の女性議員有志が記者会見し、①時間外労働を男女ともに抑制するため、改正均等法施行までに法的措置を講じる②家族的責任を有する女性の労働条件の激変緩和措置をとる——などのアピールを発表し、首相、官房長官、労相などに申し入れた。

民法改正まで待てない！

別姓待ち望みカップル、別姓で婚姻届

民法改正はなかなか進まず——今国会でも自民党議員の反対が根強く、政府案としての民法改正案は見送られた。衆議院で民主党の議員立法が審議入りし、また、参議院でも社民党とさきがけが議員立法を提出、平成会有志も別に提出したが、共に廃案に。

もうしびれを切らした！と、6月12日、〈すすめよう！民法改正ネットワーク〉の企画で、別姓カプブルが別姓で結婚届けを出してみよう、という行動が行なわれた。

当日、千代田区役所に届けを出しに行った四組のうち二組は二人揃って提出。窓口では職員から「まだ法案が通っていないのでこのままでは不受理になります……」と説明され、氏選択にチェックを要求されたが、「別姓を希望しているの」と拒否し、届けの「その他」の欄に「別姓希望」と記入。三〇分余りで「婚姻届不受理証明書」が発行された。

一組は事実婚歴二年半。共働きで「名前で仕事をする場合が多いので、どちらが変えるのも不便。選択肢を広げること、別姓反対の人にも取り立てて支障はないのに」と不便さを強調。もう一組は事実婚歴一年半。女性が年収百万円以下で「主婦ということになるけど、税金や保険など不利なことが多い。主婦にも名のりたい名前を名のる権利はある。子どもが欲しいけど、このままでは不安」と訴えた。

〈すすめよう！民法改正ネットワーク〉作成のパンフレット『いつまで待てばいいの？ 民法改正を望むひとこと集』は、別姓や婚外子差別撤廃を望む声を満載している。ご希望

の方は切手二九〇円分同封の上、〒101 千代田区神田錦町1-1-6 神田錦町ビル3F 大手町共同法律事務所〈すすめよう！民法改正ネットワーク〉へお申し込みを。

東京・三鷹市が「旧姓」を認める方向へ

民間企業では旧姓の通称使用がかなり一般化したが、役所では禁止が多い中、三鷹市が、旧姓使用を認める要綱作りを始めた。今年中には実施の予定で、東京都では初めて。他自治体への波及も期待されている。

が、「旧姓を使ってもよい範囲」は、市役所内の仕事に関する起案書や、職員名簿・名札など。辞令や給料明細書は「本人の同一性を示したほうがよいので」戸籍名に限る。また、年金受給関係書類などは法律で「戸籍名を使用」と定められているため使えない」という。

破防法より怖い!? 組織的犯罪対策法

現在、法務省が法制審議会に諮問している「組織的犯罪対

策法」は、「組織的犯罪」対策の名のもとに、①団体の人間には刑法に違反する同じ行為であっても刑を重くし、②起訴以前の段階から団体の財産の没収・追徴の保全手続きをとることができるとの内容をもつ「犯罪収益没収」等の規定を設け、③現在も違法に行なわれている盗聴を全面的に合法化させ、④弁護人の弁護権を侵害する……という内容を含んでいる。特に「盗聴の合法化」が最大の目玉といわれ、日本ペンクラブなどが非難の声をあげ、日弁連も5月23日の定期総会で反対決議を採択した。

6月28日午後6時、「とめろー憲法違反の盗聴法案」集体会、カンダパンセ（東京・水道橋駅徒歩5分）で開かれる。連絡先は東京共同法律事務所（03・3341・3133）。

女性・戦争・人権学会発足

男性中心の歴史学では「女性に対する暴力の究明」をしてこなかったが、既成の学会は十分応えてこなかったと、新しい学会が設立され、5月24日、早稲田大学国際会議場で発会式が開かれた。発起人は大越愛子（近畿大学教授）、志水紀代

子（追手門学院大教授）、角田由紀子（弁護士）、鈴木裕子（女性史研究家）さん、ほか。

「女性を利用する戦争の論理」「戦争と性暴力」「戦争肯定論者のセクシズム」「戦争を美化する芸術・文学」「歴史の隠された目的」「戦争責任とジェンダー」「フェミニズムと戦争」「民族とジェンダー」「国民国家の性と暴力」など、テーマは山積している。

年会費六千円、学生会員三千円、賛助会員一口二万円以上。問い合わせは〒577 東大阪市小若江3-4-1 近畿大学文芸学部 大越研究室（06・721・2332）。

那須町議会で教科書から

「慰安婦」「三光作戦」削除を求める請願を採択

6月10日、那須町議会・民生文教委員会は、教科書から「従軍慰安婦」「三光作戦」などの歴史記述削除を求める請願を、委員会採択した。

〈歴史の改ざんを許さない栃木の会〉は、5月30日に同請願の不採択を求める陳情を提出したが、同議会運営委員会は

この陳情を「議長預かり」とし、委員会に付託せず、削除請願のみを採択した。6月16日の本会議でも、同委員会が作成した請願趣旨の意見書が採択された。

秋田県議会、香川県議会などでも教科書削除の動きがあり、予断を許さない状況である。

宮城県、南京大虐殺の学習資料使用を中止

宮城県教育委員会は、5月8日、県下の民間教育研究団体〈みやぎ教育文化研究センター〉が発行した小学六年生用の「近現代史学習資料」を「内容が学習指導要領から逸脱しており、授業で使うことは不適切」として、使用中止を県下各小学校長に通知した。

指摘を受けた学習資料は、戦後五十年を機に、同センターの会員らが近現代史授業プランの試案として作成したもので、南京大虐殺や七三一部隊、従軍「慰安婦」などの存在を写真やイラストつきで紹介しているが、学習指導要領には、「児童の発達段階を考慮し、社会的背景にいたずらに深入りしないように配慮する」とあり、県教育委員会は「小学六年

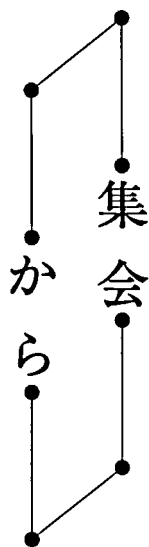
生には深入りしすぎ」と判断したという。が、「学習資料まで行政が判断するのは権限の逸脱」という反論も強い。

女性歴史館は（財）婦人少年協会に委託

「予算が余ったので女性歴史館を」という労働省の突然の提案に、五十二団体でもかなりの反対意見があったことは、ご記憶にあると思うが、結果的には予算がつき、九八年度に東京・港区芝の「産業安全会館」敷地内に設立されることに決定した。

その事務は、財団法人婦人少年協会に委託され、同協会内に開館準備室が設けられた。開館準備室長は竹村毅氏。仮称「女性歴史未来館」。せっかく女性労働の歴史館が出来るのなら、企画段階で女性たちの声を大きく反映してほしいもの。どしどし提案を。

◆連絡先 〒108 東京都港区芝5-29-12 三田中央ビル12階 財団法人婦人少年協会 女性歴史未来館開館準備室
TEL 03・5232・0421/FAX 03・5232・0420



ワイン祭り 1997

5月17日(土)、愛知県女性総合センター(ウィルあいち)で「ワイン女性企画(あごら東海)」主催「ワイン祭り1997」が行なわれた。

昼の部は、昨年秋に行なわれた「第二回ドイツ・エカンフェルデ市における日本女性による手工芸展」の写真展、バングラデシュ・中国の留学生も参加した調理実演販売会などバラエティーに富んだ催しが行なわれ、夜は田中美津さんを迎えて講演会が行なわれた。

*

「名古屋で美津さんの話を聞いた!」

「美津さん」は東京の人。講演もイメージトレーニングも当然こっち(東京)の方が便利なのにやっぱり出かけたのは、

ワインのメンバーの中に存在している「美津さん」を感じた
いから。それに「ますみさん」に会うと身体のだこかがポワツ
と暖かくなるし、いつもと同じ仲間の自然な会話や仕事を手
伝えるのがうれしい。

インフォメーションの表現は、「田中美津」だったり「美津
さん」だったりしていた。今、それがよくわかる気がする。

田中美津……歴史の人、日本のリブの立役者。「他人に分
かってもらおうと思うのは乞食の根性」「性欲処理機」「便所」
などという過激で威勢のいい、そして何かなつかしさを感
じる文章を思い出す。そのなつかしさはわたしの体験ではなく、
フェミニズムの歴史として知った「時代」としてのなつかし
さだ。大学の学園紛争のころはわたしは高校生、論理など分
からなかったけど何かしたかったあのころのなつかしいアジ
演説。『あごら』の一九七二年創刊号の復刻版を見ると、その
ころのわたしが浮かび上がる。企業が欲しがらる短大卒業生と
して何不自由ないOL暮らし、「女らしさ」のままに、むしろ
リブを避けていた自分……。

美津さん……身体ごとトリートメントしてもらっているよ
うな気分になる声で静かに語った人。時々、話しっぷりが著

書「いのちのイメージトレーニング」のように元気でアップテンポになるが、声はそのまま。気もちいい。「便所からの解放」のころもこんな声だったのかな……。時間をさかのぼり、心が遠いところでざわつきながら今の自分が癒される、わたしにとってそんな声だった。

(西川けい子)

講演「子どもに生命の輝きを」

5月17日(土)、午後一時から鳥取県民文化会館で、『お子育て』シリーズなどの著者 黒岩秩子さんの講演「子どもに生命の輝きを」に参加しました(主催は「不登校鳥取たんぼの会」)。

黒岩さんは我が子や多くの子どもたちとの出会いを通して、「親の許容量が大きいほど、子どもは諦めることが少ない。不登校で傷ついた子どもは親に黙って見てて欲しいと一番願っている」などと話されました。そして「今の子どもは『いじめ自殺』は、親が子どもを学校に行かせないことで防げる」ときっぱり言いました。「不登校は学校の問題だと思いつけていたが、子どもが初めて取り結ぶ親との人間関係があるべ

き論」に支配されていることも大きく影響していることに気づかされていった。親が子どもを「せて人並みに」といった世間体にとらわれ、命令や押しつけをすることで、子どもから自分でやったという感動、生命の輝きを奪ってしまったのではないかと投げかけられたのです。

学校の問題としては、「教員たちは「ねばならない」や禁止を最小限にし、子どもたちが来なくなるような学校づくりに精を出すことだ」と語られました。

例えば、多くの学校に「忘れ物をしてはいけない」という規則がありますが、「これは忘れ物というかたちを取った生徒の心の表現に思える。教師はその心だけを受け取り、その子が事後処理を考えるプロセスで、お願いできる人間関係をどれだけ作り出せるかが、生きる力だ」と彼女は定義します。この人間関係で一番難しいのは、考え方や環境など自分と違う人とどう付きあうのかだ、と言いつちります。

彼女は、保母時代に知恵遅れと言われる子どもたちとの出会いを通して、それまでの自分の物差しでは測れないことを目のあたりにし、「迷惑」や「わがまま」を考え直さざるを得なかったと言います。重いハンディのある子どもや個性豊か

な子どもの一人ひとりを、学校はアメーバのように触手を伸ばし抱きかかえ込むことで、誰にとつても楽しい学校に近くことが可能なのではないか、という提案がされました。

彼女主宰の大地塾では、「さしきわりのあることを言い合おう」「迷惑をかけ合おう」を合い言葉に、関係が紡がれているということを聞き、私は、自分の許容量の狭さが、輝くはずの子どもの生命を削つてはいないか、周囲とどんな関係を紡いでいるのかを問い直したい、と思いました。(前田 享子)

シンポジウム「教科書に真実と自由を」

〈教科書に真実と自由を〉連絡会は今年3月25日に家永三郎氏、山住正巳氏ら二五名の呼びかけで発足した。発足後たちだちに教科書会社を訪れ、また教科書執筆者を激励した。地方議会に出された「従軍慰安婦」記述削除を求める請願に反対し、不採択を求める陳情も行なっている。

5月31日(土)、東京・二ツ橋の日本教育会館で、同会と〈歴史の事実を視つめる会〉との共催でシンポジウム「教科書に真実と自由を」が開催された。

問題提起は歴史学者の藤原彰さん、ルポライターの西野瑠美子さん、ジャーナリストの黒田清さん。

藤原さんは政治の流れと教科書攻撃がいかに運動しているかを、家永裁判や靖国参拝の動き、細川元首相の「謝罪発言」などの歴史的流れに即して説明。

西野さんは元「慰安婦」をはじめ戦争被害者の証言を紹介しながら、「証言者がいないから信憑性がないなどという話は成り立たない」と語った。

黒田さんは「これは決して教科書だけの問題ではない。これは『心の自由』の問題」と断言して、差別とは何かという広いところからやっていこう、と呼びかけた。

特別報告として、HIV訴訟原告の川田龍平さんが発言した。川田さんは「資料がない」という言い方はHIVの時と同じ。そう言われることで、いなくなつた存在にされる人たちが出てくる。国に資料を出させることが必要。心からの謝罪がなければ、いくらお金をもらつてもしかたがない。生命を守らせる社会をつくるのが大切」と語り、将来は教師になりたいという希望を述べた。

会場からは教科書の執筆者、中学校教師、高校生、韓国か

らの留学生、大学院生などさまざまな立場から発言があり、「事実を歪曲して持たせる誇りなんて誇りじゃない」「七〇%の中学生は『慰安婦』という言葉を知っている」などの発言があった。特に高校生が自分で生徒の権利を守る会のホームページを作り、インターネットで流しているという発言に、会場は大いに沸いた。

(あ)

遅れた日本の子ども買春に早急に対策を！

児童の商業的性的搾取に反対する

スウェーデン会議フォローアップ会議

昨年スウェーデンで開かれた「児童の商業的性的搾取に反対する会議」は二七か国の参加を得て大きな成果をあげた。それを実効性あるものにしようと、そのフォローアップ会議が、在日スウェーデン大使館と日本ユニセフ協会の共催で5月28日、スウェーデン大使館で開かれた。日本で開かれたのは、日本が「要注意国」と目されたため。

昨年の会議で、アジアだけで一〇〇万人の子ども買春^{かいしゅん}があり、十三歳未満が増加、年々低年齢化している状況がクローズアップされたが、その買い手の大手は日本人で、とくにタ

イヤフィリピンでは一、二位を占めていること、ポルノの最大の製造・供給基地は日本であることも、世界の注目を集めたのだ。

ザル法で知られる日本の売春防止法と違って、国際的にはいま、買い手を罰する法律が主流になっている。法整備が急務とされるが、この秋には、日本の女性議員が中心になって議員立法で国会に出すことが、席上、報告されたのは、心強いことだった。

一方、ポルノビデオは、日本は「表現の自由」を口実に摘発が難しいことが国際的にも問題視されている。貸ビデオ店百軒の調査で、子どもポルノビデオを置いていなかった店はわずか三軒だけだったという。

淳ちゃんの事件に象徴されるように、子どもが犯される例がこのところ急増している。せめて子どもポルノからだけでも、根絶しなくては、と考えさせられた。

それにしても、会議を開いた翌年、すかさず「最問題国」でフォローアップ会議を開くとは、さすがスウェーデン。閣僚の半分が女性という国だと感心させられた。

(田中まち子)

開け！水門 救え諫早干潟！

「諫早湾、しおまねき」大行進」

長崎県・諫早湾に「ギロチン」が下ろされ、潮と干潟の交流が断たれてから二か月。6月14日（土）に東京、代々木公園で市民団体〈諫早湾緊急救済本部〉が主催する「諫早湾、しおまねき」大行進」が行なわれ、全国百五十八の自然保護団体をはじめ、「諫早湾を考える国会議員の会」の超党派の議員らが参加した。（主催者発表で約七百人。）

救済本部の山下弘文代表が、この二か月間の干潟の変化を報告した。乾燥が進む干潟では、巻き貝の一部を残して、貝類はほぼ壊滅。水門閉鎖前は豊富に生息していたカニ類も、干割れのすき間にわずかに確認できる程度に激減。また、渡り鳥のエサとして貴重なゴカイ類も姿も消しつつあり、救済本部関係者たちも焦りを募らせているという。

集会後、参加者は「農水省、国民の声を聞け」などと書いた横断幕を手にJR渋谷、原宿駅前を行進。行進後はこれから諫早へ戻るというムツゴロウの代弁人こと原田敬一郎さん

に、集会で集まった黄色いハンカチを皆で託した。15日、長崎県庁をこれで取り囲む予定。

◆署名運動を継続中。連絡先は〒102 千代田区九段南

4-7-22-304 諫早干潟救済本部東京事務所

TEL 03・3258・1951

あごら二十五周年大阪版——斎藤千代さんとの夕

「あごら」も今年で二十五周年。記念集会第一弾として、大阪で斎藤さんのお話を聞く会を持ちます。関西方面の会員の方はぜひご参加下さい（東京集会は最終ページ参照）。

テーマ「女が働くこと・生きること」

——二十五年間女性問題の発信を続けて——

日時 7月10日（木）6時半

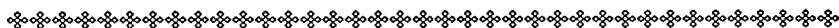
場所 大阪女性いきいきセンター北部館（クレオ大阪北

資料代 300円

主催 さわの会（あごら阪神共催）

連絡先 澤田和子（あごら阪神）

TEL 06・322・2203



ス障害」と聞けば、ほぼ内容の察しもつく。

「大きなショックを受けた人が、しばらくの間普通にがんばっているんだけど、ずいぶん長い間経ってから、突然症状が出るという現象です。」と言うのが村上春樹の要請にこたえた河合隼雄の説明だ。アメリカなどに比べ日本人は衝撃を個人で受け止めず、全体で受け止める。だから、家庭内でブツブツけんかしたりという形では出ても、個人が神経症的な症状を露呈するということは少ないという。でもこのことは、喜んでばかりもいられない。症状が出ないということは「それをがっちり一人で受け止めて悩む力がない」「症状を形成する力がない」ということでもあり、「結局自分で乗り越えるしかない、というふうになかなかならないのです。だって、責任はみんなにあるわけだから、『わたしの不幸をなんとかしてちょうだい』という格好になるから、なかなか治りにくいのですね」ということだ。

河合隼雄のこの言葉は、地下鉄サリン事件の被害者（関係者）の聞き書きをまとめた『アンダーグラウンド』（村上春樹 講談社）に登場する精神科医中野幹三の言葉、「『怖い怖い』と言って来られる方のほうが、治りやすいんです」とも呼応する。「怖いことを怖いと感じたり言えたりするのは、少し整理ができてきているということです。それができないくらいに混乱しているというか、何がなんだか分からない状況の中からまだ出られない方も多いのです」とも。

ところで'97年4/14号のTIMEは、“Terror Underground”のタイトルでこの本を取り上げている。以下、末尾の部分を引用する。

For its victims, the aftermath of the attack has been especially traumatic. The majority still show the physical effects of sarin poisoning, including fever and migraines. Many also suffer Post-Traumatic Distress Syndrome, re-living their ordeal in flashbacks and nightmares. “However hard you try, you can’t forget,” says Yoko Iizuka, 24, a bank worker, of the terror that still haunts her. Murakami has made sure that non-victims, too, will not forget what happened underground in Tokyo that sunny Monday morning.

下線部（筆者）の表現でいくとPTDSの表記になる。「心的外傷後ストレス障害」が「心的外傷後苦悩症候群」となり、中身にさほど差はなさそうだ。シンドロームのほうが使い慣れて一般的なので使っただけだろう。専門家はやはりPTSDの方を使っている。ペルー人質事件で使用回数はさらに増えそうだ。

ガイドライン見直し中間報告に強い反発

「有事の際は沖縄が前線基地になる」——日米防衛協力のための指針（ガイドライン）見直しの中間報告に対して、沖縄では強い懸念の声があがっている。

那覇空港を抱える那覇市の親泊康晴市長は「今までに何度となく民間機と自衛隊機のニアミスがあり、県民に不安を与えてきた。さらに、米軍機が加わるようなことになれば、（ニアミスの）危険度が一段と増すことになる」。新川秀清沖縄市長は「有事の際、施設を提供するとすれば、沖縄が前線基地になるという危惧もある。県民の願いに逆行する見直しは容認できない」。

桃原正賢宜野湾市長は「アメリカの世界戦略にうまく利用されつつある。那覇空港を一時提供するといわれるが、もともと同空港は軍民共用で危険性が指摘されていた。朝鮮半島をいたずらに刺激するだけで、時代に逆行する内容」と、それぞれ危惧を表明した。また、大田昌秀知事も6月9日の定例記者会見で「沖縄の将来について懸念されていることが覆いかぶさってくる」と不安を語った。

る」と不安を語った。

市民運動側から〈違憲共闘会議〉の有銘正夫さんは「ガイドライン見直しは日米安保そのものの強化・拡大であり、有事立法に一步近づいた。これは絶対許されない。ガイドライン見直しが憲法に反する方向に踏み込めば、基地強化固定化につながる」。〈基地軍隊を許さない行動する女たちの会〉の高里鈴代さんは「基地の返還を話し合った日米特別行動委員会は沖縄のためではなく、ガイドラインを見直して、より強い軍事同盟を結んでいくための地ならしだったのが証明された。女性たちの痛みを逆に利用したことは許せない」と訴えた。

第4回公開審理報告&「名護ヘリポート 基地建設」を許さない6・6集会

6月6日（金）、東京・水道橋の全水道会館で〈沖縄・一坪反戦地主会〉主催の「第4回公開審理報告&「名護ヘリポート基地建設」を許さない6・6集会」が行なわれた。

沖縄から

はじめに海上ヘリポート建設地である名護市辺野古の闘いを記録したビデオが上映され、地元で報告がされた。那覇防衛施設局普天間対策室の説明チラシには、海上ヘリポートの必要性について「海上施設案は、基地の固定化を避けたいとする県民の方々の要望を踏まえ、必要性がなくなったときには撤去が可能であること、また、航空機事故による周辺への懸念も緩和されることなどから考えられた」と述べられているが、漁業への影響、騒音、環境破壊などヘリポートのマイナス面については、あいまいな表現に終始している。比嘉名護市長の住民の声無視に抗議して、市民の間から「住民投票で決定を」という声があがり、名護市民投票推進協議会設立委員会が結成されることになった。結成集会が6月6日に開かれることも報告された。また、ヘリポートいらない名護市民の会も現在会員を募っている(0980・54・3643)。

5月29日第4回公開審理については、河内謙策弁護士から報告があった。特措法改悪後初めての公開審理で、地主側から「地主の権利を奪う特措法は憲法違反」と批判が続出。その他の地主側の求釈明論争について

も那覇防衛施設局側の回答は地主側とかみあわず、むしろ求釈明論争を通じて国の申請のずさんさが明らかになった。5月9日に沖縄県収用委員会が、施設局が嘉手納飛行場のある土地所有者の名前を誤って申請したことに対し、却下の採決を下したことは、収用委員会が国寄りにならず自主的姿勢を堅持していることを示しており、地主側に評価された。(れ)

沖縄—韓国—日本民衆をつなぐ

6・14フェスティバル

6月15日(日)に日比谷野外音楽堂で開かれたコンサートには、東京エイサーシンカー、東京サムルノリ、八丈太鼓、大山真理と仲間たち、朴保バンド、寿、ソウル・フラワー・モノノケ・サミットなど、沖縄・韓国・ヤマトから実力派ミュージシャンが集まり、観客が思わず舞台上がって踊りだすような、熱のこもったステージを展開した。トークコーナーでは韓国で米軍基地返還運動をしている金容漢さん、沖縄を撮り続ける写真家石川真生さん、実行委員会の天野恵一さんが、基地撤去へ向けてそれぞれの思いを訴えた。

「災害被災者等支援法案」

市民Ⅱ議員議員立法が継続審議へ

市民と議員でつくってきた「災害被災者等支援法案」が5月20日に参議院に提出されてから一か月近く、同法案は審議入りされず、「つるし」の状態におかれていたが、国会会期切れの前日の6月17日になってやっと参議院災害対策特別委員会で審議が開始された。発議者として、田英夫議員（社民）が趣旨説明をした後、次国会への継続審議が決定し、翌18日の参議院本会議で了承され、廃案をまぬがれることとなった。

日本では初めての「市民Ⅱ議員立法」の原型となる「生活再建援助法案」が発表されたのが昨年5月29日。約一年の道程をへて5月20日に国会に提出されてから約一か月間、有楽町での街頭リレートーク、新聞への意見広告、日比谷公園でのテント暮らしで訴えなど、被災者と支援者は審議入りをめざしてさまざまな取り組みを行ってきた。

6月15日には日比谷公園テント事務所前で市民交流会を開いたが、その時は会期切れを目前に控え、「このままでは廃案かも」という悲観的な予測の方が強かった。それだけに、6月18日に参議院会館で行なわれた市民と議員の共同記者会見には、継続審議になったことへの安堵感があふれていた。

会見では、まず田議員が継続審議入りまでの課程を報告し、「市民Ⅱ議員立法推進本部」代表の小田実さんが「継続審議になったことは市民の努力の結果。民主主義の根本を固めることができた。実現の可能性は前より高まった」と発言し、継続審議についての声明を発表した。また、被災地議員や被災者からは「この秋に行なわれる予定の神戸市長選も注目してほしい。どこでも災害は起こりうるのだから、全国的に運動を展開してほしい」という声があがった。

議員側からは参議院議員の栗原君子さん（新社会）、石井一二さん（平成会）、山下芳生さん（共産）が「これからが勝負。9月の国会では私たちが受けて立つことになる」と抱負を語った。衆議院からは辻元清美さ

ん(社民)から「審議をつくせば問題点がみえる。早く衆議院に送ってほしい」とエールが送られた。

最後に〈公的援助実現ネットワーク〉事務局長の中島絢子さんから、6月21日に兵庫、29日に東京(文京シビックセンター・シルバーホール)で報告集会を行なうという報告があった。

〔声明抜粋〕

私たちは『災害被災者等支援法案』の速やかなる審議入りと可決を求める声明」(6月2日)を発表したのですが、それは被災後一年半にして今なお根本的な問題が解決されないままに放置されている被災地の現状を憂えるとともに、議会制民主主義の原則を踏みにじるような政治状況が継続していたからです。

しかし昨日、通常国会の最終段階において、被災者の多くが、今や唯一の救いとさえ見なし始めているこの法案が災害対策特別委員会に付託され、継続審議が決定されました。これは被災者にとって明日に希望をつなぎ得る貴重な政治的な動きであるとともに、議会制民主主義の再生の第一歩ともなる快挙であると私た

ちは考えます。この付託と継続審議を決定された超党派議員に感謝するとともに、次期議会の開会までに、またそれ以後も、私たち市民もこれまでこの「市民II議員立法」の実現に努力されてきた有志議員、あるいはまたそれぞれの立場で「公的援助」の実現を求めて努力されてきた議員諸氏とともに、法案をより現実的、理想的なものに練りあげていく努力を重ねていきたいと考えます。

そしてこれは単に被災地の市民、あるいは国会内の政治家諸氏だけの問題ではなく、日本全体の市民の問題であります。各地各層の市民、地方自治体の人々、そしてまたマスメディアの人たち、すべてがともに協力しあって、「人間の国」樹立の基本となるこの法案の実現に努力することを、私たちは期待します。

◆連絡先〈市民II議員立法推進本部〉

TEL 03・3813・6584 (東京)

TEL 0797・38・2585 (兵庫)

〈公的援助法実現ネットワーク〉事務局

TEL 078・577・8893



語りかけたいあなたへ

大里知子

母の手

母の手は、どんな人の手より、やさしく温かい。

そして、いつも正確で確実に、私の希望にこたえてくれる。

私が生徒の頃から現在まで、病気のときや日常のことなど、この母の手のやさしさや温かさに、どれだけ支えられ助けられてきたか分からない。

こういう母の手も八八歳という年齢を重ねて、大分シワが深くなってきた。でも、温かさやさしさは変わらない。

五十数年という歳月いつも変わらないのが、不思議に思えてならない。

私は、今まできょうだいの中で一番、母の手を独占しているような気がする。

でも、私はこれまで一度も感謝のことばを、口にすることはない。

今度こそ、つきなみな言葉でもいいから、思いっきり大きい声で言ってみよう。

「お母さん、ありがとう」を。

*

この「語りかけたいあなたへ」は、小さな印刷にして、兄の病院の待合室に置いています。今月で十二回になりました。

昨年十二月にひいたインフルエンザのため、一月は不覚にも休んでしまいました。でも、まず一年間続けられたということは、私自身大きな感激です。

毎月、印刷を引き受けてくれている、阿部恵子さん（大里病院事務）に「毎月続けるのはたいへんですよ」と、言われました。

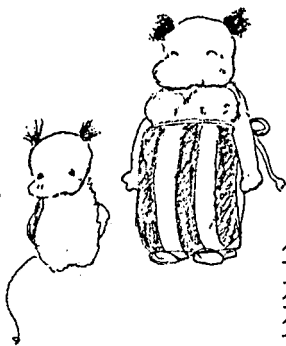
ほんとうに、締め切り日が近づく度に「どうしようか」と思ったものです。

こんな私が、なんとかここまで続けてこられたのは、私の文章を読んで感想を言ってくくださる方々のお蔭だと思います。

これからも手が動くかぎり、つづけたいと思っています。

ですからみなさんも、『今月のは面白くなかった』とか『今回はまあまあだった』と、お声をお聞かせくだされば嬉しいですよ。

（一九九七・五・一五）



シリーズ・母を語る 3

女三代の百年——祖母・母・そして私

広田 寿子

斎藤（千代） 今晩は。今日は『女三代の百年』（岩波書店）というご本で、最近とくに脚光を浴びておられる広田寿子さんをお迎えしました。

広田さんは、経済学ご専攻のたいへん地味な研究者でいらして、お名前をご存じない方もおありかと思いますが、女子労働についてすぐれた論文をたくさん発表しておられます。日本女子大に移られる前は労働省で経済職として働き、日本の労働問題、後には女子労働問題について研究を続けてこられた貴重な方です。最近「肝炎」を患われ、「夜の外出はしません」とおっしゃるのを今日はむりにお願ひしました。では、さっそくお話を――。

母がのこしてくれた遺稿

私は三年前、A型とC型の複合肝炎になりました、こういう集まりに出るのは久し振りなので心配していたのですが、ごちんまりとお話しできそうなので安心しました。

私の本『女三代の百年』を読んでくださった方、どのくらいいらっしゃいますか（かなり挙手）。わざ

わざと買っていたいてありがとうございます。シリーズ「母を語る」は、この前増田れい子さんが話されましたね。増田さんの場合、お母さんが大変有名な住井さんですが、私の母は全く無名で一介の庶民にすぎません。でも、母はたまたま亡くなる五年前、卵巣腫瘍の疑いで切開したところ、卵巣癌が相当進行していて、「これは半年もたない」と宣告されながら、結局五年間生き延びたのです。その療養中に遺稿をたくさん残してくれたことが、私がここに出てきて皆さんにお話するきっかけになりました。

生活史年表作成を学生の宿題に

母の遺稿が主要な材料になった、『女三代の百年』に入る前に、念願の私なりの『女子労働論』完成とは別に、家族の生活史年表を是非作成したい、とずっと考えていたことを初めにお話しておきたいと思っています。その引金になったのは、昭和が終わった一九八九年までの二十三年間の日本女子大在職中の最後の十年間、毎年学生に夏休みの課題として、生活史年表の作成を義務づけたことです。

私が所属していた家政経済学科は、経済学を使って生活問題を考えるために一九六四年に新設された学科です。私が労働省から女子大に移ったのは設立三年目の六六年（昭和四一年）ですが、その頃家政経済学科の一回生は、敗戦前後に生まれた人たちでした。言いかえれば極端な食糧難で、母乳ばかりか牛乳を手に入れるのも難しい時代の子供でした。だからその人たちは、日本の貧しさをまだ体で覚えており、経済学を通して生活問題を考える場合、割合その受け皿がありました。ところがだんだん時代が下がって、日本が「高度成長」期に入ってから生れ育った学生たちは、少なくとも私の目から見て生活実感がとても希薄になりました。大学の三年ともなれば、間違いなく二十年前後の生活体験をもつ筈で

すが、どうも体験が体験として生きてこないのです。元来経済学は日常の様々な現象の背後にある本質を見抜くところに意義のある学問ですが、大体生活そのものに関心がなければ、折角の経済学も宙に浮いてしまいます。私が女子大退職までの約十年間(七八年～八八年)、毎年学生に生活史年表作成を課した理由は、そういう作業を通して日本人の生活が、かつてない大きな変動の渦中にあること、その変動には経済的、政治的、社会的背景があることを、身をもって知ってもらいたいためでした。したがって具体的な作業としては、自分たちが気がついた時にはすでに身の回りにあったので、いささか大袈裟にいえばまるで神武の昔からあったように錯覚しがちな、電気製品などの耐久消費財をはじめとする当時としては新型の商品やサービスが、それぞれの家庭にいつ導入されたか、その動機は何であつたかをまず調べることでした。しかしそれだけなら小学生にもできますから、それらの導入の背景を経済学を学ぶ学生にふさわしい形で押さえてみることも同時に求めました。そこで学生たちはいやおうなく生活との関連で、日本のみならず世界の動きにも関心を持たざるを得ない羽目に追い込まれたのです。

私が接した学生の数は一学年で六、七十人でしたから、退職するまでに約八百人をこえるレポートを読む機会がありました。そしてこの体験は私自身にもとても大きな意味があつたのです。例をあげるとお母さんが川で洗濯をしていたことを知ってびっくりした学生がありました。自然に恵まれていた地方では、そういうことは決して珍しいことではなかったのですが、子どもの時から見慣れている電気製品つまり洗濯機も冷蔵庫も、昔から家庭にあつたものではないことに、多くの学生が改めて気づきました。食べ物でも佃煮や煮豆のような加工食品は昔から売られていたとは言え、防腐剤がたくさん入った大企業的大量生産物が大々的に市場に出回ったのは、ビールや砂糖などの例外を除けば、いずれも経済の「高度成長」がもたらしたことも、それぞれの家庭での、生活の激変にふれたなかで納得できたようです。

こういう作業は事柄が家庭内の変化に関するものですから、お母さんやお父さんに一つひとつ確かめてみる必要があります。しかもできたらこの際、お祖母さんやお祖父さんにもいろいろ伺ってご覧なさいと勧めました。その結果意欲的であればあるほど、学生たちはそれまで考えても見なかった新しい発見にたくさんぶつかっています。戦争中の話も、家族が戦争に駆り出された話も、身近な問題として身につまされて聞いているのです。

それまで学生たちは、正規の授業で歴史を勉強してきました。その気にさえなれば、私の若い頃のような神代から始まる非科学的な歴史でない、ある程度科学的な歴史の勉強が可能であったはずですが、「高度成長」が拍車をかけた猛烈な受験戦争は、既に歴史を暗記科目に追いやっていました。そのため大方の学生は、試験が終われば何の悪気もなく歴史離れができたのです。それだけにこうして激変した生活環境を実感するなかで、家族をめぐる歴史の足取りを辿りながら、「こんなことがあったのか」とまざまざ感じたと率直に述べたレポートがたくさんありました。万物すべてはその歴史をもっています、歴史を意識して使いこなせるのは人間の特権です。そういう特権をムザムザ放棄する傾向が最近際立っているだけに、私は生活史年表作成を歴史の勉強を体に刻み込む有効な方法と確信し、そういう作業を学生に課した責任上、私もまた独自の生活史年表を、是非いつか作って見たいと思いつけていました。

なおここで、生活史年表作成がもたらした二つの効果について簡単に触れておきます。一つは学生たちの生活史年表作成が、家族のきずなを強める上で、思いがけないほど大きな役割を果たしたことです。もう一つ、年表作成を通じてそれぞれが実感できた、日本生活上はじめての怒濤のような、大企業の商品やサービスの家庭への侵入は、それこそが現代を動かしている、利潤最優先の資本の行動の結果であることも、事実を通して理解が深まったようです。

『女三代の百年』は偶然の産物

ところで『女三代の百年』の出版は、何よりも母の遺稿の存在が重要なきっかけになっていますが、そのほかにもいくつかの偶然が重なっています。その一つはいよいよ私自身が家族の生活史年表の作成に着手したことです。それは、初めにも申し上げたように、肝炎を患って社会的活動をすべて放棄したこと、回復期を迎えて今度こそ本業を全うしようと、その準備のためにワープロの台を動かしていて圧迫骨折をおこし、また寝込んでしまったこと、再び起き上がれるようになった時、こんな時こそ生活史年表作成だと思い立ったこと、というような紆余曲折がありました。

こうして思いもかけず私と家族の生活史年表作成に取り組んだところで、私にとつての母の存在の大きさに改めて気づいたちょうどその時、母が亡くなる前の五年間に薙半紙に書き溜めていた遺稿を、たまたま伴侶を痛で失った弟が、その遺品整理のかたわら見つけたして届けてくれたのです。私も弟も既に遺稿の一部には目を通していたので、ずっと気にはしていたのですが、二人とも忙しさにかまけて母の死後三十七年もの間全面的な整理ができませんままにいました。そういう時もう一つ嬉しい偶然が重なったのです。それは退職する時卒業生から贈られたワープロを何とか使えるようになっていたのです。

必要に迫られてワープロの魅力を知る

ちよつと横道にはずれますが、もしワープロが手元になかったならば、とても『女三代の百年』は完

成しなかったと思うほど、私にとってワープロは重要な武器になってくれましたので、私自身なかなか使いこなせなかったワープロに、どうして慣れ親しむにいたったかをお話ししておきましょう。

退職前に、退職したら「所沢通信」でも出そうかと私が口走ったのを聞きつけて、卒業生がワープロを贈ってくれたのですが、現物を手にして私が早速おこした行動は、本屋に行って、名前はわすれましたが、ワープロ指南書を買ってきたことです。そして一応読んで見たのですが一向に身につきません。そのうち次から次へと用事ができて、いつの間にか書斎の無用な飾り物になってしまったのです。卒業生たちに、「高かったですよ」と脅かされながら、実際に稼動するまでに五年が経過しました。

こんな便利なものを使いこなさないほうはないと、今でこそ思うのですが、私が初めてワープロを使って完成させた第一作は、九四年の十一月末、戦時中在学していた母校から来た、当時の学生に対するアンケートの最後の項目「あなたは後輩に何を望みますか」への回答でした。A4判二枚にわたってぎっしり書いてみますと、なかなかうまくできたので、続いて第二作として執筆目録を作成しました。第三作が敗戦の翌年の一月二四日脱稿の「新しい教育の方針―覚書」という未発表の原稿のワープロ化です。この文章については、『女三代の百年』の、「肌身で感じた新しい時代」で触れています。戦争と敗戦を体験して二十五歳になったばかりの私が、半世紀前に何を考えていたかを示す証拠として、二百字詰原稿用紙五十枚あまりをワープロでおこしたのです。

こうして、ワープロが次第に身近なものになりつつあった時、全くタイミングよく母の遺稿が手元に届き、私はすかさず裏半紙にペンや鉛筆で丹念に書かれた文章のワープロ起こしに取りかかったのです。いろいろな点で時期が熟していたのかも知れませんが、それにしても、何でもやってみなければ、ものにならないことが、とてもよくわかった体験でした。本を読んでいただけでは、何の役にもたなかった

ワープロが、具体的な目的をもって接した時、突然生き生きと活動を始めたのです。ワープロの発明者に、大きな感謝の気持ち湧き上がっています。

蛇足になりますが、こんな便利なものを手元に置けるのがまさに現代。年配の方のなかにはこの文明の利器を敬遠しておいでの方も多いでしょう。しかし年配だからこその体なかに蓄えてこられた貴重なご体験を、是非ワープロで記録して、個人や家族の財産にするだけでなく、社会の財産にもして頂きたいと、私は私自身の体験から痛感し、そういう記録の大切さを今みんなに触れ回っているのです。

「母の徒然草」と「娘が辿る母娘の戦前・戦後」

それでは母の話に移りましょう。母が亡くなる前の五年間、主に費半紙に書き遺した手記は、字数で十万八百字、四百字詰原稿用紙になおすと二五二枚という分量になります。母は面白いところのある人で、ニッポン放送の「便りに寄せて」という朝の番組（ラジオ）に投稿して、今東光さんに「みみずく説法」は「人間らしく胸のすく話」で、「洒脱さがよく分かり、時には病気の身も忘れて、おなかをかかえて大笑いして」おり、「永遠の生命に入る前に一言ご引導」下さい、と頼んでいるのです。それが今さんの手に渡り、その返事を要約すると、「生きている人に引導を渡すのは初めて」で、「引導になるかどうか判らないが、自分は計らいを用いないことを処世訓としている」ということでした。

このような母の手記にニッポン放送への投稿も加えて、それを私は「母の徒然草」と名づけました。その内容は、①生まれ育った農村での幼い日の思い出、②その母・私の祖母の回顧（母のおもかげ）、③母の創作（おさよ、秋子、あさ子）、④記録（乳児期、手術まで、こんちゃん）と随筆風の短篇（夢、貧

しき人々に代わりて、迷いから空想へ」と日記（一九五四年五月五日～六月一日）、⑤短歌など、⑥今東光との往復書簡、という構成です。

この母の遺稿は、全生涯の一部の出来事に限られているので、そういう手記を残した母の生涯を娘の立場で辿っておこうと考え、改めて筆をおこしたのが「娘が辿る母娘の戦前・戦後」です。したがってその時期は、一応二十世紀寸前の母の誕生から、その死（五八年十一月）にいたるまでに限られています。日本人の生活面に、経済の「高度成長」の影響が及ぶ直前までの物語というべきでしょうか。

その内容は、①母の結婚まで、②空中楼閣の大連生活、③帰国Ⅱ忍び寄るキナ臭い風、④開戦から敗戦まで、⑤敗戦とその後の閉塞の日々、⑥生き抜くための娘の模索、⑦つかのまの母の安堵、⑧三十歳にしてようやく母から独立、⑨母の晩年、という順序でまとめてあります。

その結果、母の手記を前編とし私の手記を後編とした、『ある明治女の六十年』という、製本以外はワープロもコピーもすべて私の手になる、部厚い三四九頁の手製本ができあがりました。これが、『女三代の百年』の原本なのです。ただし本格的な出版にあたり、「母の徒然草」は女三代に関わりの深いもの（母の「幼い日の思い出」、娘の「乳児期」、母の創作「秋子」）を選んで縮小再編成してⅠ部とし、「娘が辿る母娘の戦前・戦後」も紙幅の関係で一部省略してⅡ部としてあります。

娘が読む母の「幼い日の思い出」と「母のおもかげ」

少なくとも『女三代の百年』で取り上げた「母の徒然草」は、大別すると、母の子供の頃、大連での娘の乳児期、敗戦後の生活難への挑戦という形で、三つの異なる時代を背景にしています。

最初の子供の頃の前半は、
 的な農村、つまり静岡県榛
 原郡の大井川に近いお茶ど
 ころが舞台です。母の「幼
 い日の思い出」には、病氣
 が小康状態にあった一九五
 四年から五五年にかけて、
 娘と息子を視野において書
 いたものと、死去（五八年
 十一月没）した年の一月か
 ら三月頃にかけて、前年の
 夏に誕生した初孫に宛てた
 手紙形式のものとの二種類
 があります。そして初孫に
 宛てた最後の手紙には、「お
 祖母ちゃんは、病氣が悪く
 なって、死の苦しみの中に
 いながら、今日までこうし
 て生きていられるのは、小

の系譜(1990 年)

教育程度(万人)						就業状態(万人・%)			
在学 者	小学 新中	高校 旧中	短大 高专	大学	未就 学	就業者(うち農)	雇用者	雇用率	女子比率
0	60	10	1	0	3	1 (0)	0	0	24
0	86	21	3	1	2	5 (1)	1	1	26
0	129	42	4	1	2	16 (5)	4	2	28
0	153	60	6	1	1	35 (13)	10	4	31
0	179	93	11	2	1	74 (25)	26	9	31
0	179	146	15	4	1	128 (36)	59	17	30
0	186	176	17	7	1	199 (32)	122	31	32
0	172	194	24	11	1	254 (23)	176	43	37
0	151	240	36	18	1	306 (15)	227	50	39
0	116	307	69	31	1	349 (14)	266	50	38
0	65	256	81	39	1	261 (12)	203	45	35
1	26	203	103	48	0	190 (7)	154	40	31
3	19	204	119	48	0	234 (3)	214	54	37
68	23	202	115	22	0	313 (1)	303	70	50
410	19	59	—	—	0	78 (0)	76	16	47

【女四代の年表】(資料「国勢調査」一九九〇年)【女三代の百年】より転載

ちょうど日露戦争が始まった頃の、今から数えれば九十年も昔の全く牧歌

さい時の懐かしい思い出に
支えられ、たとえ一〇分でも
二〇分でも苦しみから遠
ざかることができたからで
す。」と述べているのです。

この母が描きだした二つ
の「幼い日の思い出」には、
外地育ちの私には体験のな
い農村の自然や風習や人情
があります。九十年も昔の
話ですから、恐らく同じ場
所が今では様変わりしてい
るはずですが、当時の小学
校の児童、餅つき、正月の遊
び、雛祭、お彼岸、おこも
りなどさまざまな農村の生
活や行事が、実にリアルに、

まるで私もそこで暮らしているように伝わって来たのには、今回初めて出あった母の文章だけに、とても新鮮な驚きと喜びを噛みしめました。

日本の女四代

世代	記号	年齢(歳)	誕生年(年)	人口(万人)	誕生年の経済的、社会的情勢	敗戦時の年齢(歳)
		100歳以上	1890年以前	0	天皇制確立までの過程	55以上
I	A	95~99	91~95	3	日清戦争前後	50~54
	B	90~94	1896~1900	18	日本資本主義確立	45~49
	C	85~89	1~5	56	日露戦争に突入	40~44
	D	80~84	6~10	115	戦後社会の複雑化	35~39
	E	75~79	11~15	182	冬の時代、第一次大戦参戦	30~34
II	A	70~74	16~20	226	大戦景気、生活不安、デモクラシー	25~29
	B	65~69	21~25	291	体制矛盾激化	20~24
	C	60~64	26~30	351	恐慌、中国干涉	15~19
	D	55~59	31~35	394	十五年戦争開始	10~14
	E	50~54	36~40	409	二・二六事件と準戦時体制	5~9
III	A	45~49	41~45	454	戦時下、敗戦	0~4
	B	40~44	46~50	531	占領下(窮乏、解放、反動)	
	C	35~39	51~55	448	朝鮮動乱、講和・安保	
	D	30~34	56~60	386	「高度成長」に突入	
	E	25~29	61~65	399	「高度成長」本格化	
IV	A	20~24	66~70	433	「高度成長」爛熟	
	B	15~19	71~75	488	「高度成長」動揺、挫折	
	C	10~14	76~80	416	世界的大不況・国際婦人運動	
	D	5~9	81~85	364	超「合理化」進行	
	E	0~4	86~90	317	バブル経済・世界情勢の混迷	

子どもの頃の後半は、私の母が十二歳になった時、家庭内で生じた悲劇がテーマになっています。比較的裕福であった農家の、幸せて働き者の嫁である母の母、つまり私の祖母が、信じきっていた夫に好きな女ができて動転する様子を、十二歳の娘の目ととらえた話です。まだ小学生であった私の母は、愛しあっている男女に飲ませると縁が切れると信じられていた、縁切り榎という神木の実の粉末を、その母と私の祖母から預かって、父が女と暮らしていた家で飲ませるために一週間も頑張ったけれど、ついに目的を果たせませんでした。

私は祖母には一度も会ったことがなく、また母が書き遺した「母のおもかげ」を読んだのは、母の死後です。もし生前に読む機会があったら、祖母のことも、祖父のことも、そして当時の田舎の暮らしのことも、いろいろ聞けたでしょうが、すべてあとの祭です。でも母が娘や息子や孫に、病中にも拘らず精一杯書き遺してくれたことは、何と嬉しいことでしょう。今回その遺稿が本になったことで、大勢の人の目に触れ、庶民の歴史の一駒（こま）に加えて頂けるならば、母にとっても私にとっても望外の喜びです。

なお、母が書き遺した「幼い日の思い出」や「母のおもかげ」を読んでいて、私にとつて新しい発見がたくさんありました。そのうちの幾つかを並べてみましょう。例えば小学校で、入学のさい父兄が教師に届けた干菓子や、教師が逆に新入生に毎日少しづつ与えたこと。かばんがない時代で、児童は木綿の風呂敷に本と石盤を包み、斜めに背負って登下校したこと。からかさ以外に雨具がなかったこと。算数の時使う小石を教師が引率して近くの浜に拾いにいったこと。教師はいつも竹の鞭で児童の注意を喚起したこと。教師は児童を呼び捨てにし、どの学級にも五、六人の落第生がいたこと。出生届が遅れた子がいて新入児童の年齢がまちまちであったこと。末っ子の場合など、学校から帰れば膝の上に抱き上げて乳を与える親もあったこと。日露戦争の戦勝祈願のため、日の丸の小旗をもつての全校生の神参りが

はじまったこと。校庭で戦死者の村葬が営まれると、児童はそれをすぐ遊びに取り入れたこと。服装は縞かすりの手織り木綿の筒袖に三尺帯をしめ、天氣がよければわら草履、雨の日は下駄をはいて通学した。学制改革で小学校の義務教育六年制実現（一九〇八年＝明治四一年）の時期で、母の周辺では四年で学校をやめ町に奉公に出された子も少なくなかったこと。

もう一つ、母の子どもの頃の祖母や農家の暮らしの特徴に触れておきましょう。祖母の生家は「かさや」と呼ばれていたこと。町に行けば、買物袋がない時代、子どもへの土産を両方の袂に入れて帰って来たこと。眉毛をそりおとし、真っ黒に染めた歯はつややかで口元を優しくみせていたこと。よそに行く時は角砂糖くらいの白粉（おしろい）を水でとかして化粧していたこと。女と暮らしていた父の家で、母は初めてすき焼きというものを食べたこと。心労のあまり大病した祖母は、一時天理教に凝って家の中に教祖を祭る神棚を作ったこと。明治四十年前後部落には一台の自転車もなく、子供たちは一里や二里の親類へのお使いは平気で歩いたこと。日露戦争をきっかけに新聞に縁のなかった家でその購読が増えたこと。町で買ってきた柱時計が珍しく、近所の人が毎日見に来て振り子の音に耳をすませたこと。おそらく日露戦争当時、身内が兵隊にとられないよう「おこもり」したこと。などです。

江戸時代には既婚の印だった鉄漿（おはぐろ）を、日露戦争当時祖母がまだしていたとは全く意外でしたが、同時にその頃から農村にも文化の波が押し寄せ始めているのを、今回母の手記を通して具体的に理解できました。戦意高揚の時代の徴兵忌避の「おこもり」も、私には初耳です。新しい発見はこのほかにもたくさんありますが、どうぞ皆さんがそれぞれのお立場で探してみて下さい。明治、大正はおろか、昭和でさえも刻々と遠のいてゆく今日、庶民の生活史を中心に発掘し、それを社会に還元することの大きな意義を、私は文字どおり一介の庶民である身内の素朴な手記を通して、しみじみ感じており

ます。上から下りてくる無味乾燥な歴史、場合によっては歪曲された歴史ではなく、人間の血や汗や涙がたっぷり滲みこんだみんなの歴史を、客観的な事実の上に築くために、私たちには今できること、しなければならぬことが、山ほどあるように思いますがいかがでしょう。

現代を先取りしていた「植民地」での子育て

「母の徒然草」ではその後舞台が一転して、日露戦争後日本の租借地になった大連に移ります。そこでサラリーマン核家族のいわば走りでもあった私の両親が、満鉄の社宅で娘である私の子育てに、滑稽な一喜一憂を繰り返す有様が、「乳児期」に溢れています。育児にあたつて育児書を鵜呑みにする父、それに釣られて授乳時間を厳格に守る母、その揚句刻々と萎びてゆく赤ん坊の私。二頁目の秤を買つてきて毎日量つてみても体重は減るばかり。たまりかねて医者につれて行くと、母乳不足から来た小児消耗症と診断されます。

オロオロして訪ねた子育て名人に相談すると、即刻牛乳で育てることを強く薦められました。細心の注意を払つて恐るおそる薄めた牛乳を与えて見ると、赤ん坊は嫌がりもしせずゴムの乳首を力強く吸い、日に日に生パンが膨れるように肥つてきて、「恐かな」両親をほつとさせたというのです。「乳児期」では、私は大連市の旧満鉄病院で誕生し、その誕生を喜び迎えた父がベッドをつくらせたり、余分のストローを取り付けたりして退院を待ったと母が述べていますから、私は今からいえば七十五、六年も昔に、庶民の子としては先端をきった、病院出産や牛乳育ちやベッド暮らしの体験者だったわけです。

敗戦後、病気の娘をかばって生きることに挑戦した母

『女三代の百年』の「母の徒然草」では、最後の舞台は敗戦間もない東京。母が遺した三つの創作のうち「秋子」を取り上げました。これは、敗戦後急転直下悪化した（空襲による家や家財の消失、満鉄に管理を任せていた預金の封鎖、火災保険金の不払い、物凄いインフレーション、飢餓寸前の食料難、娘の病氣、息子の在学していた軍学校の解体など）生活諸条件からの脱出のために、母自身が常識を乗り越えて、創造的に取り組んだ体験を土台に据えたものです。

当時原爆や空襲の犠牲になった、広島、長崎、東京をはじめとするほとんどすべての大都市では、衣食住に事欠く庶民が右往左往して暮らしていました。半世紀後の今日から言えば、理解を越える状況がいたるところでみられました。創作『秋子』はノンフィクションではなくても、そういう当時の庶民の生活の断面を鋭く直視している点で、歴史の証言としても大きな意味があるのではないのでしょうか。生き抜くために船橋に魚を賣出しにいき、細々売さばきながら、主役の秋子は喜びも悲しみも含めて、それまでの半生にかつてなかったさまざまな体験を重ね、成長しているのです。母の遺稿の中には、このほかにも皆さんに読んで頂きたいものがいくつかありますが、『女三代の百年』では紙幅の関係で割愛しました。どの作品でも本音をぶつけているところに、母の真骨頂があるように思います。

敗戦時に成人に達していた人は、一九九〇年の「国勢調査」でさえも、既に全人口の一二％（男一〇％、女一四％）を占めるに過ぎなくなっているのですから、歴史を風化させないためにも、こういう証言を手掛かりにして、いまこそ積極的に身の回りの可能なところから、歴史の真実を掘り起こす運動を始め

る必要があるでしょう。『女三代の百年』の読者から、男女を問わず、これまで口にするのを避けていた自分や家族の過去を、率直に語る声がいくつも私のところに届いていることは、そういう運動の可能性を暗示するものといえます。

娘が辿った母娘の戦前・戦後

ところで、これまでは母の遺稿に則して話をしてきましたが、これからお話しするのは娘の立場から見た母です。ただし、母の全生涯を辿っておきたいと思つて筆を起したII部（娘が辿る母娘の戦前・戦後）でしたが、母に関するデータがあまりにも少ないために、結果的にはデータが豊富にある、三代目の娘（私が、心ならずも主役に踊り出てしまいました）。

娘時代の母は

本当に残念なことです、私は母から娘時代のことを、詳しく聞いたこと、聞くとしたことが一度もありません。そもそもそういうことに関心がなかったのです。間違ひなく何でも言い合える仲のよい母娘でしたが、その点では現在の一般的な母と娘の関係とそっくりではないでしょうか。母が私たちに遺した手記を読めば、言いたいことが無尽蔵だったことを証明できますが、娘のほうに聞く耳がなかったために、大切なことを何一つ聞き出せなかったのです。これは父にたいしても言えることです。こうして本当の歴史の重要な素材を、惜し気もなく投げ捨てていたのかと思うと慚愧にたえません。せめて

皆さんには私の二の舞をしていただきたくない、と痛切に思います。

さて十九世紀のまさに世紀末（一八九八年）に生まれた母は、日露戦争の始まった年（一九〇四年）に尋常小学校に入り、あの世間を震撼させた大逆事件（天皇暗殺の名目で無政府主義者幸徳秋水ら二三名を死刑にした弾圧事件）が発生した一〇年に卒業、高等小学校に入っています。そこを卒業後静岡県に初めて設置された看護婦養成所を出て看護婦になり、東京の大きな病院で働いていたことは、かすかに聞いた覚えがあります。八年（明治四一年）の『東京市市勢調査』によれば、当時は職業婦人の筆頭であつた看護婦数が、二、二一六人に過ぎなかつたのですから、大病院の看護婦は希少価値のある時代。今ならば職業意識からその実態を詳細に聞き取つたでしょうが、猫に小判でした。

若くて亡くなつた次兄が、母によれば有能な人で新聞記者をしていたそうですが、職業を選ぶについてはこの兄の影響が恐らくあつたでしょう。しかしその後の足取りは聞き漏らしました。後に戦争中父の実家に疎開していて偶然にわかつたことは、母が結婚前そこで父の長兄の派出看護婦をしていたことです。「大正時代はまだ派出看護婦全盛の時代」と言われていますが、その疎開先でこれもまた偶然発見した母の看護日誌を見た時、若い看護婦であつた母の几帳面で誠実な看護ぶりに出合い、当時まだ若かつた私がなぜかほつとしたことだけ覚えています。

母、結婚して父の住む大連へⅡ「植民地」暮らしの光と影

なぜ母が当時満鉄社員であつた父と結婚して、海を渡つて大連に行つたのか、全く知りません。ただわかつていることは、その時流行していたウールのマントを羽織り、ルビーの指輪をしていたことです。

戦争で廃物利用の時代に入つて、母がそのマントをほどいて私のハーフコートに仕立ててくれたこと、ルビーの指輪は敗戦後お米に変わったことで、よく覚えています。

満鉄社員の妻としての母の生活は、大連郊外の今では大きな飛行場のある、周水子の赤煙瓦の社宅で始まり、私の一歳前後に、恐らく満鉄がテコ入れて造成した、大住宅地桜花台に満鉄のローンで建てた小住宅に移りました。短期間の周水子の生活で気の置けない友達ができていたことは、私が小学校に入ってから、夏休みになるときまつて、遊びに連れていかれたことでわかります。そこで私が六人乗りのプロペラ機に乗せてもらつて、上空を一周したのは昭和でいえば二年か三年でしたから、いきさつは覚えていませんが、滅多にない体験をしたわけです。私の初節句に、その後ずっと大切にしていた、一対の手作りのお雛様を届けてくれたのも、周水子時代の母の友達でした。その夫は後に満鉄沙河口の工場長になった人ですが、当の奥さんは敗戦後の引揚げの際非業の死を遂げたそうです。

勝手にそう言つては中国の人に申し訳ないのですが、満一五歳までそこで育つた桜花台は、私にとつていまだに心の故郷です。母は大連時代について何一つ書き遺していませんが、子供の目に映つた母は母らしさをたつぷり滲ませていました。そして私たち家族の大連での暮らしは、祖父母のいない核家族、産児調節による少産（姉弟の二児）、住宅ローンの活用、電気・ガス・水道・下水道の完備、消費組合の生活面への浸透などの点では、六、七十年も前に、現代サラリーマン家族の生活を、まるで先取りしていたようなものです。先取りと言えば、後に父がハルビンに単身赴任したことも、「脱サラ」を図つたことも、サラリーマンとしては先端をいつていたのではないでしょう。

現代との違いは母が専業主婦に徹していたことで、良くも悪くもそれが大方の家庭の主婦にとつて、唯一の生きる道でした。衣生活では職業服である背広や学校の制服は別にして、家族の衣類の調達には



おそらく1935（昭和10）年のお正月。
母37歳直前。私は15歳の誕生日を迎えたばかり。

現在とは比べものにならぬほど時間がかかりました。父や母の普段着の和服は洗ひ張り（板張り、伸子張り）も仕立ても、出回り初めていたミシンをつかつての子供服の洋裁も、みんな母の仕事でした。言うまでもなく、食卓にのぼる食べ物はほとんどすべてが母の手作り。住関係では一日に二度はハタキや箒（ほうき）を使って掃除するのが当たり前。お風呂や冬の暖房用のストーブには石炭を使いましたが、石炭運びや灰の始末もかなり重労働でした。でも電気・ガス・水道・下水道が完備していたのですから、同時代の内地の庶民の家庭にくらべると、家事労働の省力化はかなり進んでいたはずです。

一方、国策会社大満鐵の傘下にいたため、父は平社員といっても、一定の生活の安定が保証されていただけでなく、少なくとも単身赴任前は、よほど特別のことでも起こらない限り、朝食も夕食も家族揃って済ませることができました。平社員の特権だったのかも知れませんが、日曜も祭日も会社に支配されることはなかったのです。それだけに子どもはいつも親の目の届くところで暮らしており、特に食事の時は行儀をやましく言われたし、嫌いだからと言ってお皿に出された食べ物を残すことは厳禁でした。手作りが主体の時代でしたから、主婦が家事に費やす時間は、現在と比べものにならなかつたはずですが、子どもの思い出に残っている母は、核家族で子どもは二人でしたから、かなり自由時間に恵まれていました。洋裁や調理の技術の習得に積極的に打

ち込む一方で、図書館や教会にも子ども連れて出かけたし、夏の海水浴には健康のため熱心に通いました。休日の親子四人揃つての「電気遊園」通いの楽しみは、メリー・ゴー・ラウンド（回転木馬）に乗ったあと、水餃子（水ギョウザ）や八宝菜を食べること。夏の夜は屋上のテラスに寝転んで、親たちに星の名前を教えてもらったのも、懐かしい思い出です。

私の家は丘陵にできた住宅地にありましたから、とくに小学校時代は、近所の男の子や女の子と束になつて、山坂を駆け巡る大きな遊びに熱中しました。塾もなければ親から勉強を急かされることもなく、思えば子どもの楽園でした。進取の気性に富んだ若い親たちは仲良く付き合ひながら、時には子どもたちを呼んで、手作りのお寿司や肉まんじゅうや水餃子を大盤振舞してくれたものです。

ただしこの幸せは、日本人に限られていました。特別のお金持ちとは別にして、支那人と呼ばれていた大多数の中国人は、土木や建築の現場で働く「苦力」か馬車の馭者や人力車の車夫で、当時日本人は意識するとしないうちに拘らず、圧倒的に有利な地位を確保していたことは、敗戦でたちまちその地位が逆転した時、だれの目にも明らかになりました。しかし子どもであった私は言うまでもなく、利発だったはずの母も光の部分に安住して、影の部分の不当さに気付いていたとはとても思えません。

その点では、時代の制約と言つて済まされない、日本人の歴史認識の弱さが気になります。それから六十年以上経った現代でさえ、日本人の多数派は、依然として現実の背後にある本質を見抜く力を、徹底的に出し惜しみしているからです。出し惜しみではなく、むしろかつての天皇や軍人に代わる、財界主導の利潤最優先体制護持のために、政界、官界、労働界までが一致団結して、客観的な事実を見ようとしないうのみならず、見せまいとする風潮が目にあまるのです。

大連での私たちの生活は、一九三五年暮れに帰国するまで、つまり敗戦十年前で終わっています。そ

れでもその時代を知っている人は、既に非常に少なくなりました。『女三代の百年』では、あくまでも子どもの見聞を中心に大連時代をまとめて見ましたが、是非いろいろご批判頂きたいと思います。

忍びよつてきた大戦争

帰国直後は私の転校を受け入れてくれた、県立の静岡高等女学校のある静岡市に住み、私の日本女子大進学と弟の中学入学のため、二年三か月で東京の牛込矢来に転居しました。私が当時は専門学校であった女子大に入った一九三八年の四月には、稀代(きたい)の悪法である国家総動員法が成立し、五月には発効しています。この法律は来たるべき戦争に備えた法律で、政府はそれによって、労務、物資、賃金、物価、施設などの国民生活に関わるすべてを、国の統制の下に置くことができるようになりました。ところが私自身はこの恐ろしい法律の存在に全く気付いていません。

そればかりか、当時治安維持法という悪法が、猛威を振るっていたことも「どこ吹く風か」でした。日本女子大では、昭和一桁代には学生運動が高揚して、特に国文科などはピンク色をしていると言われるほど、社会情勢に敏感だったそうです。昭和六年入学の沢村貞子さんが、左翼演劇に関わっていると言う理由で、卒業間際に退学させられたのも、同じ時期のことでした。しかし私が入学した昭和一三年つまり一九三八年には、文部省、警察、学校当局の方針で、そういう動きは、少なくとも学校内では、影も形もなくなっていました。その代わり年表を見ればわかるように、着々と戦争への道が切り開かれつつあったのです。女子が教育上の差別を受けていたこの時代、「女子専門学校」は女としての最高の教育機関でした。私自身の体験を軸として、『女三代の百年』に当時の世相を私なりにまとめてありますの

で、もしじっくり読んでいただけたらどんなに嬉しいでしょう。

一九四〇年の日記を見ると、レマルクの『西部戦線異常なし』を読んで、「日本と同じ状況ではないか」と書いてあります。すっかり忘れていましたが、それなりに女子大生らしく社会を批判しているのです。同じ頃「自由主義者」として東大経済学部を追われた、河合果治郎さんの面会日にも、友達に誘われて通っていましたから、「日本が大変難しい状況にある」ことも聞いていました。そういう体験を持ちながら、当時の私は社会の仕組みについて、徹底的に無知でした。社会情勢の変化に伴い、その異常さにはおいおい気が付き始めていたにせよ、大戦争が始まって、戦争の基本的な原因について考える力を全く持ち合わせていなかったのです。

社会科学の勉強は、完全に禁止されていただけでなく、社会という言葉でさえ危険視される時代に入っていました。本当のことを知らせまいとする教育が罷り通っており、その背後には治安維持法や特高警察が厳然と控えていたのです。第一次世界大戦後、澎湃（ほうはい）として起こった社会主義や労働運動の大きな影響で、一九二〇年代、つまり大正の終わりから昭和にかけては、堰（せき）を切ったように社会科学関係の本が巷（ちまた）に溢れました。しかしそういう本に触れることができたのは、当時の社会条件から言って当然のことながら、国民のごく一部に限られていました。ところがそういう社会科学関係書は、三〇年代も後半に入ると全く禁断の書になってしまいました。南京虐殺をルポルタージュした、石川達三の『生きてゐる兵隊』も、岩波文庫社会科学関係とりわけマルクス主義に関する書目の全面禁止とならんで、私が女子大に入った三八年には発禁になっています。この辺の事情については、『女三代の百年』の「忍び寄るキナ臭い風」で意識して取り上げていますから、是非読んでみて下さい。

このような人間性をおしつぶす動きに反発し、せめて子どもたちにはきちんと話をして、人間らしく

豊かに育って欲しいと考え、山本有三や吉野源三郎が『日本小国民文庫』を作ったことを、皆さんご存知でしょうか。この『文庫』は十六巻あり、その最終巻『君たちはどう生きるか』が刊行されたのは三十七年七月で、敗戦まで続く日中戦争が始まるきっかけとなった、蘆溝橋事件発生年の年です。「偏狭な国粹主義や反動的な思想を超えた、自由で豊かな文化のあることを、なんとかしてつたえておかねばならないし、人類の進歩についての信念をいまのうちに養っておかねばならない」というのは、子どもたちにたいする山本有三の思いであると同時に吉野源三郎の思いでした。

しかし、『君たちはどう生きるか』が出版された年は、この本で提起されたような人間を大切にすることは完全に否定され、天皇中心、戦争優先の皇国史観にもとづく政治の時代に入ったのです。同じ年閣議で決定した「国民精神総動員運動」は、挙国一致、尽忠報国、堅忍持久をスローガンとして、その意識の高い低いに拘らず、国民の大多数を金縛りする上で大きな役割を果たしました。

開戦、病気、空襲

日本軍の真珠湾攻撃で日・米の間に第二次世界大戦が始まった一九四一年二月八日、私は三か月繰り上げが決まった卒業のための卒業試験を受け、暮れも押し詰まった二七日には卒業式に出席しています。この日は母が工面して縫い上げてくれた、紫の和服に紺色の袴をつけて参加し、母も式場の後ろで娘の姿を見守っていました。繰り上げ卒業が開始されたとはいえ、まだ和服の着用が許され、国文科のクラスメートの大半は紫の式服に身をかためていました。しかし、この日から一人ひとりがさまざまな形で戦争の渦中に投げ込まれていったのです。もし私たちが男であつたら、大勢の戦死傷者を出した世

代ですが、女に生まれたため、人それぞれの苦勞を重ねながらも、敗戦まで一人も欠けずに生き永らえたのはむしろ僥倖でした。

開戦から敗戦までの私自身の足取りは、かなり詳しく『女三代の百年』で辿っています。納得できる仕事に出会えぬ苛立ち、氣に染まぬお見合い、ようやく手にしたやりがいのある仕事、戦争中の過勞や栄養不足や濃厚感染などが重なっての結核性肋膜炎発病、母に頼りっきりの空襲下の療養生活、再び職場へ、東京第三回目の大空襲による罹災、医者に勧められて母と二人父の里への疎開、実感した辛い疎開生活、疎開地で迎えた敗戦という流れの中で、前半のとても戦争中とは思えないのんびりムードが、後半は戦局の逼迫、頻繁な空襲、発病、罹災、疎開がもたらしたかつてない苦勞の連続で一変します。

この三年七か月にわたる戦争中、初めの二年七か月も、母は母なりに娘の将来について氣を揉むことがなかったとはいえません。でも娘は健康でしたから、それより氣掛かりだったのは、戦争に奪われる日の刻々近づく弟のことだったと思います。息子を戦場に送り出せることは、当時の風潮としては限りない名譽とされていましたが、母親の氣持がそれほど単純でないことは、どこの家でも共通であつたと思います。夫が招集される妻の場合も、全く同じだったのではないのでしょうか。言葉には言い尽くせない辛さを、とりわけ女たちがよくまあ耐えたとしみじみ思います。

弟はその後軍の学校に入学し、家を離れました。出陣までにやや時間的ゆとりができた上、その栄養補給は軍が引き受けたわけですから、母はさぞかしほっとしたことでしょう。しかもそのうち娘も願いがなくなって力を試せる職業に就き、生活の安定もそれなりに保証されました。物資の不足は日増しに深刻になりつつあったとはいえ、母の肩の荷が下りた一瞬でした。でもよいことは長く続きません。自分から願い出て一か月の予定で工場労働を体験していた娘が、出向予定の終わる寸前、突如高熱を出して

倒れてしまったからです。ここからいやおうもなく、母の出番が回ってきたのです。入院はせず、近所の医者に往診を頼む療養生活でしたから、私にとっては、母のキメ細かい看護だけが頼りでした。その時私はまだ母が看護婦の免状を持っていること、娘時代に看護婦の経験のあったこと、ましていわんや父の兄つまり私の伯父を、看護婦として看護したことなどは、思いもつかぬことでした。

私の病気が一進一退を続ける間に、サイパンを確保した米軍は、来る日も来る日も執拗な東京空襲を続けます。東京ばかりでなく全国の大中都市が狙い撃ちされました。『女三代の百年』の「母に守られた療養生活」では、当時の私の体験を日記などを通して復元してあります。舞台は東京牛込辺に限られていますが、戦時下の非戦闘員の生活実態の一端と見て頂いてよいでしょう。空襲の激化に伴い、建物疎開が実施され、私たち家族も住んでいた家から立ち退きを命じられました。空襲の合間をぬった家財の整理、家探し、引っ越しの難行を中心になってやってのけたのは母でした。

職場復帰と罹災

三か月の休養を要すると診断されて療養を開始したものの、結局は七か月も休養を取って、下町一帯を襲った三月一〇日の東京第一回の大空襲の後、私はようやく職場に復帰できました。復帰するや否や時が時だけに早速人並みの活動を開始していることは、当時の記録が証明しています。ただし空襲は激化する一方で、防空服に身を固めて家を出る時は、いつ死んでも文句のいいようがない時代でした。職場で警報を聞いて退避したこともありましたが、大空襲はいつも夜でした。そして第二回の大空襲では危うく難を逃れた私たちも、第三回目に家と家財を焼き払われ、文字通りの戦災者になりました。

勤め先も全焼し、神保町にあった救世軍のビルが避難先になり、そこに通う日々が一月ほど続いた揚句、無理が重なって再び身体を壊し、母と父の災家への疎開に踏み切ります。

その前に敗戦後の私の生き方に一口で言えぬほど大きな示唆を与えた、リアザノフの『マルクス・エングルス伝』との出会いについて、触れないわけにはいきません。当時禁断書であったこの本は、「開戦から敗戦まで」に書いておきましたが、罹災直後泊めてもらった横尾美智子さんの家で見付け、罹災見舞いとして贈られたものです。こんなにも有難い贈り物に出会ったことは、後にも先にもありません。

辛かった疎開の思い出

疎開は戦争がもたらした悲劇で、辛かったのは疎開者ばかりでなく、受け入れ側にも重い負担がのしかかりました。そのことを重々承知していた母は、せめてもの償いとして労力奉仕に精を出しました。もし私が病気でなければ、母も私も疎開などしなくて済んだはずです。病気の娘を抱えている母は、朝早くから日が沈むまで、畑に出て草取りに励みました。いくら丈夫で勝ち気な母でも、この慣れない労働はどんなに辛かったでしょう。何もできない私は母の苦勞を思つて、ただオロオロするばかりでした。当主である私の従兄は、目が悪く心根の優しい文学青年で、村役場に勤めていました。その妻はしっかりもので、農業を一手に引き受けていましたから、押し掛けの疎開者に複雑な気持ちを抱かないはずはありませんが、時に私たち母娘のために、物業をそつと用意してくれる親切を持ち合わせていました。悪意をむき出しにしたのは、かつて私たちが大連から帰国した時は、下にも置かぬもてなしをした従兄の継母でした。私たちが疎開者として現われた途端に、豹変という言葉を見事に実践してくれたのです。

格式のある家から嫁に來たのが自慢の人ですが、この人がある日ふと私の前で「看護婦や産婆にろくなものはいない」と口走ったのです。それを聞いたとき、「ああ母さんのことだ」と直感しました。産婆というのはその地域の出産には必ず立ち会う、腕も立ち人柄もよいと評判の高い人ですが、義理の伯母がいつも悪口を言っていたのですく思ひあたりました。顔色を変えて伯母の言葉を伝えた私に、母は落ち着いて事実を話してくれました。母の娘時代の看護日誌に偶然出会ったのは、その後のことです。母の知性の源（みなもと）を、改めて確認できた事件でした。

敗戦直前の日本を斬る清沢冽の『暗黒日記』

私は『女三代の百年』で、私自身の体験を土台にして「開戦から敗戦まで」という一章をまとめました。それは、私が体験した戦争は、もう終わったこと、葬りさるべき過去の出来事ではなく、社会の構成員である人間が人間性を失ったその瞬間に、何時現われても不思議でない魔物と考えるからです。それでは人間性とは何かといえ、一つは、考える力、言い換えれば、ものの本質を見抜く力を持つこと。二つは、労働すること、しかも労働するなかで人間として育つこと。三つは、社会性を持つこと、すなわち他人の痛みが自分の痛みと感じられること。完璧ではないにしても、少なくともそういう方向を目指すことこそが、人間の証（あかし）ではないでしょうか。

戦争中も私はそれなりに人間らしく生きることを願った積もりでしたが、残酷な戦争はそういう個人の小さい願いを、どんどん押し潰すものであることを、私の貧しい体験記から読み取って頂けるでしょうか。戦争の真実を知るために、既にたくさんの方の貴重な書物が手に入る時代ですから、図書館や図

書目録などを活用する一方で、ご自分や身近な人の戦争体験も、この際散逸しないように是非記録し、今こそ総力を傾けて、日本人の主観的でない歴史作りの土台を固める必要があります。

第二次世界大戦が日本の敗戦で終結して、それからもう半世紀以上経っているので、過去の戦争は間違いなく風化する傾向を辿っています。戦争批判の歴史観を、「コミンテルン史観」とか「自虐史観」とかと呼んで、一方的に抹殺を謀る（自由主義史観研究会）が、このところ勢いづいています。が、「自国の生存権や国益追及の権利をハッキリ認め」、「自国の歴史に誇りをもつ」歴史教育を目指すと言うその主張は、客観的事実とは無縁で、少なくとも私には戦争中にも聞き飽きた美辞麗句に過ぎません。その衣の下の鎧を見破る力＝歴史認識をどう協力して培うかが、現代日本人に最優先の課題でしょう。

ここで戦争と関連して一つ付け加えておきたいのは、敗戦直前に亡くなった、リベラリスト清沢冽の『暗黒日記』（岩波文庫）を読んでいて、これを『女三代の百年』の「開戦から敗戦まで」と、重ねて是非読んで頂きたいと思ったことです。著者のすべてを肯定するわけではありませんが、当時は秘匿されていたこの『日記』の「時局」批判は、まさに暗黒時代を活写しており、今徘徊している前述の主観的、意図的な「自由主義史観」＝「自賛史観」などを吹っ飛ばす、事実を裏づけに持つ迫力があるからです。

敗戦後直ちに帰京した母娘のその後

一九四五年八月一五日正午に、疎開先の居間で聞いたラジオ放送で、敗戦を直感した私は「戦争は負けたのよ」と大きな声を出して、伯母に睨まれました。天皇の声がとても聞きとりにくかったので、とんでもないことを言うと思われたのです。ともかく私は涙をこぼすどころか、躍り上がりたい気持ちで

いっぱいでした。ああ今日から電燈がつけられる、とまず思いました。

早速従兄に切符の手配を頼み、敗戦の翌々日には東京行き、超満員の列車に窓から乗り込み、身動きできないままの夜行で、朝早く東京駅着。帰り着いたのは焼け跡の防空壕の上に建った掘った小屋の壕舎です。罹災と敗戦が私たち家族を、最悪の状態に追い込んでいたことは、前に触れたので繰り返しません。ところがそこに、もう一つ悪いことが重なりました。私が肋膜炎の再発に加えて、当時流行していた腸チフスを併発したのです。

九月十二日東京女子医専の付属病院に入院した私は、危ない橋を渡りながらも、生き永らえて十一月十四日に無事退院しました。病状の悪い時には一日に三回も、焼け跡の悪路を通って見舞いに来てくれた母も、もう大丈夫とわかると、精魂尽き果てたのでしよう、見舞いの回数がぐっと減りました。ただしそれでのびのびできたわけではなく、私を除く家族は庭を畑にして、さつまいも、南瓜、大根、蕎麦など自給できるものは何でも、試行錯誤しながら生産して、飢餓からの脱出を図っていたのです。

私が退院して戻って来たのはそういう環境でした。この最低ギリギリの生活の実態については、『女三代の百年』でもう少し詳しく触れてあるので、是非読んで見て下さい。退院したからと言って畑仕事ができるわけではなく、家族の足手まといの状態、私はラジオを聞き、新聞を読み、家族の話に耳を傾けました。病院から持ち帰ったりアザノフの『マルクス・エンゲルス伝』を、貪（むさぼ）り読んだのはこの時です。戦争と敗戦、病氣、壕舎での不如意な生活の体験を背景に、この『伝記』を読み進めながら、私はまさに「目から鱗が落ちる」感動に耽りました。

女子に対する高等教育機関の開放、男女中等学校の教科の平準化、大学教育に於ける共学制の採用を当面の課題とする「女子教育刷新要綱」が、閣議で諒解されたのは、こうして私自身が過去と現在と未来

に、改めて深い関心を持ち始めた時期でした。敗戦の年もおしつまった十二月四日、ラジオでそのニュースを聞いて思わず寢床からとび上がるほど、極限の貧乏も病氣も全く忘れて私は興奮したのです。それから十日あまり後の、婦人参政権を認めた衆議院議員選挙法改正公布を、はるかに上回る感動でした。

『女三代の百年』の「肌身で感じた新しい時代」で、私は人権尊重を謳った「ポツダム宣言」の受諾による敗戦、その趣旨を受け継いだ連合国軍総司令官マッカーサーの婦人解放を含む、人権確保の五大改革の要求があつてはじめて、徹底した教育上の男女差別の公認から否認への画期的宣言ともいえる、この「要綱」が登場しえたことに触れました。残念ながら日本人自身の独自の力だけでは、とてもその時点でそこまで到達するのは不可能でした。人権尊重を重く見た、「ポツダム宣言」を受諾しての敗戦が、日本に於ける教育民主化「宣言」の大前提であつたことを、ここで改めて確認しておきましょう。

この「要綱」に触発され、私はトタン葺きの壕舎の寢床で、「新しい教育の方針——覚書」を書きました。二百字詰原稿用紙に換算すると五七枚という分量ですが、粗末な仙花紙にペン書きしたものを、最近ワープロに起こし、敗戦後約五か月の時点で、二十五歳になったばかりの若い女が、一体何を考えていたかを示す一つの証言として、恥ずかしいけれど身近な人々に読んでもらっています。

この小さな文章を書きあげて間もなく、東大が女子専門学校卒業者の受験資格を初めて認め、四月に男女共通の入学試験を行なうと発表しました。私は早速経済学部経済学科を選んで、願書をだしました。が、受験当日高熱を出し、母に伴われて家を出たものの、途中で方向転換して国立第一病院に向かわざるを得ない羽目になりました。こうして試験は棒に振ったものの、高熱も治まり体力が次第についてくると、母の勇ましい生活難への挑戦を目前にして、私自身の身の振り方をどうすればよいかが、大きな課題となりました。その結果進駐軍の従軍牧師の家での住み込み女中の口を見つけたのです。そこで働

きながら翌年春には経済学部の入學試験にパスし、しばらくは家事をこなしながらの通學も認められました。ここでの私の得難い体験については、『女三代の百年』の私の手記で多少触れてあります。

娘の「大学生活事始」

牧師夫妻の帰米にともない、私はほぼ一年間の「女中」稼業から全く解放され、自由な大学生になりましたが、家族のもとに戻ったことで生活条件は再び逆転しました。住居は壕舎よりはましとはいえ、東京都が戦災者のために急増したバラックです。それでも食料事情と並んで、住宅事情が最悪の条件にあった東京のような大都会では、どんな陋屋（ろうおく）でも、雨露が浸げ、家族が助け合って暮らせる場所のあることは、私たち庶民にとっても有難いことでした。

五月の大空襲で罹災した直後、罹災見舞いとして横尾さんから贈られた『マルクス・エンゲルス伝』で、「目から鱗が落ちた」私にとって、大学入學の目的はマルクス経済学の勉強でしたが、一年目には演習参加が認められず、たまたまキャンパスで出会った旧知の木村健康先生が、私のゼミなら入れてあげると言われて参加したが、何と近代経済学のゼミでした。四苦八苦して数学の勉強に取り組まざるを得なくなったのは、お目あてがマルクス経済学であった私には大変な寄り道でした。でももしこのゼミに入らなかつたら、夫である広田純にめぐり会うことはなかつたのですから、人生はなかなか微妙です。この時母は、再び共に暮らし始めた娘がすっかり健康を取り戻し、新しい大学生活に元気で取り組んでいる様子を、自分のことのように喜び、何かにつけて母娘の会話が弾みました。母の率直で飾らない人柄が、娘にも十分理解できたのに対して、母のほうも娘や娘の友達のこだわらない生き方に、もしか

したら触発されていたのかも知れません。細々と続けていた商売で、お得意さんとの人間関係が深まっていることは、言葉の端々に滲みでていて、家族をほっとさせました。この頃には大好きな歌舞伎見物にもいそいそ出掛けています。

私は母に経済的な負担をかけたくなかったので、いろいろアルバイトをしました。幸運だったのは、四七年に設立された労働省から、嘱託のポストが舞い込んで来たことです。新任早々の山川菊栄婦人少年局長の発意で実現した人事で、私のほかにも法律家の田辺繁子さんはじめ二、三の人がいました。週一回出勤の私の仕事は、外国から送られて来る図書や文献の整理、研究会の運営、調査の企画をはじめ時には局長の秘書的な役割も果たしました。でもここでの一番大きな収穫は、山川菊栄という人生の大先輩に出会えたことです。この方については、『女三代の百年』でもたびたび触れています。

ところで私が大学に入学した一九四七年という年は、一方では早くも「ポツダム宣言」に盛り込まれた人権思想の空中分解する兆しが、国の内外で次第に明らかになりつつあると同時に、他方では「ポツダム宣言」に基づく憲法をはじめとする新しい法律や制度が、着々と実を結びつつあった年でもありました。以上二つの矛盾する動きについては、この年の年表を見ればすぐわかりますが、私は『女三代の百年』の一七五頁と一七六頁で、私なりに整理しています。

ともあれ、戦争の惨劇に懲りた世界の世論を背景にしてこそ成立した、「ポツダム宣言」の人権思想が、戦後二年も経たないうちに、米国とソ連の対立を中核とする冷戦によって、その土台を掘り崩され始めたのです。そうなれば、同じ年に「着々と実をむすびつつあった」日本の民主的法制度も、いずれは窮地に立たされる運命にありました。この年の年頭の辞で吉田首相が労働者を「不逞のやから」と呼んだことと、マッカーサー元帥の二・一スト中止声明は、その予告編と言ってよいでしょう。

翌四八年一月六日のロイヤル米陸軍長官の、「日本は共產主義への防壁」という趣旨の演説は、「ポツダム宣言」が謳いあげた日本の「民主主義」が、米国の支配下にあることを裏付ける発言です。そして同じ年の二月には、東条英樹ら七名の絞首刑を執行（二三日）する一方で、岸信介らA級戦犯容疑者が釈放（二四日）されています。GHQによる祝祭日の国旗掲揚許可（三月四日）も、東宝争議（四月一七日）十月一九日）への米軍の出動もこの年です。

病気で挫折した娘の新家庭

願いかなって大学で経済学を勉強し始めていたとは言え、マルクス経済学に没頭できる環境とはほど遠く、当時の私はまだ、これまでお話ししてきたような矛盾に満ちた日本の情勢に、精々何となく程度にしか、気づいていなかったと思います。最近友達の好意で手に入れた政治研究所（民主主義的調査研究の先端に立つて活動すべく）発足し、末広殿太郎が所長の『政経資料月報』を、その創刊時（一九四七年一月）から繰って見ると、四六年以降に発表された政治、経済に関する膨大な資料目録（四六年十一月までの研究所創立以降一年間に整理を終えた資料は、未掲載を含めて三、二六種）が上がっていますが、そのどれも読んだ記憶がないのです。

それでも私は時代の子でした。大学の演習で結婚の相手に出会い、大真面目で結婚してしまったのです。そのいきさつや経過については、『女三代の百年』で述べましたから、簡単に触れると、この結婚は戦後の学生結婚の走りであったこと。日本国憲法第二四条「婚姻は、両性の合意のみに基ついて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない」を地で

いったつもりだったこと。双方の両親の励ましがあつたにしろ、結婚式も披露宴もあげないで同棲したこと。あえなく私の病気で挫折した新家庭は、短期間であつたが家計簿をつけていたこと。翻訳などのアルバイトで経済的自立の条件をほぼ満たしていたこと。学力の弱い妻のほうが年齢が上であつたこと。素人下宿の西日の射す六畳間が、二人の新居でした。机と本棚と布団のほかに家具一つなく、お鍋や食器は押入れの片隅で布団と同居していました。学生結婚など鉦や太鼓で探しても、見つからない時代でしたから、女の私のほうが冷たい目で監視され、居辛くて随分部屋を捜し回りましたが、東京はさまざまに住宅難でとてもおいそれとは見つかりません。それでもようやく二人になれば、未来に希望もち、私たちは青春を謳歌していました。ところが七月のある暑い日、私はそこで高熱を出し、それが二年近くつづいた闘病生活の始まりになったのです。

母の安堵はつかのまで終わりました。私は再び母のもとに帰り、その看護を受ける身になりました。何よりも有難かつたことは、夫が熟慮の末私たちに合流してくれたことです。しかも私の家族ばかりか、夫の両親もまだ見ぬ嫁のため、当時としてはそれ以上考えられない、万全の応援態勢をととのえてくれたのです。詳しいことは『女三代の百年』にまかせますが、今回自分の闘病生活を振り返って見て、もし夫や母、夫の両親を含むその他の家族、医師として援助を惜しまなかった岩崎秀之先生、親しい友達が見守ってくれなかったら、どこまで病気に耐えられたかと、しみじみ思います。

この時の病気は結核性腹膜炎で、その後膿瘍（肋骨カリエス）も併発しましたが、私の同期が卒業できたちょうどその時、東大福田外科で受けた手術で、いちおう病気を締め括りました。その間、夫は希いどおり東大経済学部の特別研究生として研究者の道に進み、弟も学業を終えて公務員となっています。娘の看病や娘や家族の栄養補給を一身に引き受けていた母は、五二歳になっていましたはまだ元気いっ

ばいで、その年の五月頃から再び大学に通い始めた娘を、暖かく見守っていてくれました。

ところで私の発病のため二年近くおくれた、夫の両親のもとへの二人揃ったの帰省は、五月によく実現し、そこで内輪とはいえ私たちの天下晴れての結婚の祝宴が開かれました。瀬戸内海名産の大鯛をとりよせて夫の母が腕を振るい、お嫁さんの私も大活躍しています。のびのびになっていた婚姻届けを出したのは、五〇年八月十八日。事実上の結婚の二年三か月あまり後のことです。

この年は、大河内一男教授の演習生募集に応募し、五月から長い間の念願だったマルクス経済学との関わりが深い勉強をはじめました。しかし大学二年間の空白により、卒業に必要な単位の消化が不可欠の上、卒業後の就職も当面の課題です。秋の学内試験で取るべき単位を一三まで減らした一方で、国家公務員六級職試験（現在の一種試験）にも挑戦しています。さらに蓼科高原に出かけ、山歩きしながら描いた水彩画も残っているのですから、若気のいたりで無謀なことをしたものです。

現在の財官政労癒着の原点は占領政策の大転換

このような小さな家族の浮き沈みを超えて、五〇年には日本のみならず世界全体が、前年に引き続き複雑な激動を繰り返しています。前年の四九年は、私自身は病気に振り回されて一喜一憂しながら暮らしましたが、日本社会全体として見れば、米占領軍の占領政策が明らかに大転換を遂げた年です。国民の大多数にとって、いわば上から与えられた、憲法をはじめとする画期的な法律や制度が、日本の土壌にまだ十分根づかないうちに、「ポツダム宣言」の趣旨にそって敷かれた民主化の路線は、ここでまさにその対極にある、大企業育成路線に置き換えられました。革命の波が渦巻く中国にかわる、米国にとっ

ての「全体主義」―共産主義への防壁、東洋の工場、安定した市場に日本を加工する方向が、占領政策の新たな狙いとなったのです。

この占領政策の大転換を喜び迎えたのは、非道な戦争で主役を演じた日本の旧勢力です。既に刑死した人、過去の罪を深く反省している人を別にすれば、戦犯に指定された旧軍人やパージされた経済人・政党人をはじめとして、敗戦がもたらした我が身の不運をかこちながら、民主化政策の下で戦々恐々と生きてきた人々に、再び我が世の春がめぐって来たからです。それに加えて、間接統治という占領方式により、日本政府は、敗戦前の官僚機構を、実質的にはほとんど無傷で温存していました。だからこそ少数の例外はあるにせよ、占領政策の転換に非常に積極的に協力しています。官公庁でのレッドパージの物凄さがそれを証明しています。

四八年から五一年にかけての年表を見ると、占領政策の大転換の過程で、日本社会が刻々右旋回させられていくことが浮き彫りになっています。そして右旋回への抗議行動は、明らかに謀略と認められるいくつかの事件（下山、三鷹、松川事件など）によって、実に巧妙に封殺されました。ただし、未熟な要素をはらむ労働運動が、うかうか挑発に乗せられて過激な行動に出て、自滅した例も少なくありません。こうして労働者側が怯んだ隙に、大転換は着々進行しています。同じ頃米国でもマッカーシー旋風が吹き荒れ始めていた（五〇年二月）ことを忘れることができません。

「日本国憲法は自衛権を否定せず」というマッカーサーの声明で年が明けた五〇年は、各種の共産党弾圧とならんで朝鮮戦争勃発、レッドパージ、警察予備隊令公布、追放解除、地方公務員法公布などの形で、米占領軍の意向がそれまで雌伏していた日本保守勢力の念願とあいまって、着々と具体化していることは、『女三代の百年』でも二〇〇頁で明らかにしています。こうして五〇年は、資本主義の巨頭米

国が前年に引き続き、その世界制覇を目指して、日本に反共の楔（くさび）を打ち込みました。そういう米国ないしは米占領軍に励まされ、人権思想を欠く日本の旧勢力が反共の旗手として重い戦争責任不問のまま、我が国の重要な分野で復権が認められたのもこの年です。

そのうえ朝鮮戦争の勃発は、経済的には超インフレの収束を狙う、占領政策の大転換がもたらしたデフレ状況（企業整備・行政整理→失業の激化）を、たちどころに「神風」と呼ばれた特需景気に変えました。これも大企業活性化の重要な支柱になっています。こうして日本の旧勢力を代表する財界、政界、官界を鼓舞激励した占領政策の大転換は、朝鮮特需とあいまって奇跡と言われた日本経済「高度成長」の重要な布石となりました。

初期占領軍の民主化政策に励まされて、人間らしく生きる喜びを自覚し始めていた、女性を含む大勢の日本人にとって、この頃は戦前・戦中の暗黒が再び戻ってきたように感じられた時代でした。でももつと大勢の、つまり労働運動の埒（らち）外にあつて、日々の暮らしを生きることには精一杯の大多数の日本人にとって、「神風」という言葉が象徴的に示すように、朝鮮戦争がむしろ救いの神とうつつたことは、ほぼ間違いないでしょう。病氣、卒業、就職などの個人的な問題にかまけていた私の場合、何一つ積極的な行動は起こせませんでした。東大経済学部在籍のあつた夫の場合は、研究上でも思想上でも新しい段階に入りつつありました。その真摯な意志と行動は、病氣ぼけの私をそもそも経済学を勉強したいと思ひ立った原点にたちかえらせる上で、大きな刺激になっています。一緒に暮らしていた母も、家族が話し合うなかで、逆コースには拒否反応を示していました。

娘の独立と癌を宣告された母

一九五一年に、私は一年留年した大学を卒業し、幸い上級職の公務員試験をパスしていたので労働省に入り、労働統計調査部に配属されました。旧制大学女子卒業生が全国で僅か二六二人（男子二万四〇九七人）に過ぎなかった時代ですから、就職は現在とは違った意味で非常に困難でした。私自身のいささか特異な体験は『女三代の百年』で触れています。就職後はのちに婦人少年局に移るまで、調査部で労働経済の分析の仕事に十一年携わりました。

就職直後稚名町に手頃な貸家を見付け、長い間世話になった母や家族から独立してようやく二人の世帯をもちました。その後一人とも多忙に追われ、母との交流は途絶えきみになりましたが、弟も山口県に赴任して夫婦二人きりになった両親は、それぞれ好きなことにうちこむ、のびやかな暮らしに入っています。

ところが別居して三年後、母は手術で癌を宣告され、後半年の命と言われました。ここからが母の正念場で、病氣と闘いながらの「母の徒然草」執筆が始まったのです。離れて暮らす娘は労働省勤務の合間を縫って母の看護に通いました。でもそれから二年も経たないうちに、娘は結核性腹膜炎の再発で、一年間の入院。母のほうはやや小康状態が続いて、母娘の関係はまた逆転します。そして娘が回復期を迎えると、今度は母が入院、手術です。国立第一病院で見放された母は、父の奔走で東京厚生年金病院に転院して一時愁眉を開きました。

初孫の誕生を喜び、その子が小学生になる頃読んでもらいたいと前書きして、中断していた執筆活動を病院のベッドで始めたのが、亡くなる年（十一月）の正月明けでした。その後一時退院した母は入退

院を繰り返し、最後は救急車で病院に運ばれます。急いで駆けつけた娘と静かな話を交わし、娘が「明日純ちゃんとくるから元氣を出して」という言葉を残して帰宅するや否や、父から「母死す」という電報が自宅に届きました。現在の私と比べると十五歳以上も若い六十歳と十か月でした。

おわりに

母の死からもう四十年近く経った現在は、依然として占領政策の大転換によって軌道に乗った、大企業優先路線の延長戦上にあります。基本的にはそのためにこそ、奇跡とよばれた、当の米国も驚く経済の「高度成長」が達成されたのです。その結果、母の生存中にはとても考えられなかった便利で快適な生活が、ごく普通の日本人にとって当たり前になりました。

しかし他方で、そういう物があふれた生活の中で、人間がもつ固有な力(考える力、労働によって自身を鍛える力、社会的な人間関係を通して自らを育てる力)を、個性的に全面開花させる方向にはなく、ムザムザと衰弱させる方向が、次第に目にあまるものになってきています。いいかえれば、憲法をはじめとする法律・制度の上で人権が本格的に認められて半世紀も経ったこの時代に、物(あるいはお金地位、名誉)に振り回され、逆に人間がその主体性を失いつつある現実を見逃すわけにはいきません。ところが同じ日本人のなかに、かつては極く限られた人のものでしかなかった、自由で潤達(かったつ)な生き方を見事に実践している人々が、あそこにもここにも頭をもたげてきたのも、現代の特徴と言えます。老若男女を問わず、有名無名を問わず、それぞれが実に生き生きと、創造的に自分自身の道をきり拓き、家族や社会の人々とも助けあいながら、新しい時代の人間の生き方に挑戦しています。そ

れにしても今日、利潤最優先の競争原理の暴走によって、庶民生活がその見せかけにも拘らず、さまざまな形で危機的な状況に追い込まれていることも無視できません。

国会の空洞化が象徴的に示していますが、財界優先、国民不在の政治が開けて通されるなかで、利潤最優先で合意した財官政労の癒着こそが、「バブル」発生とその崩壊の元凶でしょう。しかも、「バブル」崩壊は、いま経済界の危機を切り切る格好の口実とされ、金融、労働、福祉などあらゆる分野で、国民の多数を占める庶民の権利の大々的収奪が始まっています。

そこで結局辿りつくところは、私たちが本来もっている人間の力をどう發揮するかではないでしょうか。ぶつかった問題を一つひとつ掘り下げてゆくと、問題点が見えてくるし、もっと知りたくなる。いま自分史が大流行ですが、昔はよかった、悪かったとだけ言っても前進の弾みはかかりません。どういう時代をどういう形で生きてきたか、どこがプラスでどこがマイナスであつたかを、先ず自分で分析し、さらに共通の輪のなかで考えあう。相互に関連しあいながら勉強の方法を編み出す。その点でも現代は創造の時代、創造が可能な時代です。生活史年表の作成をお薦めするのはそのためです。一番身近なところから問題点を掘り起こし、それをどう政治に関わらせてゆくか。たくましい創造と行動が必要で可能な時代こそが、現代でしょう。

お話したいことがたくさんあるのに、随分端折ってしまいました。母の亡くなる前、例えば占領政策の大転換の影響が私の労働省時代どんな形で現われていたかは、『女三代の百年』を見て頂けばある程度わかります。今日じっくりお話できなかった大切なことは、大勢の日本人が困難にめげず、困難を跳ね返して闘ってきたこと、人権尊重を旗印にする憲法が存在は、それに基づく法律、制度と並んで、そういう闘いを勝利に導く大きな力になってきたこと、です。その点で、最近出版された『働く母たち

1996年8月、自宅玄関前で



の定年』(働く母の会編)は、一つの参考になるでしょう。なお、『女三代の百年』のために作成した『日本の女四代の系譜』という表(一二二―一二三ページに掲載)をもって来ましたので、歴史のなかでご自分を位置づけ、ご家族の関係を確かめる手掛かりにして下さい。長いことありがとうございます。

斎藤 日本の中の本当の知識人がどんどん少なくなっている気がします。ですが、広田さんは数少ない知識人のお一人です。今日は奥行き深く、しかも広がりのあるお話でして、今日来られた方は幸せだと思いが、本人に何を伝えようとしていらつしやるか切々と伝わって、涙が出る思いでした。

ご質問はございますか。どんなことでもどんどん、お手を上げてください。

A 今日は治安維持法同盟の会に出ましてその帰りに寄りましたので、先生のお話はいちいち身に迫りました。ありがとうございます。

B 新宿に住んでいます。五、六年がかりで地域女性史を編纂しまして、四月一日に出来上がりました。折井美耶子先生が指導してくださって、聞き書きを中心に新宿の地域性と女の人権をテーマにやってきました。今お話を伺うと、もう少し前に伺ってたらもつと視点が定まったのにと残念な気がしました。仕事が終わったところで初めて女性史の研究者としての視点が定まったような気がして、若い人たちに先輩たちの生き方を伝えて、伸び伸びと才能を開かせたい、バトンタッチしたい、という思いでやってきたのですが、とても足りなくてお話を伺うと恥ずかしい思いです。

広田 第一歩が築かれたのですね。形を作られたということは、むしろこれから発展させる土台ができたことです。これで終わりだと勿体ないですから。

B そうおっしゃっていただくと全く本当に第一歩、終わりではなく始まりだという気がします。聞き書きも少なく、もっと生まの声を集めなければ本当のことが出てこないというのが反省です。新宿は実に面白い町で、地方から出て土地が安かったこともあって、時代を開くような方も、作家の方も、沢山の方が居を定めたこともあり、いろいろなことが発展した町だとわかりました。十五人と先生二人で、いろいろな意見が飛び交って楽しうございました。

広田 そういうことがおできになるのはうれしいことです。交流してお互いに力を付け合ったり、やり方を話し合ったり――。

C 昭和二年から三六年まで労働省の統計調査部にいました。広田先生とはお話ししたことはございませんが、お顔は拝見したことがあって、お交わりになってないのでびっくりしました。

私も退職して暇なもので、短歌か俳句を始めようと思って、講座に去年の十月から通っているのですが、皆さんのように蝶や花という柄じゃないので、歴史的なものを織り込んで歌を作りたいなと思っていました。ちょうど「桜」の題でしたので、労働省の竹橋の桜を思い出して、労働省時代を振り返っていたらたまたま『女三代』を見つけて、広田さんの労働省時代のことが書いてないかなと読んだのです。広田さんだけじゃなくて、私もあの時代、家庭に警察が調べにきたことがあるんです。いろいろありました。本場にありがとうございました。

広田 こちらこそありがとうございました。Cさん、労働省でも組合でがんばってらしたでしょう。

C いえいえ。労働省辞めて、経済企画庁にずっと勤めました。企画庁をやめてからコンピュータの会

社に入って最近までコンピュータをやっていました。労働省は算盤でやっていましたよね。企画庁に行ったら電卓でしょう。それから大型計算機に。計算機の変遷を歩いたようなものです。

広田 本当に計算機械の変化はすごいですね。労働省は一番後発の役所なのである意味で自由があったのです。特に統計調査部はのびのびと勝手なことをしていました。労働省のこともぜひ記録してください。労働省にはその後偉くなった人が大勢いますね。高橋久子さんと赤松良子さんが二人で訪ねてきたとき、赤松さんは私に「まだ課長にならないのか」と言いました。

斎藤 赤松さんは均等法に貢献されて……。均等法の時毎日国会に傍聴に行っていたのですが、大臣に質問すると必ず赤松さんが答えましたね。すると、普通の議員はとも太刀打ちできない。婦人問題懇話会でずつと一緒に女性問題を勉強していた仲間だけに、複雑な気持ちでした。

広田 あの頃は「あごろ」がすごく噛みついてましたね。

斎藤 「禁等法」だと憤って、号外まで出したんですよ。

広田 女子保護撤廃と抱きあわせて均等法見直しが国会に出ましたが、問題は無条件の「保護撤廃」。均等法は元来女子差別撤廃条約の申し子です。うっかりすると鬼子になる恐れが多分にあります。

斎藤 「均等法」が、世論に及ぼした効果は大きかった面もあり、「男女平等」があれ以来言いやすくなりました。しかし、額面と現実が違いますね。肝心の所で歯止めがない。国会の情報が公開されず、あつという間に悪法ができて結果だけが公布される。怖いですね。

広田 その点、清澤冽の『暗黒日記』時代と変わらないですね。これだけのよい条件を身に付けている人たちがいっぱいいるのに、もう少し何とかしなけりやという気がしますね。

E 私は均等法の恩恵を受けた世代というか、法律が施行されたのが八六年、企業が採用活動に取り入

れたのが八七年。親なんかコネがなくて大企業に入れるかと心配していたようですが、機会が広がって私のように働く人が一時期増えたのです。その後うちの会社も採用ゼロになったり、今は大卒は基本的には総合職しか取りません。労働省への不満としては、最近女性が不況と共にかなり厳しい境遇にある。労働者の数自体減っていて、数字でも捉えられるのに、あまりそれを宣伝してくれない。マクロ的に見て女性の環境が悪くなっているという関心を高めることが役目だと思うのですが、この十年の女性の社会進出が一層進んだような情報操作をしている。

広田　とんでもない労働省の買いかぶりですよ。ごく少部分が飾りの役割を果たしています。こんなことと言って悪いけど、赤松さんだって高橋さんだって国際婦人年のおかげで文部大臣や最高裁の判事になったけど、本当の意味でいい仕事ができているかどうかはこれからの問題です。

今一番考えなくてはならないのは、働いている女性がどんな状況に置かれているかということ。働く女はどんどん増えているのですよ。増えているけどパートとか派遣とか、そういう形でしか増えていないのです。最近調べたところでは、九五年の民間のパートのボーナスを含めた二時間の賃金は、常勤の女子を一〇〇にして五九です。

E 私個人としてはラッキーだと思うし、そこで頑張るのも一つの役割かと思っていますが、それと客観的条件整備は必ずしもセットになってない。客観的に企業の内部構造に生かせるともっと変わるなという気がするのです。

広田　総合職でやってらして、時間の問題とか昇進の問題とか、どうですか。健康的に拡大再生産の方向にあるのでしょうか。会社によって違うと思いますが。

E　繊維業の大手なんですけど。

広田 それなら女の人は比較的働きやすいかも知れませんか。そう言っても総合職の女の人は非常に少ないでしょう。組合はありますか。

E 三年前から組合はあるけど頼りにならない。職場職場で現実はどうなるか決まるのです。人事部が総合職で採った女性をはじめ、トラブルがあつて辞めたいと言つうばあい、チェックがあつて、それが中間管理職の評価になるので圧力になってます。

広田 上からのお任せでなく、あなたたち四大卒の人が「こうしてほしい」と、感情的にならずに客観的に押さえる工夫することだと思います。そう言うことができる組織はありますか。

私は最近『働く母たちの定年』という本をまとめる仕事に関わつてつくづく思ったのは、かつては婦人部や組合があつて働き続けることができた。ところが今や組合も婦人部もないところが広がつてきたでしょう。しかも育つてきた環境が競争に勝つためだから、学歴は高くなつていくけど皆で協調して何かやるという姿勢がないのです。そのことで結局辞めざるを得なくなる。マイナスの方向に進む道を自分で作っているのです。

E 結婚すると続けられないんですよ。結婚しても子どもを生めないんですよ。

広田 そこが一番問題ですね。結婚していいとか、独身だつて本当の独身でないこともあるし。子どもがいてその面倒を見る人がいない場合、総合職の仕事はやっていけないのが実情ではないですか。結婚して子どもを持つとどうなるかが新しい問題として起きてくるでしょう。

外国だつて働いている人はたくさんいるけれど、もつとのんびり働ける条件を確保しているでしょう。昼休みだつて長いし。日本みたいに男並み、三六協定を結べば無限に働ける、では、まるで野放しでしょう。協定を結ばなくなつてあまり問題にならない戦国時代です。そういう男の労働に女がついていけと

いう。女は結婚したら辞めろ、子ども生んだら辞めろ、でしょう。企業は辞めた方がいいんです。夫も妻も働いてやっと人並みに暮らせる時代なのに、男の労働密度を高めれば女は辞めざるを得ない。女は家庭で家事労働者として、仕事ならパートで働いてくだされば結構ですというわけです。それに乗ったらどうしようありません。均等法とも抱き合わせにされた労働基準法の保護撤廃は、まさにその趣旨です。そこに四大卒が飲み込まれたらどうなりますか。今の就職戦線の右往左往を見ると、飲み込まれているとしか言いようがない状態です。

斎藤 総評が解体され、労働運動がなくなったなかで、向こうの思うままになっている。これからのたたかい方はほんとに大切ですね。私はこの間、東京近郊の町に呼ばれて行きましたら、テーマが「少子化」ということでした。なぜ少子化を取り上げたかと聞くと、「女が働くようになって子どもを生まなくなったから、自分たちの年金が出なくなる。これは大問題だ」と。私は驚いて「主婦がみんな働けば年金なんか解決する」と言ったんですが、マスメディアの言うことをそのまま鵜呑みにしているんですね。私は「日本は少子化によって国際貢献しているんじゃないですか」って、あえて問題提起しておきましたけど、自分の頭で考えない人が増えたのは、怖いですね。

総合職の希望が増えると、それに付加したものを要求されますから、どういうふうにたたかうか難しいところがありますね。別の機会にゆつくりその問題を考えたいと思います。

D お母様が短歌を随分作ってらっしゃいましたね。

広田 母も歌を詠んでいましたが、この本では一首だけ。あとは私の歌です。恥ずかしいけど、空襲の歌など臨場感があるでしょう。あの時期は万葉集を抱えて歩いていたので。齊藤茂吉が『万葉秀歌』出していた頃です。若干万葉ばりの歌もあるのです。



斎藤 話は変わりますが、日露戦争の時の徴兵忌避のお話、私は親から、日清・日露とも日本人は決して喜んでいなかったと聞かされ続けていましたので、広田さんのお話に納得しました。

広田 神仏に凝り固まったり迷信に迷わされたりしない生活ができていたところでは、徴兵忌避の気持ちが表示たない形であつたと思います。農村では働き手が取られるわけだから、自然発生的におこりも出てきたのでしょう。今こそ具体的な例をたくさん集める必要があると思います。

斎藤 親に聞かされた話では「梅干し一つ」とか、「どこまで続くぬかるみぞ」とか、当時、民間から発生した軍歌は、全部厭戦歌だつたそうです。メロディーが短調。悲しみを込めて一つのメディアとして戦争反対を伝えたのに、だんだんメディアリテラシーがなくなつて、反戦歌の意味がまるで戦意高揚の歌であるかのようにすり替えられていった。そのへんに日本の危機的状況の始まりがある、と。そういうことは日本史には出てこないんですが、農村なんか特に切実だつたのでしょね。死活問題ですからね。広田 一方には農村は貧しさが広がっていたのです。兵隊に取られることでご飯が食べられる。白米が食べられる。そういうことが意味を持っていたことも見逃せません。

それからもう一つ、農民は体が鍛えられているでしょう。農作業は大変な労働ですから。大学出のインテリなんかグニャツとなるのに対して、しゃんとできる誇りを感じること、戦意高揚の手助けを気が付かないでしてしまう場面もあつたと思うのです。下士官くらいになると、威張ることもできる。変な形で軍国主義化の梃子の役割を果たした。そういうことも分析してみると面白いですね。

斎藤 おたずねしたいことがますます出てきたところで残念ながら時間になりました。今日は本当にありがとうございました。皆さんまたお越しください。

あごら 25 周年集会のお知らせ

『あごら』は今年2月で創刊25周年を迎えました。これもひとえに、支えて下さった多くの皆様のおかげです。

感謝の気持ちをこめて、ささやかではありますが『あごら』と戦後フェミニズム情報
報の足跡を改めて振り返る集いを企画いたしました。ご参加をお待ちしております。

日時：8月3日（日）第1部 午後3時～6時

第2部 午後6時半～9時

内容：第1部 シンポジウム「戦後フェミニズム雑誌の流れを見る」

パネリスト 舟本 恵美（女・エロス）

斎藤 千代（あごら）

福田 光子（あごら）

第2部 ビュッフェパーティー 各地からの近況報告、交流

会費5000円（会員）7000円（非会員）先着100名

ハガキまたはFAXでご予約下さい。会費のお振込みをもって、予約受け付けとします。（郵便振替00100-0-5264 BOCあごら編集部）

会場：「四谷区民センター」11階第2・第3集会室

地下鉄丸ノ内線新宿御苑駅大木戸門口下車、新宿通りを四谷方面に徒歩3分
大木戸交差点（新宿御苑大木戸門前）※あごら事務局から2分です。

★宿泊場所が必要な場合は、会場近くの8000円以下のホテルを手配いたします。

★なお、各地域で開催したい、との声もあり、ご要望があれば、謝金なしで出張します。ご連絡ください。

★大阪は7月10日（木）6時半からクレオ大阪北（阪急淡路駅7分）で行ないます。

〒160 新宿区新宿1-9-4-303 TEL03-3354-3941 FAX03-3354-9014 あごら事務局

あごら 230号 ●発行 1997年6月10日

●編集 あごら新宿

●発行所 あごら MINI 編集部 〒160 東京都新宿区新宿1-9-4

●TEL 03-3354-3941 ●FAX 03-3354-9014 ●振替 00100-0-5264

●定価 本体1300円＋税

この ひろい宇宙に
たった一つの地球
その 大きな地球に
たった一人のわたし
そして あなた

かけがえのない地球
かけがえのないわたし
かけがえのないあなただから
たいせつに たいせつに しよう
あなたも
わたしも
地球も

たった一度きりの人生だから
思いきり
のびやかに生きよう

だれもが だれをも
ふみしだくことなく
胸の底まで深く息をし
ああ 生きててよかったねと
ほほえみあえる地球にしよう

へあごらへ

人と人の出会うひろば

へあごらへ

人と人の共に生きるひろば